

お兄様は嫁がせたい

たらこ40

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それなりに長く、それなりに辛い人生を生き、気が付いたら涅槃に至った主人公。特に特別な死に方をしたわけではないのだが、気が付いたら目の前には自称神を名乗る男がいた。

旅の恥は掻き捨て、ならぬ転生時のチートは欲張れ、とばかりに自称神様にあれこれ要求を叩きつけ、ほぼほぼ満足いく結果を得て転生する事になったのは良いのだが……。

生まれ変わった先は、剣も魔法もアイテムボックスも特に必要のない現代を舞台とし

た「かぐや様は告らせたい」の世界だった。

しかも、白銀や石上などの主人公側ではなく、微妙に悪役な「四宮雲鷹」として生を受ける事になった。

生前、大好きだった「かぐや様は告らせたい」の名シーンを見る為、妹であるかぐやを白銀に嫁がせる為。

いま、半端な悪役、四宮雲鷹のチートな人生が始まる。ほとんど使う充ての無くなつたアイテムボックスや魔法に涙しながら。

目次

よくあるプロローグ | 1

人を振るのは辛いな | 11

黄光の呼び出し | 31

清水名夜竹さん | 42

惚れた女を信じる辛さ | 55

早坂愛の苦悩 | 73

貴女は私の使用人 | 91

お兄様は……同居……すんの？ | 105

早坂奈央はわかりたい | 119

四宮邸にて 二人の八雲 | 133

原作の開始 秒読み | 145

かぐや様は兄さまを…… | 157

お兄様は帰国しました | 177

お兄様は告らせたい、白銀に | 193

約束のやり直し | 208

お兄様は見守りたい | 219

早坂愛は癒されたい | 236

お兄様は誘いたい | 252

お兄さまは参加したい | 262

アソート1 | 273

お兄さまは共犯者 | 284

対象Fは遠慮したい | 296

緊急ミツシヨン コーヒーを入れ替えよ | 308

アソート2 | 319

同衾イベント発生中	332
夏休み寸前	347
四宮家にて	357
会食を終えて	370
アソート3	383
好きになれそうな夏休み	398
切り取られた都会を見つめて	410

よくあるプロローグ

死んだときの記憶は無い。よくあるトラックにひかれたのかも知れないし、病気で死んだのかもしれない。

ただ、それなりに長生きした記憶はある。結婚は、まあ出来なかつたが、平成から令和にかけて晩婚化はますます進んでいたし、自分から動かない男にチャンスがある訳もない。

ああ、勘違いしている奴が沢山いるだろうから言っておくけど、彼女が出来ない、結婚できないってのは外見や収入が悪いから、が全ての原因じゃねえからな。

単に、理由はどうあれ自分から動かないからだ。もしくは節操なしに手あたり次第食い散らかしてりゃ女にも愛想をつかされるだろう？

現に、ブサメンでも低収入でも結婚して子供作ってひいひい言いながら何とか生活している奴もそれなりにいるし、いつそ開きなおつて生活保護を受けたり、保護費を増や

す為にガンガン子供を作る奴もいる。

そういう奴を見習えって訳じゃねえけどよ。「神は自らを助くるものを助ける」だっけか？顔も金もないなら、自分から動かなければ女を捕まえることは出来ない。待つていれればいつか目の前に自分に好意を持つてくれる女の子がやつてくる、なんてことは現実的にはあり得ない。

そういう事に気が付けた時には、俺はもうかなりいい歳になっちまっていた。そう、縁側で緑茶を啜っているのがお似合いのな。だからずつと独り身だ。恋人は右手だけ。笑つてくれや、プロに筆おろしを頼む勇氣すらなかった。いや、店の前まではいったことはあるんだ。ただ、急に謎の震えと汗が出てきてな。自分が酷い奴の様に思っちゃまつて。そのまま自宅へUターンしちゃまつた。

最初も言った通り、死んだときの事は覚えてねえ。覚えてねえが、まあトラックにひかれたつて事はねえはずだ。晩年は足腰が悪くなつて、自宅のアパートから出る事も殆どなかったし、多分、ボケつて……ああ、いまはそう言っちゃいけねえんだっけか？

まあ、認知症つて言うのか？それになつていたはずだ。辛うじて残つている記憶の一

つに頭の葉だつて言われて呑み続けていたつてのがあつた。

家族は誰も居ない。親は当然先に逝つた。兄弟はとつと死んじまつたし、俺の世話をしてくれるものは誰も居なかつたはず。

よく覚えてないけどな、多分、行政やら福祉やらに面倒見てもらつて大往生したんじゃないかね？毎日よく分からない中年のおばちゃんのうちに来ては家事をして、最後の方は看護婦とかも来ていた気がする。ぼんやりとだけどそんな感じがする。最後は自宅で、だつたのか病院でなのかは本当に記憶の欠片もない。

んでだ、死んでみて吃驚とはどつかの映画のコピーだが、二次小説にありがちで一期流行つた神様転生つてのをする事になつた。

何でも、神様にも都合があつてな。俺みたいな魂の大きな奴を捕まえてきては、自分の為に働かせているんだと。曰く、「人が食事をする為に食器やシルバーを使うのと同じように私にはお前たちが必要なのだ。」だとさ。

神様が何を食べるのか、怖くてとても聞けなかつた。小腹が空いたからとか言つてパ

クリとされても俺には何一つ抵抗できやしねえ。

神様の道具になる、その報酬は再びの人生、いや幾たびも人生を歩める権利と義務。そして力を使えるようにしてくれる事。

力つてなんやねんって思わんでもないが、まあ俺みたいなラノベや二次小説好きな奴なら耳にタコができる位に聞いたことがあるだろうチートって奴だな。

神様は「チートずるではない、お前自身の魂に方向性を与えて力を使えるようにしているだけだ。」って言っていたけどな。

この魂の力を引き出せる位に大きな魂を持つ人間って言うのは滅多にいないんだと。だから俺が拒否しようが関係なしに転生させられるらしい。

道具つて、何をすればいいのか不安だったけど、慣れないうちに只生まれ変わって普通に生きて行けばそれでいい、らしい。縁だとか、世界のひずみとか色々教えてくれたけど、よくわからなかった。

後は、慣れてきたら、出来るだけ世界に影響を与えるような生き方をしてくれると助かると言われた。その内勘所がつかめてくる、それまでは好きに生きろ、だとさ。

んで、どういう力が良いか、って聞かれたから色々テンプレートな要求をしたよ。まずアイテムボックスの様な収納系の能力は当然だろ？後は鑑定とかか？

どういふ世界に行くのかは分からんから、それなりに欲張らせてもらったつもりだ。優秀な頭脳、強靱な肉体、出来れば不老不死。あ、でも死にたくなつた時に死ねないのは悲惨だから、死にたい時はサクツと死ねる様にしてほしいとまな。

後は魔法だよな、魔法。一々修行しなくても色々魔法が使えれば便利だし、どんな世界に転生しても役に立ちそうだ。何せ俺は魂が大きくて魔力も多いらしいから、どんな魔法も使いたい放題だろうし。

まあ、神様の答えは社会の荒波に比べればかなり甘く、それでも微妙に甘さが足りなかった。俺が望んだチートは、殆ど神様がデフォルトで付けてくれる初期チートだったみたいでな。それもこれも、道具である俺が簡単に死んでしまうと、俺を使徒にする為に使ったコストが赤字になるから、だよ。

出来るだけ一つの世界で長く、効率よく神様の食器係を続けてほしい、と。次の世界でも、その次の世界でも可能な限り魂がすり減るまで。

ある意味地獄に落ちたと言えなくもないかもな。

んで、他のチート、鑑定は対象物を精査し自身の知識と突合する能力なら作れるが、所謂アカシックレコードの様な知識の集合体にアクセスするのはお勧めできない。人の心のままでいたいのならって脅された。

同じように、魔法についても簡単な魔法は使える様にしてくれるし、あらかた知識は刷り込んでくれるけど、後は自分で研鑽しろってさ。

まあ、神様なりの理由があるんだろうな。ただ、俺としてはまあ、魔法が使えるならそれだけで十分だし、不老不死なら危ない世界に行く事になっても何とかなるだろうと気楽に考えていた。

どんな世界に転生するのかだけは神様は教えてくれなかった。

「特にプレッシャーや試練を与えるつもりは無いし、与える意味もない。人間的な成長はこの際、無意味であるしな。だが、お前はこういうサプライズを好む人間だろう？」
たしかにつまらん人生を生きてきたせいかわりに友人が企画してくれたサプライズは良い人生の潤いになったのは確かだ。

ただ、ちよつと、な。神様のサプライズなんて怖くてどうしようもねえよ？

「ふむ、心配する必要は無い。最初の転生、尚且つ歩き方を覚え始めたばかりのお前を

直ぐに死ぬような危険な世界に送るような事はせんよ。

何度も言うが、別にお前に苦難を与えたいわけではないからな。

お前の記憶にある、お前が好きだった幾つかの作品からランダムで産まれる先を選んだ。無論、誰に産まれるかもランダムだ。登場人物に産まれるのか、モブに産まれるのか。男なのか女なのか、全て無作為だが産まれる年代は原作に絡む事が出来る時期だ、とだけ言っておく。」

そう言うと、俺が言葉の意味を飲み込める迄じつと待つ神様。やがて理解が及んだことを察した神様が「それでは良い旅を」と一言告げると俺の意識が遠のいていく。

意識が完全に落ちる前に「ああ、産まれてから直ぐに君の記憶が戻る事は無い。恐らく10歳になるまでには今の記憶を取り戻せるだろう。なに、サービスだよ。」と言う神様の言葉に感謝の言葉を口の中でつぶやいたのが、俺の最後だった。

そうは言っても、生まれ変わってからここまで完全に俺の記憶が無かった訳では無い。流石に赤ん坊のころは何も覚えていないけど、ぼんやりと「俺」の意識が今の俺と重なって新しい人生を見てきた。かなり裕福な家庭で、富豪の後妻の子として産まれ

た。

年の離れた兄達には相手にされなかった。母は小学校に上がる前には死んでしまった。上流階級に産まれたせいでもかなり厳しい教育を受けた。それが厳しいのだと理解できるくらいには少しずつ「俺」の記憶が俺に流れていたのかもしれない。

ただ、神様からもらった優秀な頭脳、強靱な肉体は持ち前の高魔力に支えられ期待通りに常人を遥かに超えるスペックを叩き出してくれた。お陰で厳しい教育にも難なくついていったし、幼いながらも天才と呼ばれていた。

戯れにピアノに初めて触れてみれば、少々たどたどしくとも楽譜を初見でシヨパンを弾ききった。この辺は前世の経験が出てきたのかもな。

スポーツをしてみれば年上のプレイヤー相手に圧倒して、プロのアスリートからは将来が楽しみだと絶賛される。家庭教師に教わる前から様々な知識を披露し、小学生の勉強など教育を受けるまでもない。まあ、前は三流の文系とは言え大学を出ていたから、そのくらいは神様のチートが無くて何とかなるけどよ。

あんまり人間離れをしていたせいも不気味がられてはいたが、幼稚園に通う前から実家にある図書室に通い詰めていたおかげで、さもありませんと一部の人達には納得してもらえた。

ぼんやりとした意識の中で、ああ、剣と魔法の世界じゃない、現代日本に産まれたんだな、と理解できたが「俺」の方の頭はほとんど眠っていたようでその他はよくわかっていなかった。

母が死んだことも、帝王学を含む厳しい教育課程も、兄達から俺の才能に関して嫉妬じみた嫌がらせも、唯一の親が愛情をくれない事も、それほど苦では無かった。

この世界の親については、二度目のせいもか真実、親、だとは思えなかったし、兄妹に關しても俺を嫌う理由は理解できる。

一度老境に入った経験があるからな。今更肉親の薄情に嘆くほど純情でもない。それと仕事とはいえ他者の親切の有難さもあの頃は日々感じていた。だから今も側に仕えてくれる子には普通に感謝できていた。

そして、10歳の誕生日を数か月後に控えた頃、ほとんど寝ていた状態の「俺」と俺が一つになった。神様の言う、記憶が戻ったという事か。

そして速やかに床に崩れ落ちた。自室での休憩時間で良かったよ。

いや、良いんだ。俺この作品大好きだから。あの二人が幸せになる場面をこの目で見届ける事が出来るのならファンとしてこれ以上の喜びはない。もちろん、原作では語られなかった後輩二人の恋愛頭脳戦を鑑賞できるなら猶更だ。だからこの世界に産まれた事は本当に嬉しい、んだけど、何で俺が「四宮雲鷹」シノみやうんようなんだ。

そう、俺は若い頃から好きだった「かぐや様は告らせたい」の世界に産まれてきたのだ。それもよりによって、この世界のヒロイン……は作者的には藤原千花という説もあるけど、メインヒロインである四宮かぐやの腹違いの兄で、半分敵役の、そして彼女を冷たい氷のかぐや姫に育ててしまった自称屑人間、四宮雲鷹、に。

ああ、好きなキャラクターに嫌われる人生しか見えない。

人を振るのは辛いな

とは言え、俺もまだ10歳にならない年齢。原作での雲鷹おれが初登場したのが何歳の頃かは分かんらんが、黄光兄さんが今大体30前、青龍兄さんがもう少しで成人って所だと思ふ。

原作の頃の黄光兄さんって60歳位だよな？青龍兄さんも50代って感じかな。多分雲鷹が作品に登場したときってあの描き方から見て多分30代後半〜40代前半って所だと思ふ。

親父が清水名夜竹さんを見初めたのが60歳から70歳の間。原作時最大で90歳手前、恐らく80代だつたらうな。

つまりかぐや様が産まれるまであと15年から20年近くの幅があるって事だ。いや、いくら好きなキャラクターとは言えまだ生まれていない、しかも自分の妹を様を付けて呼ぶのはおかしいか。

彼女が高校に入学する時には俺は中年を超えて初老になっていて塩梅だな。とは言え、どういう風に作用するかは分からないけど、俺は不老不死という事になっている。絵面的には原作の様なおっさんにはならないとは思うけど、それはそれで原作ブレイクしそうで困るのだが。

改めて鏡で確認すると、顔つきが原作とかなりかけ離れている。魂に刷り込まれた知識から判断するに高魔力を持ち、尚且つそのコントロール技術が未熟な場合、魔力が肉体に干渉し、自身を理想化^{ハンサム化}してしまう現象があるようだ。

つまり今の顔が俺にとつての理想って事か？少々鬱だな。

10歳にしてシヨタコンなオバサマ連中を虜にする美少年になってしまった。パーティーに参加するたび、オバサマに彼方此方に引っ張りだこだ。

まあ……、なるようになるだろうさ。

現在アラサーの黄光を兄さんと呼ぶのにちよつと違和感がある。前は少なくとも認

知症が発症するくらいには生きてたからな。精神的には年下だし。ただ、まあ肉体力は魂や魔力に引き摺られ、精神年齢は肉体に引き摺られるらしい。

お陰で子供っぽい仕草も違和感なく自然に出てくる。

家族に不審がられる事なく何とか「兄さん、兄様、兄上」と呼べている。その時によって呼び方が違うあたりが、内心の動揺を表しているが。

相変わらず非友好的な視線を投げかけてくる二人の兄を適度にいなして、幼いながらに身に着けさせられた帝王学、処世術に沿って自身を卑下しない程度に下手に出て友好関係を維持する。

幾らチート持ちの化け物とはいっても、俺はまだ10歳そこそこのガキだからな。いずれ嘸みつくにしても今から牙を見せる必要は無い、し……。ま、正直、後妻の子供に隔意を持つのは理解できる。

後妻さんに前妻の子供が惚れてしまう話もそれなりにある話だ。臃げな記憶ではあるけど青龍はどうも俺の母に気が有ったらしい。

原作ではどうだったかは分からんけど、ひよつとしたら、これが後日無責任に夜遊びを繰り返した原因かもな。そら、その子供に対して複雑な思いをもつてもおかしくないわ。

とは言え、いずれは黄光兄さんの様に家の為に結婚させられるのだから、可能なら家庭円満に暮らしてほしいものだけだ。

まあ、今までも遠慮していたわけではないけど、折角神様からもらったチートだ。今更遠慮するのもおかしい話だし、神童も二十過ぎればただの人、という言葉もある。ここで多少無茶をしても原作開始前には、「雲鷹も昔は天才と呼ばれていたんだ」ですむだろう。原作に影響は無いはず。

そう割り切って、勉強にスポーツに手加減なしに突っ走る事にした。四宮の本家は、二人の兄とも地元の京都の上流階級の通う学校に通っていたけど、俺は二人にやつかまっていたのと、親父にも何故か少々煙たがられているようで、小学校から秀知院学院の初等部に放り込まれた。

かぐやが暮らす事になる東京の四宮邸はその時に建てられた物だな。

親父は、まあ、後妻とは言え早くに亡くした事と、母親の面影を持つ俺を見る度に辛かったのかもしれないけど。意外とあの親父、か弱いところあるよな。

それと、俺が後妻の子だからか意外と四宮の親戚連中も圧が強い。

何せ原作では四宮のカリスマであり独裁者でもある親父が最後に愛した女、名夜竹さんを排除しようとしたから。甘いはずがない。

まあ腹の子が誰の種かはつきりとは分からない、と言うのがその理由だけでも。

そんな事を考えながらも、順調に小学、中学、高校と主席を維持しついでに中等部で二年、高等部で二年、生徒会長を務めて秀知院に輝かしき伝説を作り上げておいた。ああ、この時点では秀知院の理事長は親父だから。周囲も納得、というか投票時にあの程度の忖度も働いたんだと思う。

普通に原作に影響を与えそうだけど、大した影響は無いはずだ。

高等部からの進路には少々迷った。このまま国内の大学に通うか、原作の白銀宜しくスタンフォードへ行くか。いや、スタンフォードに拘る必要は無いだけどさ。

早いうちから国内で根を張り、四宮に影響力を持つべきだという考えもあるが、将来の四条家との抗争、その後のかぐやの手打ちに備えて海外で強い影響力を持つ四条に対

抗するために海外に行く手もある。

原作の四条家の四宮家への攻撃は一部過激派の暴走、って事だったからそれが真実なら、どんな手を打つても暴走する時は暴走するだろうけどね。カウンターを撃てるなら撃つておいた方が良いよな。

いや、やり過ぎてかぐやの和平交渉に影響を与える可能性もあるか。その時に然るべき人物に相談すべきだな。

俺は人間離れをした優秀な頭脳を持っている事は間違いないんだけど、基本、馬鹿だからな。矛盾しているようだけど、間違っていない。中身は三流文系大学をやつとの事が出て、ブラックな三流会社に入って一生をひーこらしながら生きてきた人間だ。

例えるなら普通車の免許証を取ったばかりの人間が、大型ダンプカーを運転したりF1カーを動かしている様なもので、我ながら危なっかしくてしょうがない。

自覚ないままお馬鹿な結論に全能力をつぎ込んで突進しそうで、たまに怖くなる。

ただまあ、単純に勉強をしてテストに回答するという単純な作業に関してなら、こん

なんでも無類の結果をだせるからな。

スタンフォード入学に際して成績その他には特に問題ない。

四宮内部への影響力に関しては、学生の内から既に親父から幾つか経営を任されている会社もある。そこを足掛かりにすれば、数年のロス程度なら原作に大した影響は与えないだろう。むしろ、このまま四宮内部を侵食して行くと黄光兄さんを差し置いて俺が後継者に推される可能性もある。

単純に人間離れた才能は、時に血統の序列を超える事もある、って事だな。

才能と血筋だけじゃない。既に個人資産は10ケタの後半に迫っている。この資産は初期資金として幾らかは親父から借りたが、後は自分で増やしたものだ。

融資された資金もとうに利息を付けて返済済みだ。

うん、占星術を基本とした2択の未来を、9割以上の確率で正答できる未来予知の魔法は投資においてはまさしくチートだな。同じ未来を繰り返し占う事で予知の正確性を限りなく100%に近づけることも出来るし、その上でリスク分散すればほぼノーリ

スクでハイリターンの投資が行えた。

ポンド為替うめえ。いや、人によつては殺人通貨とも言われているポンドの為替取引も、ほぼ100%動きが分かつていけば、単なる狩場と化すからね。正しく「チート」だよな、これ。俺が稼いだ分、どこかで誰かが首を括っているかもしれないって思うと、ちよつと心にクる物がある。

当然、為替だけで資産を築いた訳じゃないけどさ。

それにしても黄光兄さんを差し置いて、四宮の後継者に、かあ……。俺なら出来なくは無いだらうけどね。

ただ、それだと乙女的に……。ではなく原作的にOUT。

ラスボスは俺じゃなくて兄さんに担当してもらいたいものだ。かぐやに、好きなキャラクターにはあんまり嫌われたくはないじゃないか。途中嫌われるにしても最後にはちゃんと和解したい。

そうするとやはり一度外に出るべきか。親父や兄を説得するネタならいくらでもある。四条家を出汁にすればいくらでも、どうとでもなるだろうな。

四条家、か。原作の雲鷹さんは四条家と早坂家に強い憎しみを持っているとか言われていたよね。早坂家の方の恨みはわかる。現在進行形で早坂ママさんが俺の側仕えをしながらスパイしているし。いや今はまだママさんじゃなくて奈央さんって呼ぶべきかもしれないけど俺的にはママさんかな。

原作の雲鷹ちゃんとは、純粋な人だったのだろうね。人に付けられた側仕えを信じて色々と情報を漏らしちゃったのかな。もしかしたらママさんに惚れちゃったりもしたのかもしれないし、早坂ママも女を匂わせる事で雲鷹ちゃんから情報を抜いていたのかもしれない。

あれだけ憎むという事は裏を返せばそれだけ信用し、心を預けていたという事だから。最初から信用一つしていかない人間が裏切ったところで、心には波一つ立たんもんだよ。俺みたいに。

ただ、四条家に対しての恨みと言うのがよくわからん。少なくとも現時点で雲鷹である俺に四条家を強く恨むような事件は発生していない。関りもそれほど深くないし、単に自家の敵ってだけの関係性でしかない。

既に本来の雲鷹ちゃんルートから外れてしまったのか、それともこの後それなりに恨む切欠が発生するのか。

原作、かぐやが四条真妃と初めて会ったのが17歳から数えて十数年前。十年じやないって事は母親の七回忌より前って事だ。4歳から6歳って所か。いや、小学校入学前、5歳位だな、恐らく。十数年、だからな。

その時には既に雲鷹ちゃんは四条家に強い恨みを持っていた。パーティーで出くわした四条家の、恐らく党首を分家の鼠呼ばわりして侮辱していた。女でも寝取られたか、それとも早坂家とも何か関りがあるのか。

早坂家に関してもし裏切り者のドブネズミって表現を使っていたからな。鼠繋がりではてさて、何があったのやら。

中身も外見も原作の雲鷹とは別人になってしまった今、それを知るすべは俺にはない。

溜息を一つつく。考え事をする、ため息が漏れるよね。

アイテムボックスに入れておいたナツツを一袋取り出し、誰も居ない生徒会室でちよいと摘まむ。普段、手ぶらで過ごしても必要な物を直ぐに手にする事が出来るこの能力は本当に便利だが、現代社会に魔法とか異能力って、ほとんど必要ないんだよな。

強力な攻撃魔法を取得しても、平和な日本で生きる分には、どれだけ破天荒に生きてもほとんど必要ない。最近になってからは投資の方も落ち着いたせいで未来予知の魔法も使用頻度は少なくなってきた。

そうなると魔法なんて精々、情報収集の為の盗聴や盗撮をバレずにできるというくらいのもので、一歩間違えれば性犯罪者呼ばわりされてもおかしくない状況になってしまふ。

現代社会をまっとうに生きて行く分には、魔法は必要ない、という結論が出る。むしろ魔法がバレれば日常生活が脅かされることになるしな。

転生してからここまで、基本的には優秀な頭脳、強靱な身体、アイテムボックスくらいしか活用する機会はないし、そのアイテムボックスも滅多に使わない。

必要になれば、側仕えに一声かければいいのだし、普段から常に側に誰かがいるから、かえってアイテムボックスを使う機会は少ない。

たまにこうやって生徒会室で一人になった時に、思い出したように菓子を取り出して摘まむくらいが関の山だ。

後はパーティーの時の余興で、ちよつとした手品の種にアイテムボックスを使うくらいだ。

もちろん、ちゃんと手品の範疇を超えない程度に抑えているから、怪しまれた事は無い。

何粒かアーモンドを口に運び、考える。後少しすれば副会長も所用から戻ってくるはず。考える時間はそれほどないけど、人外の思考速度を持つ俺にしてみれば、十分な時間がある。

考えるべきは、進学先だけではない。四宮の内部に根を伸ばすのはそれほど難しい事じゃないしな。能力的にも血筋的にも。何も四宮家全体を支配する必要は無いのだから。

だから、問題はそこではない。いずれ俺が育てる事になるかぐやの教育方針が一番の難題なのだ。可能ならば、かぐやに家族の愛情を味わわせてやりたいし、兄として頼りたい。

幸せになってほしいし、白銀御行の元へちゃんと嫁がせてやりたい。

だが残念ながら、これら全てを満たす事は難しい。

一番に達成したいのは原作の再現、かぐやを白銀御行に嫁がせたい、のだ。そこに集中すべきだろう？

原作通りの教育を施し、かぐやを氷の姫にしなくては白銀御行と結ばれることは無いだろう。下手をすれば四宮家の言いなりに四条家との争いの果てに四条帝に嫁ぐことになるかもしれない。

いや、四条帝は悪い男ではない。むしろ一途でかぐやを幸せにするためなら何でもする男である、と信じることは出来る。白銀御行が存在しないのであれば、彼と添い遂げる事がこの物語のハッピーエンドで間違いないだろう。

だが、それでは違うのだ。俺的には原作のCPを変えるなんて耐えられんのだ。あの素晴らしい結末を変える気にはならない。だからこそ、かぐやは氷のかぐや姫にならないくてはならない。

単純に俺のエゴだ。この件一つで俺はかぐやに兄として尊敬されることも好かれる資格もなくしてしまう訳だが。

それはそれで、この世界に紛れ込んでしまった異物である俺の最低限、果たすべき責任と使命だとは思う。

「考え事ですか？会長。」

いつの間にか生徒会室に戻ってきていた副会長が、私も一つ戴きますね、と皿にあげたアーモンドを一つまみして口に放りこむ。

アニメ世界にありがちな、ピンク色の髪をした副会長にちらりと視線を向けて「まあな。」と素っ気なく返す。

この副会長おんなは俺おんなに気があるらしく、分かりにくいモノから分かりやすいモノまで様々なアピールを仕掛けられて、さながら原作の白銀とかぐやの様な頭脳戦が展開されてきたが、原作と違うのは俺がこの女に惚れていないという点だ。

いや、惚れていないというのは嘘だな。前世を通じてずっと独り身で、恋人は右手で浮気相手は左手だった俺にとっては、ここまで露骨に好意をアピールしてくる女は初め

てだ。意識しない何て事は無い訳で。

ただ、黄光兄さんや青龍兄さんがそうだったように、俺達に恋愛の自由はあっても結婚の自由はない。既に何人か婚約者の候補が上がっていて、俺が大学を卒業した段階で結婚する事が決まっている。

本来ならこの時期ならもう顔合わせ位していてもおかしくは無いんだけど、予想外に俺の価値が上がってしまった為に、未だに婚約者が確定していないらしい。だが、いずれは他の誰かと結婚する事になる。破局が前提の交際など、女性に対して不誠実だし、彼女の人生を傷付ける事にもなる。

親父とはそれほど話す機会がある訳では無いが、婚約者候補が何人かいる事を告げられた際に、「変に歪まれても困るからな、結婚まで節度を守る必要もない。適当に遊んでおくのだな。ただ、相手は選べよ。」と言われたよ。

だからこの子に手を出したとしても四宮家的には問題はない。けれど自分の欲望を果たす為にこの子を傷付ける事はしたくない、と思うくらいにはこの子に惚れているのだろう。ただ少なくとも、「家族を捨ててでも一緒になりたい。」と思いきれる程強く、彼

女へ好意を持つことは出来なかった。

ただそれだけなのだろう。

親父の前にまだかぐやの母になる清水名夜竹さんは現れない。年齢から考えて今はまだ学生の筈。京都のどこかにいるのだろうか。探そうとすれば探せるだろうけど、その気になれない。俺が彼女を探したという事実が、未来をゆがめる可能性もある。

親父と名夜竹さんの間には、愛はあったのだろうか。全てを掛けても良いと思えるほどの。

名夜竹さんは心臓が悪いのに命を賭けて子供を、かぐやを産んだ。親父は本当に自分の子供かどうかわからないのに、調べる事もせず親戚連中を黙らせて彼女と子供を受け入れた。

原作では何度も調べようとして、結局できなかつたと言っていた。違ったらそれまでじゃねえか、と。

結局は、それが棘になり、延々と親父を苛む事になったけど、親父はどうすればいい

のか分からなかっただけでかぐやを愛していたはずだ。無論、名夜竹さんの事も。

だからこそ、あの金庫のパスワードがかぐやの誕生日と名夜竹さんの命日な訳なのだから。

もし、早い段階でかぐやが親父の实の娘である事を検査ではつきりさせてやれば、親父もかぐやも救われたはずだ。親父も病気に負けずにもっと長生きしたかもしれない。ま、激怒した親父に勘当されるかもしれないけどな。

ただし、そのルートを選べば、原作ルートからは確実に遠ざかる事になる。恐らく親父はかぐやを俺に預ける事はせず、京都の本宅に置いて手放さないだろう。その場合は帝ルートをとどる事になりそうだな。

前世通じて2期連続、ファーストシーズン、セカンドシーズン両方とも童貞である俺には少々、手に余る話だな。今はイケメンであるはずなのに、それなりにモテている筈なのに、未だに彼女の一人もいない理由。自分から動く事をしない理由。

自分でもよくわからんけど、愛が怖いのかも。いや、女が怖いだけかも。

原作のかぐやよりも積極的に想いを伝えてくる副会長。直接言葉にしなくても「好きだ」という気持ちは明確に伝わっている。そしてそれに応えない俺の気持ちも彼女にはちゃんと伝わっている筈。

時折する切なそうな表情が辛い。

どの進路を選ぶにせよ、破局する運命しかない彼女へのけじめをつけてからでないと、俺は先には進めない。

そう思い立ったが吉日とばかりに、邪魔者が入り込めないように副会長と二人きりの生徒会室の扉の鍵を閉める。今までこの手の話をしようとするたびに早坂が入り込んできていたからな。今回は先手を打っておく。

いや、わかるんだ。あいつの言いたい事は。せめて恋愛くらいは自由にしてもいいのではないか、てのはな。だから邪魔してきたんだらう。俺の決断を。

何故か俺とあいつの関係性がかぐやと早坂愛の関係性に似ていて少々笑みが漏れる。まあ、母親である彼女も娘と似た様な苦勞をする運命なのだらう。前述のとおり、この

側仕えが俺を裏切って、俺についての情報を親父か黄光兄さんに流している事は、原作の俺とは違つて承知している。

だから、あそこまで俺が憎しみに歪むことは無い。が、歪まんと原作通りの教育をかぐやに施せないかもしれん。最低限、契約主義は仕込んでおかねえと原作が崩壊する。後は人間不信な部分も仕込まんと。この辺は悩みどころだな。

本当に、この一件だけで嫌われるし地獄に落ちるよな。

ドアを閉めて鍵をかけるという突然の俺の行動に、吃驚しつつ「どうかしたんですか」。と少し震える声で聴いてくる副会長。

期待と恐れ? いや、彼女は聡明だ。今までの俺の態度で先がどうなるかは理解している筈。

ああ、これで俺の自意識過剰であれば恥ずかしいし、この先一生勘違い野郎のレッテルを張られてしまうかもしれないけど。

「近衛副会長、いや、二恵さん。少し話があるんだ。」

夕暮れに赤く照らされた生徒会室にポツリとした俺の声が染みて消える。

少しして涙をこらえた副会長が生徒会室から走り去っていった。

黄光の呼び出し

友人はそれなりに作れた。ジャンルを限らずあらゆる業界に人間関係を構築し、アメリカの財界では何十人か友人をつくった。友人、といつても顔見知りからビジネスでの付き合いがある者程度で、正直一般的な「友達」と言うものではないけど。

時折パーティーで集まって酒を呑み情報交換をする、程度は出来る友達だ。

10ヶタ後半だった資産は在学中には1ー1ヶタに増え、それなりに充実した大学生生活だったと自負している。

ちよいと誤解しがちなのが、アメリカの大学は実は入学するのはそれほど大変じゃないという事。とは言ってもスタンフォードともなると、それなりに大変ではあるのだけれども、日本の大学と違ってアメリカの大学は入学よりも卒業する方が遥かにハードルが高いのだ。

日本の大学の様に一度入ってしまえば、後はそこそこ出席して単位を取得していけば何となく卒業できる、と言う訳には行かない。いや、日本の大学も理系はそれなりに大

変らしいけど。

前世の時は、普通に三流の文系大学で学校に通うよりも雀荘に通った日数が多かった俺としては、普通にチートな頭脳が無ければとてもじゃないが熟せない大学生生活だったと今更ながらに振り返っている。

うん、そうだ。結局原作白銀と同じようにスタンフォードに行く事に決めた。全く同じようにまねしてアーリー受けて、当然の様に合格して、気まづくなった副会長から逃げる様に日本を出てきてしまった。

あれ以来、手紙も電話も彼女とはしていない。この時代はまだSNSやらは主流じゃないからな。電子メールも友人や恋人と使う連絡手段としては一般的じゃない。ましてや振った相手に連絡を取るなぞ敷居が高い。

大学卒業後も、せっかく作った人間関係を仕事に活かす為にアメリカに残っていた。四宮は四条とは違い海外が本拠地と言う訳では無いけど、それでも世界的な企業だからな。

当然アメリカにも四宮の関連企業はある。卒業後はそのままアメリカで活動するようになっていった訳だけど、これって下手したらこのままずっとアメリカ暮らしになって原作クラッシュスんじゃね？ってくらいに日本に帰る切っ掛けを無くして焦っていたりもした。

なにせアメリカで築いた資産もまたそれなりに莫大な額になっていたし、新たに自分で始めたビジネスも軌道に乗って、卒業後、俺の個人資産がちよつとエグイ事になってきたりしたせいもある。

このまま行けば原作開始までには流動資産、不動産合わせて12ケタに手が届きそうな感じだな。親父は13ケタだから文字通り桁違いだけど。

これももう日本じゃなくアメリカが俺にとっての本拠地になってるんじゃない？って思ってきているし、現地で雇った俺の新しい側仕えは日本人なんだが、アメリカに移住する希望があるらしく、俺にも今度グリーンカードを申請しようとか提案してきた。

却下したけど。日本じゃ二重国籍を認めていないし、俺はまだ日本人でありたいと

思っているからな。

ああ、そう言えば大学卒業後結婚するって話だったが、スタンフォードに入ってから暫くして婚約者が決まったのだけでも、卒業を数か月後に控えた時期、日本で交通事故に遭い、あつさりとは界してしまった。

在学中に何度かアメリカに会いに来てくれたし、俺も夏休みを利用して何度か相手方のご家族に挨拶をしに行ったりしていたのだけでもな。

正直、好きだったかはまだ分からなかったけど、この人と生きて行くんだと覚悟を決めていたし、そうなるのなら浮気などせずに一筋に生きようとも思ったんだ。

まだキスの一つもしていなかったよ。

彼女、真顔がちよつと真面目過ぎて怖い感じだったけど、笑うと笑窪が出来て可愛い人だった。

シヨックではあったけど、俺は冷たい人間なのかそれともあんまり彼女の側に居なかつたせいかな。現実感がないまま、あんまり長くシヨックは引きずらなかつた。

……いや、やっぱりそれなりにショックがあったのかもしれない。

時期的にそろそろ親父の前に名夜竹さんが現れてもおかしくない時期なのに、日本に帰る気力がわかないんだ。

いや、その時期に合わせて俺が日本に帰ってもどうなるってんでもないから、どうでも良いんだろうけどさ。

神様がくれたチートの魔法の中には死者を蘇生する魔法がある。習得難度もたいしたものでないし、今から数十年、もしかしたら十数年も魔法の訓練をすれば彼女を黄泉の国から取り戻すことも出来るかもしれない。死亡してからの時間はあんまり問題じゃないみたいだからな。この蘇生魔法。

ただ、蘇生には時間以外の別の要因が成否に影響するし、その条件を俺が現時点で満たしているとはとても思えない。大前提として魂の海に還る前に魂を保管しておく必要がある。それが出来なければ本人そのものではなく、本人そのものの別人を作り出す事になる、らしい。意味がよく分からんな。

何気にとんでもない魔法だとは思うけど、目的を果たせなければ意味がない。

まあ、難しく考える事もなく、手詰まりつてやつだ。第一世間的にも死者を蘇らせるなんて、大騒ぎになり過ぎる。やらかしのしても特級品のやらかして事になる。

巻き起こる面倒も、今までの天才がどうか言うものとはケタが違う。

そういう風に色々と「やれない理由」を考えてしまう時点で、彼女を真剣に愛していたわけではないのだろう。

わかっていた事だけれど、それでもそういう自分に寂しさを覚える。

傷心しているからと言って次の縁談を何時までも拒否できる立場ではないはずだし、数年もしないで本家から何か言ってくると思つていたけど、その後親父からも兄さんからも音沙汰が無い。

不審に思つて側仕えの者にそれとなく探らせたなら、縁談がこない事情が見えてきた。縁談に関して一番の決定権を持つ親父は、出来れば俺には閨閥を形成する為にも良家と

縁を結んでもらいたい。所謂四宮家に産まれた者の義務を果たせ、だ。

だけど婚約者を亡くした俺と妻を亡くした自分を重ねてしまつたらしく、急いで次を探す気になれないといった様子らしい。差し迫つた事情がある訳で無し、娘を亡くした相手方への配慮もある。家格に差があつたとしても配慮した様に見せるのは必要な事だ。

側近に、暫くは静観すると宣言したとか。

んで、次に決定権を持つ黄光兄さんはもつと直接的に俺の縁談に関して否定的みたいだ。理由は俺がただでさえ目障りな上に、次代の四宮家の希望という声も四宮家財閥内部でチラホラ出てきたから。これで有力な家と結ばれば更に自分の立場が弱くなる。

どの道いずれは誰かと結婚させなくてはならないが、可能なら自分の脅威にならない家との縁談を選択したい。だがあんまりあからさまにやれば親父にも、周囲の人間にも反感を買い余計に自分の立場を悪くする。だから直ぐには動けない。

因みに青龍兄さんが自分から積極的に動く訳もなく、今は奥さんをほおつておいて遊び歩いているらしい。この調子で彼方此方に種をまきまくっていたら、将来的に四宮家

の眷属が一体何人産まれてくるんだらうか。ちよつと怖くなる。

そんなこんなで幾つかの思惑が重なって、俺の縁談は延び延びになっているらしい。

「まあ兄さん達らしいな。折角追加されたモラトリアムだ。精々満喫させてもらうさ。」

誰に伝えるまでもなく漏れた言葉に側近が頷く。

とは言え、別に女と遊び歩いている訳じゃない。今も立派な独り身だ。大学生活の間も独り身を貫いた俺は、今では話しかけてくる女も滅多にいない。

原因の一つは年齢相応に見えないこのベビーフェイスのせいもあるだろう。不老不死の影響が高魔力の影響なのか、15〜6歳の頃から成長が止まったかのように顔立ちが幼いままなのだ。

魔力のコントロールを訓練すればある程度外見年齢を弄れるみたいだけど、魔法必須のファンタジー世界なら兎も角、使い所が今一ない現代社会。

最初の頃のワクワク感が大きい時期なら幾つかの魔法を必死になって練習もしたが、

使う機会が限られている上に常に他者の目がある生活を送るうちに億劫になって、殆ど訓練なぞしなくなつてしまった。

例外は投資の際のズルだけだな。

初対面の人に24歳だと相手に告げると大抵はちよつと引かれる。その代わりその筋の趣味の女性には大人気だったりする。不本意だが。二十代後半のマダムがリアルに舌なめずりした時には、身の危険を感じたよ。不老不死なのに。

そういう方には先方からの接触は遠慮させてもらつている。怖いし。最近では側仕えの者達が俺の意を酌んで、そういう人が近寄らないように色々と手を回してくれている。

まあ、ベビーフェイスの件は兎も角、縁談が持ち込まれない以上、本家とは世間話をする仲でもないからな。しばらく接触は無いだろうと考えていた。

だからその連絡を黄光兄さんからもらつた時は、一瞬何かの間違いかと思つた。

「雲鷹。いい加減、一度日本に戻ってこい。」

開口一番、挨拶もそこそこに告げる黄光兄さん。

「いきなりだな。どうした風の吹き回しだい？兄さん。」

「ふん、話さにやならん事が出来た。こんな誰が聞いているか分からん電話じゃ話せん内容だ。」

そっちの方はしばらく人に任せても問題なからう？こちらで受けている報告でも特に問題は起こっていないはずだしな。」

今の側仕えが情報を漏らしている訳じゃない。今の奴は俺の子飼いだからな。現地職員の家族から若手の希望者を何人か募った。親父は兎も角兄さんの息がかかった奴はいない。

だけどもあ、特にこちらの情報を秘匿している訳でもないし、秘匿する理由もない。俺が関わっている事業関連の情報はある程度本家に報告している。

それ自体が黄光兄さんの首を柔らかく締めていくのが分かっているから。

しかし、この時期の急な呼び出し。そして他者には聞かせられない内容、という事は。

「急な話だけど、兄さんがそう言うなら了解した。」

長話するような間柄でもないし、余計な言葉を発してよ所に情報を漏らす必要もない。手短かに話を終えて直ぐに日本行きの手配を手配した。

清水名夜竹さん

「相変わらず気持ち悪い奴だな。おめえは。ガキの頃から見た目が全然変わらねえ。年齢も苦労も全然顔に出ていねえ。」

昔から見ていなかったら、てめえが24だなんてとても信じられんな。15く6のガキにしか見えん。」

本家の離れに呼ばれて、顔を出したら出合頭にこれだよ。久しぶりの日本に羽を伸ばす暇もない。

勧められもしないまま対面にどすんと座り込んで、黄光兄さんと向かい合う。俺の前にはお茶が無い。一息を突く間もなく兄さんから次の言葉が飛び出してきた。

「遊び歩いて大した苦労一つしてねえ青龍の野郎でもまだ顔に貫録が出てきてるぞ。まあ、あれは遊び人の顔にしかねんだろうがな。」

あれだけ稼いで、いくつもの事業を回して、何でそんなにガキのままでいられるんだ

か、わからねえな。」

アメリカに出てからほとんど顔を合わせていなかったとはいえ、親父や兄に届いている報告書には俺の最近の顔写真も送られていたはず。とは言え、まあ、気持ちはわからないでもないけど。

自分でも年を取らない自分の顔がちよつと気持ち悪い。せめて二十歳くらい、出来れば三十歳くらいまでは年相応に顔が変化してほしかったんだけど。

ただまあ、言われればなしは舐められる。同感ではあってもそれをそのまま受け入れる訳には行かん。

「ああ、まあね。どうやら俺の母方の先祖には仙人でもいたらしくてね。隔世遺伝か何かかは分からないけど、どうも年を取らないらしい。

もしかしたら不老不死かもね。」

俺としては軽口を返したただけなんだけれど、一瞬兄さんの顔が硬直して、暫く真剣な思案顔に代わっていた。

「お前……。」

「やだな兄さん、何本気になっているのさ。俺はまだ24歳だよ。あとひと月で25歳。意外とこういうベビーフェイスの奴っているもんさ。あつちの大学にも似た様なベビーフェイスな人は何人か見かけたこともある。」

「この世に不老不死の存在なんて本当にいる訳ないじゃないか。」

「はん、一瞬冗談に思えなかっただけだ。おめえは他者からの評価って奴をもう少し自覚しろ。ただでさえ親戚連中にも本当に人間かどうか疑われているってえのに。」

「ひどいな。人間以外の何だって言うのさ。昔から言うだろう？神童も二十過ぎればただの人って。」

「俺はちよつとばかり中身の成熟が早かっただけさ。」

黄光兄さんが胡散臭そうな顔を俺に向ける。一応、表面上は俺と黄光兄さんは対立していない。少なくとも俺の方からは対立する理由がない。原作の雲鷹さんとは違って

ね。あちらの方はどう思っているかは本当の所は分からないけど。

ただ、今回こうやって呼び出されて相談を持ち掛けてくるって事はそれなりに信用してくれている、のかもしれない。邪魔だとは確実に思われているだろうけど。

「ちよつとばかりで済むようなモンでもないけどな。まあ、無駄話はもういい。それよりも本題だ。」

言いたい事をいくつも飲み込んだような顔をして無駄話を切り上げる黄光兄さん。

「親父に女が出来た。」

いきなりストレートな物言いに、漸く運命の歯車が回り始めたのを感じる。そうか、まだ確認はしていないけど漸く名夜竹さんと親父が出会ったか。

「親父に女が出来るなんていつもの事だろうか？俺の母親が死んだ後もちよこちよこ周りに女がいたじゃないか。」

「ああちげえねえがな。今回はいつもと違う。女が孕みやがった。」

「へえ、やるじゃん親父。今何歳だっけ？この歳で末っ子脱出、お兄ちゃんになるって事かい？老いてなお現役とは恐れ入るね。」

「はん、飄々とまあ口が動きやがる。一つも驚きやがらねえ。もしかして知っていたか？」

「残念ながら忙しくて日本の本家周りの情報は気を配っていなかったんでね。……正直、日本の話を聞くのもまだちょっと辛かったからね。」

「ああ、そうだな。すまねえ。」

ばつの悪そうな顔をして謝罪する黄光兄さん。この人原作を表面だけなぞって読むと旧態依然な石頭ってイメージがあるし、跡取りに拘って家族を家族と思わない非情な人って感じだけど、多少は愚かではあるけど完全な愚物ではないんだよね。

信用できない人間に囲まれて生きてきただけ。だからああなる。

でも根は悪い奴じゃない。だから原作ラストの辺り御都合主義に見える位にあつきりと折れてくれた。

あれが本当に強欲で人を信じられなく、自分の事しか考えられないエゴイストな愚か者であったなら、かぐやを信じず、家族を信じず四条との手打ちも上手くいかずにバツドエンド一直線だったろう。

かぐやが何を言おうが、親父はまだあの時には生きているのだ。時間制限が差し迫っている訳じゃ無し、その場を上手く取り繕って、口八丁で遺言書を破棄されないように保全。

一度場を納めてから一同が会した席で改めて戦力を投入して鎮圧し遺言書を確保。さっさとかぐやを四条に差し出してしまえばその後は彼の好きなように出来ただろう。

最悪、遺言書が破棄されたとしても、再度まだ意識の有る親父を説得しなおせばいい。残りの後継者を全員、拘束してから。

まあ、その場合はかぐやを手に入れた四条帝が四宮家と完全に敵対する可能性もあったけど。いや、その可能性は少ないかな。どの道四条も落とし所を探っていたのは事

実。あのままだと共倒れになるっていうのも間違っではないなかったし。

あの時、彼、黄光は四宮家を、財閥を救う為にどうすればいいのか、誰が本当に信用できるのか、そんな心理状態で生き残るための方策を必死になつて探っていた。本当は雲鷹やかぐやを信じたかつたんじゃないかな。藁をもつかむ思いだったのだろう。

そう思う事にしよう。今は。

深いため息をつくつと切り替えたのか話を続ける。

「種がな、親父の種かどうかわかん。女は信用できねえとかそういう話じゃねえ。その女は一度ここを出て行つたんだ。その後帰つてきて親父に妊娠を告げた。時期がな、微妙なんだよ。」

「なるほどね。親父は何と？」

「腹の子は自分の子だよ。DNAを調べる事も許さねえとさ。」

また一つ深い溜息を吐く黄光兄さん。

「親戚連中は大騒ぎだったが、親父の一喝で黙らせた。」

「兄さんはどう思うんだい？」

「ここで親子で対立して家を割る訳にはいかねえ。四宮の実権はまだまだ親父が握っている。親子で対立しても得はねえ。」

それに腹の中のガキも男であれ女であれ、年の差がでええからな。

後継者で問題になる事はねえだろう。そうである以上、俺は親父を支持する。」

なるほど。確かに現時点で親父を敵に回す事は愚の骨頂。青龍兄さんは論外としても、俺がいる以上、ここで親父を敵に回して自分の評価を下げる事は後継者レースからの脱落を意味する。

まさか産まれてくる子供が女だてら、天才で、カリスマ性にあふれ、四宮の将来を背

負つて立つ事を期待されるような人物になるとは考えもしないだろう。

ましてやその彼氏、いや、旦那予定の者が彼女に寄り添い四宮を左右するような存在になるかもしれないとは欠片も想像している訳が無い。

「で、それを俺に話す理由は？」

少し睨む兄さん。

「解らねえほど馬鹿じゃねえだろ、お前。」

「だとしてもはつきり言葉で言ってくれないとね。言質を取る訳じゃないけど、気持ちの問題さ。」

またまた一つ溜息をつく。幸せが逃げるぜ？兄さんよ。

「お前も親父を支持しろ。ガキ同士で割れる訳にもいかねえんだ。今の時点で家を割るのは良い事じゃねえ。わかるだろう？」

俺らは既に四条を敵に回している。奴らはいずれ噛みついてくる。それが解つてい
るからおめえは外に出たんだろうが。」

「アメリカの大学に行ったのはそれだけが理由じゃないけどね。だけどまあ、それな
りに楔は打てたと思うよ。」

「ああ、こつちに上がってきている報告書を読んでもそれはわかる。まあ、何かを隠し
ているようにも見えるが、それはお互い様だ。

欲を言えばヨーロッパも抑えに回ってほしかった所だが、無い物ねだりだな。」

そう言うのと漸くテーブルの上に置いてあつた緑茶を一口すする。だからさ、俺の分な
いんだけど？まあ、この離れには使用人は誰も近づかないように厳命されているみたい
だし、兄さんが淹れてくれるわけがない。喉も乾いていないし自分でやるのも面倒だか
ら良いか。

「現時点で、俺かお前が四宮を継ぐ事になる。お前にとっては面倒な重荷だろうが
な。」

意外な一言に虚を突かれた。

「ガキの頃から見てりや判る。お前が生きるのに四宮は必要ない。自分の力だけであつという間に財を築いた。まぐれじゃねえ。未だに資産を増やし続けている。

才能もある。その気になれば、しがらみなんぞ簡単に捨てて自由にやれるだろう。

だがお前は義務から逃げずに務めを果たしている。結婚もな、あんな事になったがお前は逃げなかった。」

「いや、別に逃げなかった訳じゃ……。」

「高校生の頃、惚れた女がいたら。隠すな。俺と同じだ。俺は抵抗した。だが結局四宮家から離れる事は出来なかった。己一人の才覚で生きて行く自信は無かった。」

なんだこれ、黄光兄さんが腹割って話しているのすごく気持ち悪い。いや、あんたはもつと悪役然としてかぐやの前に立ちふさがらんと。まだお前さんの役目は終わっていないんだよ？

何が言いたかったのか自分でも分からなくなったのか黄光兄さんは自分の顔をひとしきり撫でまわしてからぼそりと続ける。

「まあ、なんだ。日本に帰ってこい雲鷹。どちらが継ぐにせよ、今は親父の周りを固める必要がある。

女一人懐に入れる為に無理を押し込んだ。親戚連中黙らせてな。いくらカリスマとは言え、絶対的な支配者とは言え必ずどこかに反発が出る。

その分四条に対して隙が出来る。わからねえわけねえだろ、お前が。」

意外とまともな事を言われて少々呆然とした。

「アメリカの方は付きっ切りでなきや駄目だつて訳でもねえだろ。永遠につて訳じゃねえ。子供が生まれて周りが落ち着くまでも良い。

……親父からはお前に頼めねえだろうしな。

お前が居れば四宮は落ち着く。それはお前が一番よくわかつている筈だ。」

うーん、これ黄光兄さん、本当にラスボスの役目果たせるんかな。普通に良い人でワ

口々。

そんな事を考えながら、渋々頷いた。

その後、雑談で高校生時代の副会長だった近衛二恵さんが結婚した事を聞いた……。
今や2児の母だそうで。

その晩、何となく涙を流したよ。人間って勝手なものだね。

惚れた女を信じる辛さ

あくる年の1月1日。かぐやが産まれた。そして同じ月の30日、お母さんの名夜竹さんが亡くなった。

かぐやは産まれたばかりのこの短い期間の事をおそらく映像として記憶している。その小屋が何処に在るのかも理解していた以上、自身の周囲の一連の流れを理解して記憶していたという事になるのかな？

大した才能だ、の一言で片づけていい能力じゃないな。

彼女が、「父親としての愛情の掛け方」を理解できなかった親父に、それでも父として幼いながらに慕っていたのは、この時期の記憶が基になっているからという可能性がある。

病の床に就いている名夜竹さんにかぐやを抱き上げ、赤ん坊の顔を彼女に見せてやつ

た、なんてエピソードがあってもおかしくない。

普通なら覚えている訳が無い、父親に抱き上げられた記憶がかぐやの中に残っているのなら、幼い頃のかぐやが滅多に会えない父親を慕うのも理解できる。

名夜竹さんが亡くなってからの親父は急激にしよぼくれた。だがかぐやの存在が親父の唯一の心の支えになったみたいだ。

ただ、同時に親父の心の棘として常に彼に刺さる存在にもなった。男が一度一喝して、DNA検査を拒んだんだ。万が一の際、名夜竹さんの、いや惚れた女の子供を守る為に。

馬鹿だなとも思うし、漢らしいとも思う。その後それを引き摺ってかぐやを構ってやれなくなったのは不幸だけど。

一人の人間にあれもこれもと望むのは難しい事だとは思うけど、これに関しては何と云えば良いのか判らん。ただ単純に親父を責められる問題じゃない。

検査の件は、再度俺達兄弟も集められて念を押された。

黄光兄さんはかぐやに親父の血が入っているようにいまいが関係ないという立場だったし、青龍兄さんはそもそも関心が無かったようだ。俺は俺で、特殊な能力のせいとか、何となく血のつながりが理解出来ちやったりする。

うん、安心しなよ。間違はなくかぐやはあんたの子だよ。ぼんやりと感じる魂の波動が似ているし、オーラからも血縁関係を感じる。

と、どうか彼女が育つにつれ、四宮の血筋であることはよりはつきりとしてくるのだけれども、今の段階ではそれはわかる筈もない。

勘当覚悟で検査を強行して、親父とかぐやの間に存在する棘と壁を取り払ってやる事も、出来るがやらない。別に勘当を恐れている訳じゃない。

それをしてしまえば、原作の流れが崩れ、彼女が白銀と添い遂げられなくなる。それだけはこの世界の異物である俺の責任において許容できる事ではない。

かぐやは、いずれ白銀が救うだろう。だが、親父は……。この先約17年、疑念に焼

かれ苦しみ続けて真実を知ることなくこの世を去る事になる。

最愛の筈の娘に愛を注ぐ事すら出来ず。

まさしく地獄だな。

それを見て見ぬふりをし、更には原作通りの教育を彼女に課すことになる俺もまたろくでもない外道だけだ。

正直、名夜竹さんを助けようと思えば助けられなくも無かった。最近、医療に関して魔法をコソ練していたからな。犠牲になったネズミやゴキブリには哀悼の意を表す。上手くいけば最低でも数年は命を伸ばせていたんじゃないかな。

ただ、親父と名夜竹さんの間に、胡散臭い魔法治療の話なんかを持ち出して入り込むのはちよつと無理だったし、人間相手にぶつつけ本番する勇氣も無かった。言い換えれば救命活動でAEDを使えば助かるかもしれない人をAEDの使い方が良く分らないし自信がないから見捨てたという事になる。非道だよな。

それにここで名夜竹さんを助けてしまえば原作が大きく崩れる。だから見捨てた。人としてあるまじき行為だよな。人からこれを聞いたのなら胸糞悪くて殴り飛ばしてやるだろう。

結局、俺の出来た事は保険を掛けるだけで精一杯だった。あ、生命保険の話じゃねえぞ？

不老不死を公言してはいても、俺はまだ人間だと思われて生きて行きたい。

そのまま黄光兄さんの言葉に従って暫くは日本で生活をつづけた。親父を支えつつ、兄さんを支えつつ。最近は何となくだけ兄さんも俺に対して当たりが柔らかい。まあ、そのうちまた自分の立場や家を守る為が変わってしまう可能性もあるけど。

かぐやも生まれてから暫くは本家で親父の近くで育てられていたけど、産まれた時からの記憶を持つかぐや曰く、父親からの愛情を受けた事が無いと言うのは表面上はそのままだった。

親父はまだ赤ん坊の筈のかぐやにどう接すればいいのかすら分からないまま、乳母代わりの早坂ママに世話を任せきりで偶に顔を見せるのが関の山だった。

流石にかぐやも赤ん坊のころの記憶をすべて覚えてる訳では無いだろうから、俺は気にせず可愛がっていたけどな。

何の気遣いもせずにかくやを可愛がれるのは白銀とのゴールデンが確定した後か今の時期しかないからな。

俺的には数あるお気に入りの中でトップクラスに好きな作品の、しかも好きなキャラクターだから、赤ん坊とは言え推すのは当然だろう？これから俺は嫌われるんだし、せめていまくらいは良いじゃないか。

親父の横車のせいで少々四宮家が動揺したが、黄光兄さんの影響か、それとも俺が帰ってきているせいか思いの他動揺は広がらず、四条が付け入るスキはなかったように、表面上は平和そのものに見える。

だが間違いなく何処かしらには四条が食いついてきているんだらうけど、簡単にわかる事じゃない。だから念のために正答率90%以上の占星術で占ってみたら、やつぱりこの時点で何人か食い込まれている事が判明した。

当然、原作の流れを作り出すためにも放置したけどね。誰が転んだかも調べはついている。一応、転んだ彼らの弱みは掴んでおくけど。

これ、占い師でも食っていけるな。万が一、四宮を捨て自由になる選択をしたら占い師で食っていくのも面白いかもな。

白銀父の様に。

年に数回、アメリカに戻って仕事を片付けているけど、ネットワーク技術が発達してきた昨今は態々遠距離を移動する必要は激減してきて、今ではほぼネットワークから指示を出すだけで事業を回している。

最初から自分が居なくてもある程度回るように基本を組み立てていたからな。ただ、新規事業を立ち上げたりするのは、やはり現住所の日本でやった方が良いだろう。立ち上げの 때가一番大変だし。

そもそも新規の事業を立ち上げる必要は今の所ないだろうけど。

そんな事を考えながら、2歳になったかぐやと早坂愛の相手をしていたら、親父に呼び出された。ん？まあ大丈夫だろう？2歳の時の記憶が残っていても、それほど原作に影響はないだろうさ。心配する必要ないさ。

俺がかぐやに恨まれて嫌われるのはこれからだよ。

「雲鷹、お前、結婚は考えておらんのか。」

黄光さんと同じように、呼び出された部屋に入ったら座るのを待つでもなく出合頭に一言を掛けてくる。

血なのか、それともそう言う家風なのか。まあ、つまらん前置きで時間を潰すよりは建設的ではあるけど。

お互い牽制しあいながら腹を探る必要は、今は無いしな。

「ああ？ いや、結婚つて言われてもな。俺らに結婚の自由があるとは思っちゃいないし、今更好きな奴もいない。

正直面倒だどしか思っていないからな。必要なら言われたとおりに結婚するよ。」

うん、前世通して未だに清い身体をキープしているからな。ここまできると、清いまま突つ走るのも悪くないとさえ思えてきた。長年連れ添った右手も時折慰めてくれる

左手も、今更見捨てる訳にもいかんし。

ま、まあ？美人さんと一緒になれるって言うなら、ちやんと愛する気持ちはあるけどな。

答えながら親父の前に、ゆっくり座る。今回はテーブルの上に俺の分のお茶も用意されている。当たり前なんだろうけどちよつと嬉しい。

何やら親父は難しい顔をして考え込んでいる。時折お茶をすすりながら。俺もそれに合わせてお茶をすする。うん、流石四宮家のしかも親父に出される茶だけはある。普段使いの筈なのにかなりいい葉っぱを使ってやがる。うめえ。

「お前には迷惑をかけた。黄光の指示だろうが、忙しい中、帰国させてしまつて長い事縛り付けてしまったな。」

親父の口からは信じられない言葉が出てきた。まあ、俺が四宮グループの一員であることは間違いないし、四宮の事業を幾つか経営しているのも事実だ。

ただドスタンフォード入学あたりから起こした新事業は、四宮グループとは直接関係

ないようにしているし、俺自身四宮に寄り掛からんでも生きていける。その気になれば簡単に出走できなくもないのは事実だ。

いや、だからと言って仮にも家族を見捨てるほど薄情ではないつもりなんだけど。原作の雲鷹さんなら兎も角。

彼も、かぐやに関してでは歪んではいたけどちやんと兄として愛情を注いでいた。もともとそう言う優しい気質は持っているのさ、この雲鷹さんには。

だが態々そんな事を言い出すという事は。

「て、事はそろそろお役御免って所かな。」

それはちよつと不味い。原作ではこの後俺がかぐやを育てるところになる筈なのだがこの流れはアメリカに追い出される流れじゃね？

「ああいや。俺が選んだ婚約者はあんな事になっちまった。前に言っただろ？ 相手を選んで少しは遊べってな。」

あつちでお前を待っている奴はいないのか、という話だ。」

「さつきも言ったが本当にいねえなあ。」

ああ、もしかしてかぐやを預けるのに独身男性だと荷が重かるうって事なのかな。もしアメリカに好きな奴がいるのなら、結婚を認めてやる、代わりにかぐやの面倒を見ろって事か？

なるほど、それならこの話の流れも分かる。が、俺は普通に女にもてねえんだよ。主にこのベビーフェイスのせいで、だと思う。

前にも言ったけど引つかかってくるのはシヨタコンの変態ばかり。勘弁してほしいのですよ。

黄光兄さんの様に溜息を一つ吐くと親父はぼそぼそ言葉を続ける。

「俺はもう、お前の結婚をどうこうしろと言う気はない。お前自身の価値に釣り合う娘はそうはいない。今更お前に後ろ盾が必要にも思えん。」

まあ、そうなんだよね。閨閥を作る為の結婚ってさ。家同士の繋がりを強くする為なんだけど同時に結婚する人自身の後ろ盾を確保する行為でもあるんだよね。

つまり、現時点で俺に後ろ盾は必要ないから好きにしろ。四宮家としても取り込みたい家が特にある訳では無いつて事かな。いや、正確に言えば俺の機嫌を損ねてまで取り込みたい家は無いって事だな。

つまりそれなりに俺自身の力を四宮家が把握し、尊重……警戒しているって事かもしれない。

「とは言っても、近づいてくるのは少年趣味の性癖を持った女か男なんだけどね。」

「はっ、難儀なものだな。いつそその変態を娶りやいいじゃねえか。おっ！それで万事解決だな、おい。」

「勘弁してよ。その結婚、本当に必要な結婚なのかい？家にとっても俺にとっても。」

「まあな、もしも歳に似合いの相手を見繕ったら……、少し考えれば絵面がやべえな。」

……つーかお前本当に年を取らねえな。今何歳だ？」

「27歳。あと2か月で28歳だな。」

「そのなりでアラサーかよ。あいつの血筋に仙人がいたって与太話を信じたくくなるな、こりゃ。」

名夜竹さんが亡くなってから久しぶりに親父が笑った。苦笑に近いものだけでも、少しは心の整理がついたのだろうか。

「まあ本当に不老不死だからな。」

そんな俺の言葉を鼻で笑い飛ばす親父。本当だとしても確かめようは無いだろうから、ここで嘘をつく必要は無いのだよ。

ただこのままだと、いつまでたっても本題に入れない。

「かぐやの事だろうか？側に置いておくのが辛い、四宮家から距離を置かせてやりたい。」

親戚連中は未だにかぐやを濁った眼で見やがるからな。

後は俺が後妻の子供だから、かぐやを上手く育てられるんじやねえか？

そんな話なんじやねえかと思つたんだが。」

親父からは切り出しにくいだろう話をこちらから切り出してみる。これは一種の賭けだよな。此方から切り出したせいで、否定し反発されて思わぬ流れになってしまう可能性もある。

原作の雲鷹さんは多分、碌に説明を受けずに押し付けられた、もしくは四宮家から連れ出したのかもしれないけど。

「だが独身のやもめ暮らしじや子供一人育てるのも手間だろう、せめて俺が家庭を持っていればって事かい。」

特に驚くでもなく、親父は俺に視線をやる。

「まあ、お前ならその位察するわな。かぐやは女だからな。傍に身内の女がいた方が

色々と都合がいいだろう。」

原作では度々義姉様という単語が出てくる。複数形ではなく単数形だ。恐らくは雲鷹の妻の事を指しているのだと思う。

仲は悪いというような感じではなく、親戚付き合いとしてつかず離れず、誕生日なんかの時にはお祝いをしてくれる程度には親交があったようだ。

だが、この世界の雲鷹はぼつちだからな。そうか、俺は彼女から義姉も奪ってしまいう事になったのか。

「黄光の所は駄目だ。あれは今は落ち着いているが、いずれかぐやを道具にする。青龍は論外だな。あそこは夫婦仲が良くない。そのうちかぐやに害が及ぶだろうよ。」

「黄光兄さん、信用ないね。まあ、俺の方は女手は何とかなるでしょう。定期的に早坂を回してくれば、多分。同い年の同性の子供がいるんだから、それなりに頼れるんじゃないですか？」

微妙に納得できていない親父が微妙に首をひねる。出来れば身内の女性に任せたい

と思つているんだろうけど。無い袖は振れないのだよ。

「かぐやを預かるのは別に構わないけど、預かるからには責任が出てくる。単にかわいがるわけにもいかんでしょ。四宮の人間として育てる事になりますよ。

年頃になる前には親の愛も知らない糞な人間になつちまうかもしれないけど。性格も最悪な女にね。それでもかまわないので？」

俺の挑発めいた言葉に対して考える風を見せずに即答する親父。

「構わん。四宮に産まれた以上、甘やかして育てたら食われて終わるだけだ。特に女はな。あの子を出来るだけ強く育ててくれ。逆に四宮を食らうくらいにな。お前の様に育つてくれれば、俺も安心して名夜竹の所に行ける。

すまんが、頼む」

そう言った後、「正直、あの子の側に居るのが苦しい。」と聞こえない位小さな声でつぶやいた。

それだけ強く名夜竹さんを愛していたってか。愛にも種類がある。相手が自分を裏切ったとしても受け入れる無償の愛もあるだろう。万人向けではないが。

年老いてからの親父の本気の恋は、相手の不貞の可能性も吹き飛ばすくらい強く、しかし自分の種じゃないかもしれないという事実には狂おしいくらいに胸を焼いているんだらうな。

信じたい、という気持ちと彼女の子供を守りたい、という気持ち。裏切られていたら、という不安も入り混じって、正直、俺では親父の胸の内は想像もつかない。

其処まで辛いのならDNAを調べればいい。彼女を信じているのなら調べればいい。きつと親父を裏切らない結果が帰ってくると俺が断言してやる。

だが、もし違うと確定してしまった時、愛する女の子供を守ってやる事が自分に出来るのか、自信が無いんだらうな。

そんな事があつた後にかぐやを愛してやれるのか、と。

結局そんな自縄自縛に陥って、結果かぐやに素直に愛情を示せなくなってしまう。本末転倒も甚だしいけど、これが人間なんだろう。

これがこの世界の現実で、これがあるから白銀とかぐやの二人は強く惹かれ合う事になる。そう考える事にして、口を噤む。

そうしてただ首を縦に振った。

早坂愛の苦悩

「にいに、にいに」

いかに赤ん坊のころからの記憶を持っているという、常識外れの天才かぐやと見えども、人とかかわりが少なければ言葉覚えるのが遅くなる。天才と言えど彼女に話しかける親が居なければそうなるのは自明の理。

その辺りは、母親代わりの早坂ママがケアをしてくれていたようで彼女の最初の言葉は「まま」だったようだ。

ちょうどその頃仕事でアメリカに行っていたから、俺がそれを聞いたのはかぐやが三歳になってからだ。暫く日本を離れていたのは失敗だったかもしれない。

久しぶりに会うはずの俺をかぐやは覚えていた。そして舌足らずの言葉で教えた事もない呼び方で俺を「にいに」と呼んだ。

くう。いやマジ天才。マジもう原作なんかどうでも良いから猫かわいがりをしたくなる自分を必死に抑えたよ。顔にはデレ顔が出ちまっていたけど。

妹じゃなければ俺が嫁にもらつてやんよ、マジで。いや、白銀御行に転生したかつたわ、本気で。神様、お願いします、もう一度チャンスをくださいと心の中で何度祈った事か。

だがこの後、秀知院幼等部に入る辺りから厳しい教育が彼女を待っている。そして俺は社交界で四宮家としての生き方をかくやに教える事になる。妹に嫌われる道をまっしぐらだな。だけど、原作の雲鷹さんのようなアグレッシブな侮辱、そう言えば産まれてこの方した事無いんだけど。

あー、どうしよう。パーティーで出くわした四条家の当主に分家の鼠とか結構きつめな侮辱をかまさないといけないんだっけ。

たしかあれが切欠で四条真妃ちゃんとの微妙な関係が出来上がる筈。いや、流石に鼠呼ばわり迄する必要は無いかもしれない。ちよつと挑発して怒らせれば何とかなるだ

ろう。

挑発しなくても多分、四条の方から「あの子と仲良くするな」みたいな事を言われるはずだから、その辺は無理しなくても良いか。

少々、四宮家の一員になる為の教育の方針に自信を無くしてきた俺だが、その後はそれなりに順調に原作に沿う形でかぐやを養育する事が出来た。

月日を追い教育が進むにつれ少しずつ表情を無くしていくかぐや。段々と子供の顔には見えなくなっていく。報告を聞き、上がってくる写真を見るたびに胸が締め付けられる。

ちよつとこれ、想像以上にきついんだけど。

段々と兄として声を掛けてくれる回数も減ってきた。まあ、俺が忙しくあちこち飛び回っているって言うのもあるけど、暇を見つけては何度かパーティーに連れ出して、大

人の汚いやり取りを見せたり、同年代の子供達と交流を持たせたりしておいた。

因縁の四条家との対面も何とか原作に沿う形でクリアする事が出来たと思う。帝との約束も、眞妃との因縁も。

俺と言う異物が入り込んでいるせいでこの辺の時系列が狂って運命がおかしくなったらヤバイなどは思っていたけど、何某かの修正力でもあるのか、まあ何とかなってるより。

最近では俺の事を無表情でお兄様と呼ぶようになった。凄く悲しいけど、仕方がないな。

暫くして、黄光兄さんから早坂愛がかぐやの側仕えとして送り込まれてきた。

「雲鷹様、愛はまだ至らぬ点が多く、お役に立てるか分かりませんがどうぞよろしくお引き立てのほどお願い申し上げます。」

かぐやが幼等部に入園してから暫くは、東京の四宮邸で教育係と世話係に囲まれて暮らしていたから、早坂ママが東京の四宮邸に顔を出すのは数年ぶりになる。

原作ではこの時期京都にいたのだろうか。確か名夜竹さんの七回忌に早坂愛との思ひ出イベントがあつたはず。その前もその後も、結構京都でのイベントが多いよな。

ま、ちよこちよこ親父に呼び出されて京都には行っているみたいだから、俺の知らないところでイベントを熟していると信じよう。正直、四条との衝突に備えて欧州にも手を出し始めた影響で忙しすぎて日本にあんまりいられないんだよな。

「久しぶりじゃないか、裏切りモンの鼠ちゃん。旦那は息災かい？」

「相変わらずですね、雲鷹様。もうあの件は水に流していただけたのでは？」

「ははっ、揶揄いのネタを自ら手放す気にはなれないね。それに実際、そうだと気が付いてはいたけど、裏切られたと判った時にはそれなりに傷ついたのでし。」

わざとらしく胸に手を当てて体をひねる。そんな俺を見て呆れた様な溜息をもらす
早坂奈央。

以前の俺の側仕えだった早坂奈央が原作と同じように俺を裏切り、情報を流していた事を、原作の大ファンである俺は当然の様に知っていた。

いや、正確にはそう言う事があったと原作に明記されてはいなかったけど、少なくともこの世界では親父に俺の情報を流していたのは事実だ。

俺としては、流されて困る情報は無かったし、裏切られるものだとは理解していた。そもそもそんなに人間に期待もしちゃいない。前の人生の時もそれなりに辛酸を舐めてきたのだから人に付けられた側仕えを心から信用する程子供でもない。

自分で見出した人材に裏切られることも間々あるのだから、この程度、特に気にする事ではない。

が、折角手に入れた弄りポイントは存分に活用させてもらわなくてはもったいない。

「それでまたぞろ今度はかぐやのスパイを自分の娘にやらせるってか。正気とは思えねえな。」

娘さんも辛かろうに。」

「少なくとも私が望んだわけではありません。我々早坂家は黄光様の指示に従うよう雁庵様に申し付けられておりますので。」

「それを俺に言っちゃっていいの？」

「雁庵様が雲鷹様には情報秘匿の必要はないとおっしゃいましたので。」

「親父も脆くなっちゃったのかね。ま、年相応ではあるけど。」

「雲鷹様はいつまでたつても子供にしか見えませんね。今年で何歳におなりでしたっけ？」

「ちつ、そこを弄ってくるかよ。もう三十路に突入した筈なんだけどな。不老不死はつれえわ。」

「雲鷹様がおつしやると本当に冗談には聞こえませんので、止めていただけますか。」

そんな間の抜けた会話を交わした後暫く、この仕事が早坂愛の精神にかなりの負担を掛ける可能性がある事を一応老婆心ながら指摘しておいた。

早坂のママさんは「それを乗り越えるのも仕事の内ですから。私の娘なら大丈夫です。」と何を根拠にしているのか分からない言葉を平然と口にする。

かぐやが小学校に入る頃になると漸く仕事も落ち着いて、俺も日本に居る事が多くなつたけど、既にかぐやの俺を見る目が原作同様の冷たい目になっていて、ちよつとゾクゾクした。

名夜竹さんの七回忌を過ぎて、4年生になる頃には早坂ママさんが無根拠な「私の娘

なら大丈夫」発言を撤回してきた。

自身も仕事が忙しく、中々娘に会う機会が持てないママさんがさりげなく俺にフォローを入れてほしいとお願いしてきたから、また裏切り鼠ネタで揶揄ったらマジで泣かれて焦った。

仕方なしに謝罪してその頃から少しづつ、早坂愛をフォローするようになった。いや、ゆうても小学生だからな。側仕えの使用人であろうと、プロであろうと自分を律するにしてもかなり辛いはず。

周りの友達は普通に小学生として遊んでいるのだから。それに加えて、自分の主人を、いや友達を裏切っているという罪悪感。そりゃ半端ないな。

雇用者側として早坂愛を呼び出し、話しかけるが、最初はかなり警戒をしていた。止むを得ず、早坂ママからのメッセージを見せて、一応の信頼を勝ち取ることに成功した。

とは言っても最終的にちゃんとした信用を得るには、それなりの時間をかけることになっただけだな。

それにつけても我が身の信頼の無きよ。悪役はつれえなあ思わず涙がちよちよぎれる。

かぐやに隠れて、時間を見て早坂に声をかけ、辛いことはないか仕事はきつくはないか聞いて何かあつたら相談しろ、早坂ママに頼まれているんでな、みたいなことを伝え続けて、ようやくだよ。

早坂愛が俺を信用して相談を持ち掛けるようになったのは、おそらく、原作でのかぐやとの主従の契りを結ぶイベント。かぐやにとってあんまりいい思い出ではなかったと言わしめた、二人の関係が始まったとある湖のほとりでのイベントを経た後だったのだろう。

その後、原作では早坂の家出イベントがあり、かぐやの言葉に内心傷ついたのか、中学生になった頃にはかぐやに対して頑なに使用人の態度を貫き、それがきっかけで一時期かぐやが荒れていた時期があつた。はずだ。原作ではな。

それがどうやって納まったのかはよくわからん。

この世界でも少なくとも主従の誓いイベントは起きている、と思う。

「雲鷹様、私はかぐや様に嫌われるのが怖いんです。」

という原作の名セリフをこの段階でもう頂きましたよ。ただねえ、小学生だから本当に唯々可哀そうなだけでね。ああ、これも原作なんかどうでも良いから助けてやりたいと一瞬思ってしまったポイントだった。

こんな子を将来、俺が修学旅行で追い詰めて誘拐しようとするわけだ。しかも彼女の裏切りを俺がかぐやに知らせてしまう。

……って、ああ、そうか。その辺りもう駄目じゃね？原作完全崩壊じゃね？今更俺が早坂愛をさらって情報云々なんて意味無いし。

んー、つうか原作でも不思議だったのが四宮家の保護から外れた早坂愛の身柄を情報

確保の為四宮雲鷹が狙ったのはわかる。側仕えを辞めるそのタイミングで攫いに行つたのも情報を掴みやすかったから、と言うのも分かる。

だけど雲鷹ちゃんが彼女の確保を断念した後、彼女は身を隠す事はせずに、かぐやの友人として普通に秀知院に通学していた。彼女の身を狙っているのは雲鷹だけでは無かつたはずなのに。

あの修学旅行のタイミングでは確かに雲鷹だけだったかもしれないけど、その後四宮家の敵対組織がいくらでも早坂の身を攫うチャンスはあつたはずなんだよね。四条家という敵もいるのだし。

それが原作では起きていないという事は、恐らく早坂愛と四宮家は完全には手切れになつてはいない。雲鷹が言つた、彼女には手を出さないという言葉は、単純に自分たちは手出しをしないという意味だけじゃないな。

ちつ、原作の雲鷹ちゃんもツンデレじゃねえか。あれ、多分、四宮家からの雇用は無くなつたけど雲鷹の名前で早坂愛を保護している筈。

ワンちゃん、早坂ママが保護を四宮家に願ひ出た可能性もあるけど、流れとしては雲鷹が動いた可能性の方が高いよな。

かぐやには四宮家を動かす力は、あの時点では無い訳だし。あーしかし、どうするか、修学旅行のイベント。あれは早坂愛とかぐやが本来あるべき関係性に戻る為に必須のイベント。

ああ、やつぱり俺が嫌われ役をやるしかねえよな。ま、既にかぐやにはかなり嫌われてるし恨まれているんだから、今更か。

「かぐやは裏切りを許さない、からな。そう仕込んだのは俺だし、お前だ。」

信用できる人だけ友達にするべき、名夜竹さんの七回忌の際にかぐやにそう進言したのは早坂愛、君だろう。

「ええ、ですから、私はいつか彼女に嫌われる前に私が何をしたのか知られる前に彼女の前から消えたいんです。」

まだ小学生だというのにこれだよ。こんな年頃からこうやって悩み続けていたわけ

か。こりや苦しいわな。

「まあ、一先ず落ち着け。かぐやも人として成長すれば、いずれはお前を許す事もあるかもしれない。俺もお前の母親に同じことをされたが、一発どついで終わりにしたぞ?」

懐かしき思い出を語ると、愛は顔を埴輪の様にして驚いている。

「え!? ママも雲鷹様にそんな事をしたのですか?」

「まあ、こういう家柄だからな。人から付けられた側仕えがスパイの役割をはたしているなんて昔からよくある事だ。

日本なら戦国時代の武将の奥さんの侍女さんとか。大体奥さんの実家からついできた侍女は情報を実家の為に抜いたりするだろ?」

こんな今更の話で騒ぐのもみつともないし、そこまで人間を信用するほどお人好しでもないからな。

発覚した時点で一発どついてキャラにしてやった。今じゃママさんを揶揄うネタにしよつちゆう使わせてもらっている。」

そんな風に笑い飛ばしたら、早坂愛も少し笑ってくれた。

「かぐや様、許してくれますかね。もし、許していただけるなら何回殴ってもらっても構いません。」

幼いなりに真剣な顔をする早坂。別の意味で年相応には見えない。一瞬、高校生の時の早坂愛を幻視してしまった。

「まあ、今は無理だろうな。だから、もう少し待て。あの子が年頃になって色々人生経験を積むまで耐えろ。」

「人生経験、ですか。」

「ああ、人には色々事情があり、悩みを抱えていて、自分の都合だけではどうにもならない事を抱えている事もあるんだって理解できる日がいつか来るだろうさ。」

「それはいつ頃になるんでしょうか？」

「さあな。そうだな……誰かを好きになって、苦しんだり思い悩んだり幸せになったり。心を強く揺さぶられるような恋を経験すればいずれは。」

原作ではそうだったからな。白銀に恋をして色々経験してかぐやは早坂愛を許す事が出来た。この世界でもそうなる事を願おう。

俺の言葉にやや頬を赤らめて「恋ですか」と呟く。

「まあ、何時とは言えんがその時が来たら俺が何とかしてやる。一芝居打つなり、一騒動起こすなりして、お前さんがちゃんと謝れるきっかけを作ってやる。」

四宮を辞めるのなら、その後でも良いだろう。なに、心配するな。ちゃんと許してもらせるように俺も協力するし、結果がどうなろうと俺が何とかしてやる。黄光兄さんが邪魔するようなら、物理的にきつちり方もつけておくしな。

お前の自身の身の保護が必要なら、俺の目が黒いうちは俺が守ってやるから、安心し

てかぐやに仕えてくれ。」

そんな俺の言葉に目を白黒させる早坂。

聞こえない位小さな声で「ありがとうございます。」と呟く。

ああ、ただ、俺のこんな態度はかぐやにばれると嫌われ役を熟せなくなる。悲しいが、かなり悲しいが、ここは俺の印象をクソ野郎で固定しておくためにも彼女にも言い含めておかなくてはならないだろう。

「まあ、こんな話がかぐやに漏れては事だからな。俺がこんな感じの人間だという事はかぐやには内緒にしておいてくれ。俺はあいつに嫌われているからな。くそつたれな兄貴だと思われていた方があいつの為でもある。」

それなりに残念な事ではあるけど、それでもこのまま嫌われていた方が色々と都合がいいんでな。」

「そんな……。実のご兄妹なのに。悲しい話ですね。」

子供のくせにそんな気の使い方が出来てしまう君の身の上の方が悲しいと思うよ？

久しぶりに出た溜息を噛み殺すことが出来ずに、思わず苦笑する。

しゃあない。実の妹をヨシヨシできない身の上なのだから、せめて妹の姉の様な存在である早坂愛をヨシヨシして妹愛を満たす事にしようか。

このまま原作開始までに彼女が潰れても困るからな。

おっと、物理的にヨシヨシするわけじゃねえぞ。そんな事したら早坂ママにマジで刺されるからな。

貴女は私の使用人

日本にいる間は、大抵、東京に滞在している。ここ最近また忙しくなってきたから、京都の本邸と東京を頻繁に往復することになっちまうが、出来るだけかぐやの近くにいてやりたいからな。

かぐやにしてみれば、ウザいだけだろうが。

ただ、俺は懐かしの我が家、東京の四宮邸に住んでいる訳じゃない。原作と同じように、この世界でもかぐやは東京四宮邸に早坂愛や使用人たちに傅かれて生活している。

無論、そこに俺の居場所はない。俺と一緒に住んでしまっただら、かぐやは気の休まる時間が無くなってしまう。赤ん坊の頃の関係性のまま過ごしてきたのなら話は別なんだろうが。

ま、たまに早坂の様子を見るためにこつそりと訪れることはあるがな。

早坂に会うときは、出来るだけかぐやの様子なんかは聞かないようにしている。それは彼女の精神的な負担を考えての事だが、やはり仕事上の不満なんかを聞くときにはどうしてもかぐやの話が出てしまったりして、少々話辛そうにしている事が多い。

そんな時は、仕事の話ではなく学校で何があつたかとかを聞くようにしている。そうしてはいるけど、いつの間にかまた仕事の話に戻っていたりもするけどな。

正直、早坂と話をしていると俺自身が辛い。本当なら兄としてかぐやと話しているはずの内容を早坂愛と話をしているのだから、もう罪悪感が凄い。

そんなこんなで彼女たちが中学生の時、夏の長期休暇の際二人が京都で過ごしているときに例の、早坂愛家出事件が起きた。

家出事件そのものは、早坂を心配したかぐやがすぐに彼女を追いかけて解決したのだけれど、その後しばらくの間、それはもう俺の胃に穴が開きそうなくらい、かぐやと早坂愛の関係がギクシャクした。

原因は彼女を探し当てたかぐやが愛に掛けた言葉なのだが、かぐやは自分の言葉が彼女を傷つけてしまったことに気が付けなかった。

「いえ、傷ついたとかそういう事じゃないんです。いや、傷ついていないと言えば違うのですが。」

要領を得ない言葉に首をかしげる俺。

「もういいです。私も多分、この件に関してはうまく説明できないと思いますから。」

「心配してお前を探しに来てくれたはずのかぐやが私が主人であなだが使用人、それ以外に理由はないって言葉に傷ついたんだと思ったがな。」

お前さんはかぐやを妹の様に思っているってえのにな。」

「そういう雲鷹様は、本当に私のお兄様の様ですね。……外見も。もう私の同級生とそれほど年恰好が変わらないんじゃないですか？」

ちよつと大人びた先輩なんかだと、雲鷹様よりも年上に見えちゃうんですけど。

……雲鷹様つておいくつでしたっけ。」

「いや、そこに触れてくれるな、早坂愛。そろそろ本気で冗談にならない年齢になったんでな。」

「いや、誤魔化さないてくださいいよ。本当に何歳なんですか。」

「39歳、今年40だな。最近この手の話題は俺的にはセンチティブなんだよ、マジで。」

そんな俺の言葉に少し笑いながら何かを呟く早坂。突込みでもしてたのかな。

「この前本気で黄光兄さんに研究所に送られそうになったばかりなんだ。」

口先三寸で逃げ出したと思つたら正式に不老とかアンチエイジングやらの研究部門

に出向要請が来ていたし。

このままいくと数年後には解剖されてもおかしくない状況なんだよ、マジで。」

そんな俺の悲鳴のような抗議を早坂はハハハと笑って流す。

「まさか、流石にそんな事有るわけじゃないじゃないですか（棒）。

雲鷹様も冗談がお上手で。」

「これが冗談で済むなら俺も笑っていられるけどな。親父からも正式に一度病院で診てもらえって連絡が来た。」

「ご当主様がですか……。それはちよつと冗談じゃすみませんね。」

「まあ、俺の事はいい。それよりもお前さんは本当に大丈夫なのか。」

「ええ、かぐや様の言葉にそれほど傷ついたわけじゃありませんから。あの子が私を心配してくれたのは事実ですし、あれ以外、私たちの関係を表す言葉が出なかつたのは仕方ないと思つています。

でも、だからこそ私はかぐや様に対して使用人でなければならぬと決めたんです。」
やつぱり拗れるか。意地になつているところもあるだろうし、かぐやも自分の言葉の何が悪かつたのか、全然気が付いていない。ただ、早坂愛にも弱いところがあるんだと、それがわかつた出来事としてしかとらえていない。

原作では、藤原に白銀と付き合つている事を告白する際の回想のシーンで再度あの場面が出ていたから、おそらくはどこかの時点で気が付けたのだろう。

気が付けたという事は、どうにかして関係改善が図れたという事。かぐやが謝つたのか、早坂が許したのか、それとも何か別の原因があつたのかは謎だけど。

だがあの日以来、早坂愛はかぐやの求める慣れ合いというか友人のような接し方は一

切しなくなった。

かぐやの言葉通り、ただの主人と使用人になったのだ。少なくとも早坂はそうであろうと決めた。

ただ、救いがあるとしたら、少なくとも原作開始段階ではその状態は解消されていた。「大丈夫です。わかっています。かぐや様がそういうつもりだった訳じゃないのは。すみません雲鷹様。でも、私はこうするしかないんです。」

本当に原作ではどうやってこの拗れが解消されたのか。かぐやの回想では中学生の一時期って話だったはず。

……藤原さんが関係改善に一役買っている可能性もあるな。

かぐや曰く、あの頃は周りがすべて敵に見えたとの事。人生で一番すすきんでいたから、初対面の藤原にピアノをやめろと暴言を吐いてしまった。

ん、という事はこの件も彼女たち、この場合はかぐや、早坂、藤原だが、この三人に

とつて必要なイベントだった、という事になるか。

この件があり、かぐやがすきんだから、藤原がかぐやの友人になったからかぐやは救われた。この辺りにかぐやと早坂の関係改善のきっかけがありそうだな。

……心配することはないかもしれないな。

俺なんか口を挟んでも、彼女達は勝手に立ち直って強くなる、だろう。そもそも俺のやるべきことは余計な口を挟んでイベントを妨害する事じゃない。そんな事をしたら、原作を大きくゆがめることになる。

もしかしたら、いや間違いなく俺という存在のせいで既にかなり原作が歪んでしまっているけどな。

ただ、早坂ママとの約定もある。俺が約定を破るようでは、あいつをからかうネタがなくなるからな。つまり俺がやるべきことは早坂愛の心の負担を少しだけ軽くしてやること、位だな。

いまだに鼠ネタは有効なんだよ。早坂ママには。

一時、マジ泣きするんで控えていたんだけど、早坂愛が精神的に立ち直ってからはまたネタとして使えるようになった。

黄光兄さんなんかは、鼠ネタでママさんからかっている俺を見て「鬼かお前は。」って突っ込んでいたけどな。

ああ、因みに黄光兄さんが早坂愛をかぐやの側使いとして派遣した理由は、どうも原作とはちよつと違うっポイ。はっきりは分からんけど。基本的に四宮家長女の弱みを掴む、という所はまあ、変わっていないだろうけど、原作よりもほんの少しかぐやを思いやつている雰囲気がある。気のせい、もしくは誤差の範囲と言われればそれまで、つてくらの話だが。

まあ、将来一族を束ねていく必要のある黄光兄さんが、身内の弱みを知っておくことは必要な事なんだと言われれば反論は出来んが。世の中奇麗事じゃすまんのよ。

ただ、だからこそ、親父も黄光兄さんも俺には遠慮する。俺は情報をほぼ包み隠さず流している。彼らは知りたくない事を知ってしまふ事もあるだろう。親父は兎も角、黄光兄さんが段々と態度を軟化させてきているのはそう言う事だ。

多分、俺が早坂愛に冗談で話した黄光兄さんを物理的にきつちり方をつけるって言葉も兄さんの耳に入っている筈だ。もちろん情報が洩れる事を前提で話したのだから問題はない。

俺の今までの行動や実績が真綿の首輪の様に黄光兄さんの首に絡みつき優しく締めあげている。既に個人資産は12ヶタ中盤に達し、親父の個人資産を覗ける位置に来ているからな。

四宮家に関係している資産は別にカウントしてこれだから、兄さんが俺に遠慮するの不思議じゃない。

俺を敵に回すって事は四条を敵に回すよりも厄介な事になる、そう認識している筈なんだよね。下手に四宮家の内側にいるだけ性質が悪い。俺は別に敵に回るつもりは無いんだけど。

ま、黄光兄さんの本意が何処に在るにせよ、愛にはどのみち過酷な話だよ。

「ま、あんまり思いつめるな。そう深刻にならんでもいい。かぐやがその言葉しか言えなかったのは分かるんだろう？」

そして、それ以外の言葉がああの時出てきたら、愛は耐えられたのかい？」

「それは……。そうですね。私は裏切り者ですし、かぐや様の友達になる資格なんて。」

「前にも言ったろ？今はまだ、かぐやには事実を受け入れるのは難しいって。だけどあの子は内心、お前さんが友達でいてくれたらいいのに、って考えているはずだ。そこは愛も分かっているだろうに。」

しばらく、愛の気が済むまでは今のままでもいい。ただ、何かかぐやから切っ掛けがあったときは、あいつを許してやってほしい。」

「そんな、許すだなんて。私の方こそ許されませんから。」

「だから、そんな風に考えんていって話だよ。お前のママさんだつて、しがらみから逃れられずに、俺を裏切つた。

人間なんて、自由にはならんもんだよ。現状もお前さんのせいじゃない。

まあ、極論しちまえば、多分、俺のせいだな。うん。

だから恨むなら俺を恨んでくれや。」

いやマジで。俺が原作沿いの流れを望んだからこそ、かぐやや親父、早坂愛が苦しんでいるという一面は確かにあるのだから。

俺が原作をぶち壊すつもりで動けば、彼女の環境を救う事も出来る。できるが、それは俺的には受け入れる事ができない。である以上、彼女にはこの先も苦しんでもらうことになる。

主に俺のわがままのせいだ。

いや、雲鷹になった俺がいなければ結局彼女は苦しむことにはなるんだが、それでも原作では彼女は救われることが約束されている。

この世界では未来はまだ確定していない。未来予知の魔法でもそんな先の事は占えない。

どこかで何か大きくミスをすれば、望まれるべきハピエンは訪れないかもしれないから。

「そんな、雲鷹様を恨むなんてできません。」

「遠慮するな、俺の中身も大概クソ野郎だからな。黄光兄さんや青龍兄さんとあんまり変わらん。」

「大丈夫です、それは分かっていますから。」

くすつと笑う笑顔を見て、多分早坂は大丈夫だなと確信できた。

お兄様は……同居……すんの？

東京に滞在するときは大抵、手ごろなビジネスホテルを借りている。定宿は作らない。スパイ映画を見た影響でこんな事をやっている訳じゃないけど、何となく気分は工員だな。誰も俺を捕捉することは出来ないだろうってちよつといきつていたりする。

「仕事はホテルの部屋から指示するか東京四宮邸から車で5分程度の距離に借りている事務所を使っている。無論、小さな事務所一つで処理できるような仕事量じゃない。メインの事務処理を行っている場所はアメリカに本拠地があつて、定期的にそこにまとめて指示を出している。」

当然、現地に向かう必要が出てきたりするから、結局定期的に彼方此方を飛び回っている。

側仕えの奴は何人かはアメリカに置いてきて、あちらの屋敷の管理を任せているが、一応二人だけ日本に連れてきて身の回りの世話をさせている。

まあ、手荒な仕事も任せられる、早坂家の下位互換の様な連中だが、命に係わる様な

何かがあっても、大抵の事は俺一人で何とかなるから、その辺は気にしていない。

むしろ何かがあった時は先に逃げる様に指示はしている。全然言う事を聞かないけど。

目をキラキラさせて、雲鷹様の為なら死ねますって言われても怖いだけだよ。

定宿は持たず、常に転々と気ままに移動を繰り返している上、偽名を使つて宿泊しているから、そう簡単に俺の足は追えないだろうに、目の前の人物は何でもない事のように俺の場所を特定して面会を申し込んできた。

記憶力や情報処理速度は人外レベルでも、基本馬鹿で間が抜けている俺の事だ。多分、何か見落としているんだろうとは思うけど、考えない事にした。

まあ、此奴なら俺の動きを常に把握していてもおかしくないから。

「聞いていますか？雲鷹様。」

「ん、ああ、聞いているよ鼠ちゃん。どうやって俺の泊まっているホテルを特定したかは聞かんが、急に何の用だ。」

「ホテルの特定はそんなに難しい事じゃないですよ。

お泊りになるホテルはご身分に沿わず、大抵安価なビジネスホテルですけど、大体東京の四宮邸近辺のホテルに限られていますし、数も把握する事が困難、と言う程ではありません。

それにこの辺りのホテルは大抵四宮の息がかかっていますから、偽名をご使用されても直ぐに私共に連絡がいくようになっていきます。

雲鷹様はご存知無いでしょうけれど、この辺りの四宮の系列のホテルの受付業務を担当する者が最初に叩き込まれるのは雲鷹様の顔を覚える事ですよ。」

あー……そこまでしているとは思わなかった。普通に引くわ。なに、俺はそんな事も知らずに、この世界のドラマの登場人物の名前や漫画のキャラクターの名前で部屋を取っていたって事？

マジ鬱るな、これ。

「そんなに落ち込まないでください。それだけ四宮家の皆様が雲鷹様に気を配ってい

るという事ではないですか。」

ま、な。良い意味でも悪い意味でもな。この所マジで黄光兄さんが俺を研究所送りしようとして躍りになっている。

半分冗談を装ってはいるけど、対面した時なんか目を見ると、あれはマジだ。てつきり親父も不老の秘密に興味があるものと考えていたけど、親父は俺に病院で見てもらえとは言ったが、研究所云々は口にはしなかった。

特に、長生きを望んでいる訳ではないんだらうな。

あの時、かぐやを俺に預ける話をした時、名夜竹さんの所に行きたいってこぼしていたしな。

今更そんな事に興味がある訳ないか。

「まさかホテルのフロントマンがスパイヤやっていたなんて想像もしなかったよ。いくら四宮の系列だったとは言っても、ここまでする意味なんか無いだろうに。」

連絡を取ろうと思えば携帯でいくらでも連絡は取れる。」

「今回、面会を願い出たのはまさしく、今の雲鷹様の生活に関して、雁庵様からの苦言をお伝えする為です。

まあ、それだけではありませんが。」

「親父が何か言うのは珍しいな。名夜竹さんが亡くなってからはしよぼくれちまつて、顔を合わせても話が弾んだためしがない。

まあ、元気な時も話が弾んだ経験なぞ無いんだが。」

「その辺で……。」

柔らかく俺の親父に対する揶揄いを止めるママさん。流石忠臣だねえ。

「雁庵様はホテル暮らしを続ける雲鷹様を……心配している……様子でした。出来ればかぐや様と共に東京の四宮邸に落ち着いて欲しいとのお言葉です。」

まあ、面倒見ろって申し付けた息子が妹を一人屋敷にほっぽって根無し草の様な生活をしているのだから、一言いいたくもなるわな。

ただ、今の時点で俺がかぐやと同じ家に暮らすのは、かぐやのストレス要因にしかならんからな。

「それはできない相談だって、ママも分かっているだろうに。ただでさえ今、あの子は精神的に限界なんだ。そこに俺が押しかけたら、どうなっちゃうか分かったもんじやない。」

「そうとも限らないかと。というか、なんでそう貴方はときどき私をママ呼ばわりされるんですか。」

「いや、だってママだろ？愛ちゃんの。」

「外見だけで観たら雲鷹様の本当の母親だと周りに思われそうで困るんです。それにその顔でママなんて呼ばれたら……。」

「変な趣味に目覚めたら雲鷹様に責任を取っていただきますからね。」

急に女を感じさせる仕草をしてしなを作るママさんに思わず後ずさる。

「ああ、いや俺は永遠の童貞を目指しているんだ。そんなチエリーに子持ちの人妻は少々所か荷が重すぎる。」

俺の突然の告白に目を白黒させて呆然とする早坂ママ。

「え、あ、雲膺様ってそうだったんですか。あ、いえ、今までどなたともお付き合いはないとは報告を受けていましたが、まさかそんな状況だとは思いませんで。

というかいきなりなんて事を言い出すんですか。時と場合を考えてほしいんですけど。」

まあ、確かにビジネスホテルの一室で、周囲には俺の側仕えと俺と早坂ママだけの側仕えも無言でそそくさと部屋の外に出ようとし始める。

やめんか、変な気を使うな。

俺の視線を受けた一人が、退室を断念し、代わりにコーヒーを入れ始める。こんなビ

ビジネスホテルの一室だからな、備え付けのインスタントしかないが、俺にはこれで十分だ。

「いや、俺はてつきりいつもの年齢ネタで弄ってくるものと思っていたからな。野郎同士じゃあるまいし、すまん、加減を間違えたか。」

側仕えが淹れてくれた珈琲を二人で手に取り、一啜りしてから落ち着く。

「その、最近、年齢で雲鷹様を弄るのは少々気が引けて来まして。」

「なんでまた？俺なんざ今だに鼠ネタでお前さんを揶揄うのが楽しいが。」

「そこは、まあ、私が悪い所もありますから、甘んじてお受けいたします。本来、げんこつ一発で許されるような事ではありませんでしたし。だとしてもとても痛い一発でしたけど。」

んー？なんかあったんか？

「実は、今回の件に少し関係がありました。雲鷹様がホテル暮らしをしている間、本家の者たちで周囲を警備しております。お気づきでは無かったかもしれませんが。」

おおう、そう言う事かい。そりや場所なんてバレバレだわ。本当にこういう所が俺は抜けているな。物理的な保身に興味が薄い。理由は、不老不死だから。

まさか本家に迷惑をかけていたなんて想像もしなかった。

「それは色々と迷惑をかけたな。コストもそれなりにかかったろうに。ああ、後で請求はこつちに回してくれ。」

「いえ、雁庵様はその件については特に何もおっしゃっておりません。ただ、こう彼方此方のホテルでお泊りされますと、警備計画が破綻しがちでして、可能ならちゃんと警備できる四宮邸で暮らしてほしいと。」

その方がかぐやさまの様子も分かるでしょうし、雁庵様も安心できますので。」

「だがな、その……、かぐやのストレスの種にかならんだろう、俺は。」

「既にかぐや様の了解は得ています。「普段、お互い顔を合わせないようにしていただけるのなら問題ありません。」との事です。」

ああ、それはそうだろうよ。かぐやなら俺が学生の頃その屋敷に住んでいた事なんて分かっていようし、自分こそが邪魔者だと考えてもおかしくない。

今はまだ、周りは全て敵モードの筈だしな。そんな中で、本家から四宮雲鷹がその屋敷に住む事になるが宜しいか？なんて聞かれたら「嫌です。」なんて言えないだろうに。

ああ、こんなことになるなら最初からどこか適当な戸建てかマンションを買っておけばよかったな。

既にかぐやに話がいっている状態で「やつぱりやめた」なんて言い出したらかぐやはどう反応するだろう？ああそうか、と思うだけだろうか。それとも自分と一緒に居たくないからだと過剰反応するだろうか。傷つくだろうな……うん、傷つくな。

案外、来なくなつてラッキーとも思うかもしれないな。

ま、出来るだけ関わらないようにしていれば、負担を懸けずに済むだろう。

「まあ、そろそろ仕事が忙しくなる頃合いだからな。それほど屋敷にいられる訳じゃないだろうが、そこまで話を通しているのなら断るのも親父に悪い。了解した。了解した。んで？それが年齢ネタを避けるのとどうい関係があるんだ？」

ママさんの顔が何となく愉快に歪む。

「ええ、まずですね。雲鷹様がホテル暮らしを続けていらした関係で警備の手が足りなくなりましたね、人員を少々強化したのです。

それで、新人の研修に私共も携わったのですが、その時の警備用の資料を見た時に、少し。」

ん？警備員を育成する為の資料に何かあるのか？言いたい事が全然わからん。おかしいな、俺、一応天才の筈なんだが。チートのお陰だけど。

「大前提として、私達警護の人間や周辺警備の人間は重要人物や護衛対象の面相を把握する為に、日々更新される情報に目を通します。咄嗟の際、間違った人物の盾になっても意味がありませんから。」

おう、まあそうだな。

「資料は何かある度に更新されます。誕生日を過ぎたり、体形に変化があったり、容貌に変化が生じる何かがあった場合に。」

ですから毎年定期的に資料を見直して情報を共有してチェックするんです。ですが、その……雲鷹様のその資料に使われている写真が……。」

「写真が？」

「その、高校生の時、パーティーに参加された時の写真のまま更新されていませんでしたので。」

高校生の時の写真をずっと使いまわしていたって事かい。

「ああ、そうか。」

言葉が出ないよ。ん？最近気が付いたって事は？

「うん、いや、今までずっと使いまわしていたんなら、ママさんも気が付いたはずだよな。毎年定期的にチェックするんだから。」

「んで、今までは新しい写真を使っていたから、特に気にする事も無かったって事じゃないか？」

「ええ、まあ。ただ、警備関係の配置換えで一部手違いが発生したようで、資料作成の担当者が写真を取り違えたのに気が付かなかったとか。」

「高校生の時の写真と、昨年送られてきた写真で、顔の違いが全く分からなかった為、問題ないだろうと、その写真を使ってしまったように。」

「なんだ、その愉快な奴。面白いな、今度挨拶に連れてこいや。」

中指をおっ立てながらつい声が漏れた。

だから、気の毒で年齢ネタで俺を弄る気になれなかったって事ね。

早坂奈央はわかりたい

「ああ、折角だ、下のコンビニで何か茶菓子買ってきてくれ。」

「雲鷹様、お客様にそのような適当な物をお出しする訳にもいきません。側にお仕えする私達もその程度かと侮られてしまいます。本家にお仕えする方達に恥ずかしいところを見せる訳にもいきませんし。」

御命令くだされば、少々お時間はかかりますが、もう少しまともなものをご用意いたしますから。」

「申し訳ありません。普段の準備ができておらず、お客様に対応できない事をお詫び申し上げます。」

目の前で雲鷹様の側付きの者達が必死に頭を下げ、指示の撤回を懇願している。

主人に恥をかかせたことを恥じているのだろう。ただ、そうあるよう指示したのも雲鷹様だろうけど。どうせホテル暮らしの自分の所に客なんか来るわけないから無駄な

ことはするな、とでも言ったのだと思う。

ここで私を気を使わないでくださいなどと発言すれば、本家の使用人に侮られた、情けをかけられたとか、彼女たちが侮辱されたと感じて後が面倒になるでしょうね。ここはにつこり笑ってだんまりを決め込むべきかしら。

彼女たちを無駄に敵に回したくは無いもの。

天才ゆえの周囲への無関心なのか、雲鷹様は細かい所に拘らない。この者達もまだ雲鷹様に仕えて日が浅いのかも知れない。こういう時、ただ黙って了解の意を伝え、出来る範囲で主人に恥をかかせない物をさっと取り寄せるのが正解なのよね。

コンビニのお菓子を買ってこいと命じたのに、高級菓子が出てきたとしても、雲鷹様は気が付かないし気にならないのだから。

「ああ？客だあ？冗談云うんじゃないやねえよ。この鼠は客なんかじゃねえ。」

一瞬だけど胸の奥に痛みが走る。だけど直ぐに続いた雲鷹様の言葉にその痛みは霧散する。

「こいつは昔なじみのダチだ。ダチにそこまで気を使う必要はねえだろ。親父の言伝は終わったって事は仕事は終わったんだろ？」

もう少し付き合えや。」

私の様な裏切り者にはもつたない言葉をくれる。

「あんまりゆつくりする時間はありませんけど、雲鷹様のご要望なら。」

「おう、わるいな。正直、四宮邸で過ごしさにやならん明日以降の事を考えると、落ち着いていられなくてな。」

お前ら、わりいが買物頼む。」

「二人は御側に残らせていただきます。」

「そうだな、ま、女性と二人きりって訳にもいかんからな。わりいがそうしてくれ。」

そして存外紳士だ。

「んで？それだけじゃないって部分を聞かせろよ。」

そして変なところで気が回る。

「大したことではありません。先日、愛が色々とご迷惑をおかけしたようで。その件でちよつと。」

私がこう言えば。

「ああ気にすんな。愛のケアをするって約束したからな。おめえとも本人とも。これも巡り巡ってかぐやの為になる。」

鼠共の為じゃねえから安心しろ。」

こう憎まれ口を叩きながら、言葉を返してくれる。

言葉遣いは以前より大分悪くなってしまったけど、心根は私が仕えていた頃と全く変わらない。

確か、かぐや様を引き取って育て始めたころからおそらく意識的に言葉遣いを変えられたはず。ここ最近は何かに乱暴な口調になってきていると報告を受けている。

まるで何かを演じるように。

雲鷹様なりに、それがかぐや様の教育に必要なだと考えた結果なのかもしれないわね。

……悪影響しかないように思えるんだけど、天才の考えることは分からないわ。

反面教師とか？

「出来れば、娘まで鼠呼ばわりするのはやめていただきたいのですが。」

「ああ、そうだな。あの子が悪いわけじゃねえよな。わりい。」

あの子は悪いわけじゃない。でも私は間違いないくこの方を裏切った裏切り者だ。

本来ならこんな風に声をかけていただけの立場にない。

家出後の愛の様子や、かぐや様との確執、そして愛の気持ちを、本人に許可された範囲なら、という条件で話してくれる雲鷹様。

ああ、この子達ももしかしたら私と雲鷹様の様になってしまふのかしら、と不安が湧き上がってくる。

「ま、大丈夫だろう。かぐやと早坂愛ならうまく乗り切るさ。そう信じて見守るしかないねえだろ？」

気楽なセリフの中に、何か確かなものを感じた私は口を閉じ、そつと頷く。

そう、私はこの方を裏切った。私は雁庵様に命じられ、この方の情報を雁庵様に流し

ていた。それだけだったら、私も私自身を裏切り者だと断じることがなかったかもしれない。

あれは雲鷹様が頭角を現しつつあった頃。まだ小学生の内から父、雁庵様を説得し投資の資金を得、それを元手にあつという間に財産を築き上げ始めた。

当時、ほぼ四宮グループの後継者だと目されていた黄光様は、あつという間に四宮家での地位を確立していく雲鷹様の姿に恐怖した。

「今更後妻のガキに全部かつさらわれる訳にはいかねえんだよ。」

この言葉を表面だけでとらえれば、四宮家の後継者としての地位、権力、財産を指して言う、欲深い言葉に聞こえるかもしれない。

ただ、この時までには四宮家を継げるのは、将来、総従業員数90万を超えるグループを背負って守っていけるのは黄光様しかいなかった。青龍様は最初から能力、意欲が足りず、事実上後継者候補は一人だけだったのだ。

だからこそ、逃げたくても逃げられなかった。話に聞いただけで、私も見てきたわけではないけど、黄光様だって若い頃は夢もあり、やりたいこともあり、恋人がいた。

噂によると、彼女にべた惚れだったらしく、必死になって口説き落とすのだそう。

ただ、この時点では四宮家を継げるのは彼しかいなかった。彼が好きになった女性は、家柄があまりよろしくなく、結婚したとしても四宮家に利益のある女性ではなかった。もちろん、黄光様の後ろ盾になんかとてもなれるはずもない。

最初はひどく抵抗し、彼女と結婚できなければ家を出るとまで啖呵を切ったみたいだけど、ある日突然に彼女の方から黄光様に別れを切り出した。

昔のドラマによくあるパターンよね。彼女の父親が務める会社や彼女の家族の生活を人質に取られれば、当時子供でしかなかった黄光様にはなす術はないわ。

結局、黄光様は四宮家を継ぐ為に自分の大切なものを殆ど捨ててしまった。いや、捨

てられてしまった。だからこそ、今更自分よりも優秀な後継者を認める訳にはいかなかったし、後継者の座に固執もする。

自分の全てをなげうった代わりに手に入れるはずだった四宮家。それが後妻の当時10代の少年にすべて持つていかれるかもしれない。

とても許容できる話ではない。だから、雲鷹様の側使いだつた私と、当時すでに敵対状態にあつた四条家に黄光様は目を付けた。

よくある簡単な謀略ね。

四宮家の切り崩しを狙っていた四条家の目が雲鷹様に向くように仕向け、取り込まれる、もしくは取り込まれたよう見せかけ証拠を捏造。それを雲鷹様の情報を当主様に流していた私に掴ませる。

あわれ四宮家三男、四宮雲鷹様は後継者レースから脱落してしまうという寸法。

四条家が雲鷹様を取り込もうとしている証拠は、あっさりとは簡単に私の情報網に引つかった。当たり前よね。私はその情報を雁庵様に流さなければ、意味がないのだから。

そのままただ、だまされただけならば、私も被害者。愚か者ではあつても裏切り者にはならず済んだかもしれない。

ただ、当時の私は、はつきりとした証拠があつたわけではないけれど、タイミング的になんとなくこれが黄光様の罠だと気が付いていた。でも相手は次期当主の黄光様。当時の私はまだ子供でどうすればいいのか判断が付かなかつた。

当然、誰にも相談なんかできなかつた。

そしていつまでも情報を雁庵様に流さない私が、罠に気が付いたことを察したのか、黄光様は私に接触してきた。

詳しい話は一切しなかつた。ただ「家族が大切なら自分の義務を果たせ。俺の側も親父に情報を流していた。仕事をしろ、それだけだ。」と。

私は、罨と知りつつ黄光様の圧力に屈するしかなかった。

だから私は裏切り者。

だけど実際はそうはならなかった。私の様子がおかしい事に気が付いた雲鷹様が、私が雁庵様に情報を漏らしていることに気が付いて、「このドブネズミが！」と一発ガツンと頭を叩いたのだ。

「まったく、四宮家つてのはここまでするんかね。ああ、いやだいやだ。拒否も出来ない子供にスパイの真似事を強要するなんて、まともな大人のすることじゃないね。」

奈央、後は俺が処理する。

お前は全部忘れろ。」

そう宣言すると、さっさと雁庵様に連絡を取り、話をつけてしまった。

雲鷹様のゲンコツはものすごく痛かった。あの方、肉体能力も優れてらっしゃるか、軽くたたいたつもりでもものすごい力なのよね。

でも、その痛みのせいで、雲鷹様への罪悪感がその時ばかりは吹っ飛んだわ。ほんつと痛かったんだから。死ぬかと思つたわ。

多分、ね。その後の雲鷹様の言動を見ていれば分かるけど、黄光様がご自分を私と四条家を使って嵌めようとしたことには気が付いていないと思う。

単に雲鷹様は私と雁庵様のラインを潰しただけ。黄光様もそれはわかっていたみたいで、もう私を罠に使うのは無理だと考えたみたい。すでに一度危ない橋を渡っているのですもの。私の口から何が飛び出すかわからないでしょうし。

もちろんただの子供だった私がそれ以上の行動に出ることはできなかった。

黄光様はしばらく様子を見ることにしたみたいだけど、その短期間でますます黄光様は雲鷹様に手出しができない状況になっていった。

雲鷹様が高等部に進学して、2期連続生徒会長になって、副会長さんに恋をして。やっぱり黄光様の様に諦めて、アメリカに行くことになったとき、私と雲鷹様の主従関

係は終わりを告げたわ。

主従であつた時の最後の雲鷹様の言葉が。

「達者でな、裏切り者の鼠ちゃん。何かあつたら連絡しろや。場合によつては相談にのつてやる。」

だつた。私は裏切り者。契約主義者を標榜しているくせに約束を破つた私を許してくれた。そして彼は約束を守ってくれる人。

だから恥知らずにも私は雲鷹様のご厚意に甘えて、娘のことを相談している。そのうえ彼はこんな私を友人と言ってくれる。

目の前で側仕えの者たちが買ってきたコンビニのバームクーヘンを素手で頬張りながら、美味しそうにコーヒーを飲む彼。私にはちやんとお皿に切り分けてフオークを刺して差し出してくれたわ。

軽く礼をして私もお菓子を一口。先ほどまで頭の中を絞めていた苦い思い出を、さつと甘いバームクーヘンが流してくれる。

本当に美味しそうに食べるわね、雲鷹様。ああ、コンビニのバームクーヘン、好きなのね？これ。なんだ、そういう事ね。

私ね、側を離れてようやく貴方を少しずつ理解できてきたの。

案外、天才と謳われる雲鷹様も難しい人じゃなく単純な人なのかもね。

……それはそれで置いといて、雲鷹様って本当に年を取らないわよね。肌もあの頃と全然変わらないじゃない。いつまでも子供っぽいままなのはお気の毒だけでも、そこだけは単純にうらやましいわ……。

四宮邸にて 二人の八雲

ママさんには明日以降、なんて言つたけどまあ、あちらも受け入れ準備に多少は時間がかかるだろうし、此方も何と申うか気まずい。

途中、仕事が入つた事を理由に、これ幸いと二月ほど欧州をグルグルしていた。ちゃんと四宮邸の方には断りを入れておいたぞ。

日本に戻つた時には、もういい加減覚悟を決めて東京の四宮邸に帰る心構えが出来ていた。

飛行機の到着時間が朝、その後色々あつて四宮邸に戻つた時間帯が昼だったので、学校に通学中のかぐやには合わずに済んだ。

ま、約束が、お互いに普段は顔を合わせないようにする、だからな。これでいいんだが、普段は、つーことは引越し初日くらいは家主に挨拶すべきだろう。

俺にも心の準備がいるから、かぐやが帰宅するまでは用意されていた俺の自室で横になる。昔俺が使っていた主寝室は女の子に相応しく改装して今はかぐやが使っている。

俺はいつまで住み着くか分からんからゲストルームで十分だと言っておいたのだが、一応この部屋はこの屋敷の中では2番目にいい部屋ではある。

主寝室とは一棟分くらい距離が離れているから、時間帯をずらせばそう滅多に顔を合わせる事も無いだろう。

移動は全て、自分の所有しているジェットで移動したお陰で待機時間も殆どなく快適ではあったが、それでも少々疲れた。ベッドに横になりながらグツと伸びをする。

基本的な部分で庶民感覚が抜けない所があるからな。普通にエコノミーで十分なんだが、と以前愚痴をこぼしたことがある。小学生の頃か。

結局、警備や利便性の点で反対された。ビジネスジェットの手配が出来なかったとき、止むを得ず民間航空を利用する際は最低でもファーストクラス。もしくは貸し切りにしろってさ。

予定が詰まっているだろう民間機の貸し切りの方が難しい様な気もするが。

まあ、言いたい事はわかる。普段から危機意識を持ってつて事だろう。

そこまで危機意識を持たないと案外あっさり被害に遭ってしまうのが、こういう世界に住む人間なんだ、とガキの頃から口を酸っぱくして注意を受けていたから今更この件で反発するつもりは無いけど、な。同じ年頃のママさんに、アメリカに行く前に何度も何度も説教されたよ。なかなかちゃんとした反応を見せなかった俺に、最後には涙ぐみながら。

んで、流石に素直に分かった、気を付けると返事したら笑ってくれた。

俺もプライベートジェットを個人で所有する程度には金持ちにはなったけど、嫌だねえ、こういうのは。

使わねえ間の維持費が勿体ないから一族で使いたい奴がいれば好きに使わせている。日本からあんまり出ない親父や兄さん達は必要になれば民間のビジネスジェットを借りていたから、急な用事の時に都合が合わせやすくなったと意外と好評だったりする。いくら自分の所の系列の航空会社のビジネスジェットがあっても、お客様の予定を横からキャンセルしてこちらの都合に合わせる訳には行かないからな。

小学生まではかぐやとも顔を合わせる機会が多かったし、あの頃は彼方此方社交パ-

ティーに連れて行っていたからな。あの子も何度か一緒に乗った。

か。
そう言えば最近、かぐやとは顔を合わせてないな。最後に会ったのはいつの頃だったか。

そんな事を考えていたらいつの間にか寝ていたようで、側近の天野の声で目を覚ます事になった。ああ、天野八雲。原作では本当の所どうだかわからなかったけど、所々体のラインやスーツの前の合わせの部分の数コマ分の微妙な違和感で、女じゃね？このキャラクターって思っただけ、少なくともこの世界では女だった。

そう思っただけで側近にしたんだが、考えてみれば俺が人材を集めるのは大抵本拠地だったアメリカだ。で、原作雲鷹が人材を登用したのはおそらく日本。主流である兄の本家派閥から外れている家に天野家って所がある。

もしかやと思っただけで調べたら、そこにも天野八雲がいたよ。つまり原作の八雲は多分、日本にいる方なんだよな。性別を調べたら普通に男だった。

テンションは下がったけど、同姓同名で異性、って所が気に入って日本の方の八雲も雇った。話を付けると八雲の両親が大喜びで、命懸けて忠誠を誓いますつてさ。だから怖いんだって、そういうの。本人もやる気満々でやんの。

元々早坂家と同じように汚れ仕事なんかを担当していた家柄で、このまま主流から外れて没落すると、いずれ使い潰されるかもしれないと将来を不安に思っていた所に俺からの誘いだつたから、俺が救い主に見えたんだろう。

原作では雲鷹に忠誠をつくしてはいたけど、なんとなく無理難題を押し付けられたせいか表情が暗い感じがしたからな。

この世界では俺の思い付きで少し髪を長めに整えさせ、一目みると女性かなと思わせる様に装わせている。

そのおかげか、それとも俺がブラツクな方面で無理難題を言わない影響か、普通に笑顔が可愛い女の子に見えるよ。こいつが目覚めたら俺のせいだな。

もちろん、面白いからそうさせているだけで、俺にそんな趣味は無い。これは誓つて本当だぞ。実は二人とも遠縁の親戚らしくて、顔立ちが似ているから、二人とも女の格

好をさせておけば色々と利用できそうでつい、ね。

だから今連れ歩いている側仕えは両方が天野八雲だったりする。片方は先輩の女の子、もう片方が後輩の男の娘っぽい感じの子。本人は趣味じゃないけど、言いつけに従っててくれている。

今回、アメリカに残していこうとしたら、真つ先には是非お側に置いてくださいと二人とも志願してきた。その時の勢いが少し怖かったから、つい押し切られちゃった。因みにその時の女八雲の方の顔がギラギラしていたので、出来る限り二人きりにはならないように気を付けている。

ああ、因みにママさんが遊びに来てくれた時に部屋に一人残ったのは男の方な。理由は女八雲を部屋に残すのが何となく怖かったから。

「雲鷹様、お休みの所申し訳ありません。かぐや様がお戻りになりました。」

もちろん、部屋に一人で女八雲が入ってきて声を掛けてくれば、警戒心が跳ねあがり、パツと目が覚める様に条件反射が出来ている。

怖いのが、目覚ましには丁度いいんだよ。本人はそんな風に思われているなんて考えていないだろうから、起こしに来るときはお前が来いという俺の指示を能天気喜んでい

る。
これ、多分俺がシヨタな外見のままだから、女八雲さん目覚めちゃったのかもしれないな。一応、分を弁えてはくれているから、本格的に身の危険を感じたことは無いんだけどもな。

「ああ、すまんな。」

一声礼を言ってから、軽く身だしなみを整えてかぐやの待つ応接室へ向かう。甲斐甲斐しく女八雲が髪を整えてくれる。あかん、胃が痛くなってきた。

「2か月の間、欧州でのお仕事お疲れさまでした、お兄様。これからは我が家でゆつくりとお寛ぎください。」

「おう、その言葉に甘えよう。急に世話になる形になっちまってすまん。変わりはないううだな。」

「ええ、おかげさまで、お兄様も……っ！……お変わりがない様で。ええ、本当に……。」

応接室、向かい合ったソファーに座る久しぶりに見るかぐや。俺が原作で観た、氷姫のかぐやそのまま、冷たい目で俺を見ている。一瞬何故か表情が作画崩壊の様に崩れたが、気のせいだろう。俺も負けじと四宮家の血筋を全開にして、冷たい視線をかぐやに送る。

少しでも気が抜けるとふにやっとした笑顔になりそうだからな。腹の下から力を入れんといかん。心なしか、かぐやも気合を入れているのか、力が入っている気がするん

だが。

かぐやは兄弟中、俺にだけこんな態度を取る。黄光兄さんや青龍兄さんには内心は兎も角、にこやかに挨拶を交わすくらいのは芸当はちやんとできる。

かぐやにとって黄光兄さんも青龍兄さんも敵、だからだ。少なくとも味方ではない。隙を見せる訳には行かない相手という事になる。

という事は、俺はそうみられていないのか、という事だが、まあ育ての親の様なもんだつたからな。腹の中はお互い分かっているつて事だろう。

今更取り繕う必要は無いつて奴だ。

これは原作でも恐らくそうだったのだと思う。しよつちゆう顔を合わせていたわけではないが、他の兄弟よりは顔を突き合わせ、年中パーティーに連れまわし、人脈形成をさせていたんだ。

当然、原作でも教育方針は雲鷹が決めたのだし、彼女の幼少期を支配していたのは間違いない。この世界でも同じだ。

当然原作でもこの世界でも、彼女にとって俺は……敵、だろうなあ。原作では最後に感謝はしているって言うていたけど、この世界ではどうなる事やら。

つい懐かしくなつて応接室を見渡す。ああ、幾つかの調度品がおそらくかぐやの趣味に合った物に取り換えられているな。

「何かごございましたか？」

そんな俺の様子が気になったのかかぐやが訪ねてきた。

「ああ、いや。所々、昔と変わっているなど思つてな。良い趣味だ。」

「申し訳ありません。元々はお兄様のお屋敷だったのですからご不快に思われたらご容赦ください。」

氷のように冷たい目で、礼節だけは完璧に冷たい声色でそんな事を言う。

いや、そんな事を言われてもな。この世界ではそうかもしれないけど、原作ではかぐ

や様の屋敷だったし、世界の異物である俺の立場からしたら、どことなく居心地が悪い感じがするんだ。すんません、産まれてきてすんません。

「いや、今はここの主人はお前だ。お前の好きにすればいい。俺は適当に隅っこで暮らすから、約定通り、必要以上に関わるな。お互いにな。」

「っ……分かりました。お兄様。それでは私はこの後用事がありますので失礼しますわ。」

そう言うと、ソファアールから立ち上がり一度だけ何かを言いたげな視線を俺に向け、力なく振り返り自室へと戻るかぐや。

その後をついていく早坂愛。会話中の様子を見るにどうやら、二人の間に存在した物は徐々に解消されつつあるようで、先ずはめでたい。

ん、……んー？

心の隅に浮かんだ疑問をとりあえず放置して自室へ戻る。女八雲に夕食にコンビニ

弁当を買ってきてくれと伝えて自室のソファで横になる。

なにやら両方の八雲がちゃんとしたお食事をとらないと駄目ですとかうるさいから、それじゃハンバーガー買ってこいって命令したら、またぎやーぎやー騒ぎ出す。

お屋敷のコックが哀れです、とか、かぐや様の面子がとかうるさい事を抜かすので、出された飯も買ってきた奴も両方食うからさっさと行ってこいと一喝して外に出した。

うん、かぐやの最後の様子少しおかしかったよな。俺、何かやらしたかもしれん。

原作の開始 秒読み

特にイレギュラーが起きる事もなく、かぐやと早坂愛の関係が崩壊する事もなく日々がすぎ……、どうもかぐやは原作の通り、藤原千花を友人にしたようだ。

同時に天才ピアニストの引退の記事が少しの間新聞の紙面を騒がせた。藤原がかぐやの友人になったのはピアノを辞めて暫くしてからの筈だから、タイミング的にはおかしくない。

約定通り、直接顔を合わせる訳では無いが、同じ屋根の下に暮らしてりや、かぐやの様子か少しづつ変わっていつてる事がわかる。とは言え、彼女を完全に変えるのは藤原千花ではない。白銀御行だ。

あと数年でそうなる、はず。

それまでノンビリ日本で暮らすつもりだったんだけどね。

運命の歯車が少しずつ回り始めるのを感じて、俺は……。仕事に忙殺されアメリカ、欧州、アジア各地を飛び回っていた。

この所、四条家の動きが主に欧州で活発化していて、対応するのに手一杯になっていくんだよね。地味に移動に時間を取られるのが痛い。本気で転移魔法関係の習得をすべきか悩んだ。

意外と死者蘇生の魔法よりも習得が難しいらしくて二の足を踏んでいた。もうほとんど使っていない魔法に関しての知識から、相性の問題って結論が出ているので早期の習得は諦めた。

まあ、来世までには使えるようになっていけばいいや、みたいな感じで。

一応、投資に必要な狡い魔法の一部や簡単な魔法は暇な時に訓練しているんだけど。魔力のコントロール力を鍛えて、顔だけでももう少し年を取りたいし。

四条家の細かい動きは原作からは読み取れないけど、大まかな動き、フランス銀行を四条家の投資部に統合するというアクションがあつたはず。あれも実際に色々事業を展開して投資していると判るけど、どうやってやったのか不思議だったんだよね。

フランス銀行ってフランスの中央銀行な筈で、あそこを四条家とは言え一民間企業が経営統合出来る筈が無い。四条家が武力なりでフランスを征服でもしない限り無理でしよ。

んで、色々調べたら日本語訳した際にフランス銀行と訳される比較的小規模な銀行がこの世界にはあったという落ちが付く。なるほど、それで納得いった。

こっちは万が一を考えて十年以上前からフランス銀行内部に草を仕込んでいたのに、全くの無駄になってしまった。

まあ、何かの役には立つてしようという事で、仕込んだ草はそのままにしてあるけど、入り込んでいる者たちはいつか来るかもしれない四条との戦に備えて、来るはずもない命令を待ち続けるんだなあと思うと、少し泣けてきた。

今から統合されるであろう別のフランス銀行に草を仕込むわけにもいかない。時期がちよつと近すぎて、四条家に洗い出しされたら直ぐに排除されるだろう。

後、実際の四宮グループの総資産、原作だと200兆円とか言っていたけど、何かの

間違いか実際はもつと大きい。今の段階で四条が海外、日本ひつくるめて総資産120兆くらいだし、四宮はそれよりもでかい。

四条と共に抜けた四宮の海外事業の立て直しがある程度終わっているから、300〜350兆くらいの総資産があるはずなんだよね。

あ、俺個人の事業を抜かしてだけど。

四宮がでかいのはもしかしたら俺のせいかもしれないけど、四条が原作よりもでかいのはちよつと気になる。微妙に原作との差異がこの世界にはあるのかもしれないね。ま、俺みたいな異物が入り込んでいる世界だからね。何処かに矛盾が出てきてもおかしくないと思うけど。

と、まあそういう訳で、現在中々日本には帰れない状況が続いたりする。

で、日本に中々帰れないままかぐやは中学を卒業して、今年の春から高校生になった。

……駄目な保護者だよな。中学校の卒業式にも出てやれないなんて。事情を理解しているから、親父に出てやれなんて言えない。

多分、親父も自分の薄情さを自分で責めて、今回も自室に籠って苦しんでいるんだろうな。小学校の卒業式の時も親父はそうしていた。

一声かけるだけでも、良いはずなのに、それがどうしてもできない。

かぐやの性格から考えるに、本当に四宮の血筋だと思わない？原作雲鷹さんもそんな感じだよ。伝えるべき言葉を伝えず素直に成れず憎まれ口を叩く。まあ、簡単に言うとは素直じゃない。親父の場合は事情が事情だから仕方ないかもしれないけど。

因むまでもなく、俺は本当の意味で外道人間だけだな。なにせ全て分かかっていて自分の我儘で見捨てているんだから。

一応、近況は同居している者の義務としてかぐやと早坂愛、四宮邸の者には伝えてい
るが、事ここまですつたら、多少の言葉を送っても大勢に影響はないだろうと判断して、
一言だけ綴ったカードをかぐやに送った。

「卒業、おめでとう。」

とだけ手書きで書いたカードだけど、殊の外かぐやの心に刺さつたらしい。あの氷姫
の筈のかぐやが、俺を嫌っている筈のかぐやが、俺の送ったカードを大事に机の中にし

まい込んでいると奈央さんからチクリがあった。

因みに、早坂愛はこの件に関して一切の情報を俺に漏らさなかった。うん、それでいいんだと思う。

そうこうしている内に、春が過ぎ、夏休みが終わって暫く。かぐやが生徒会に入り副会長になったと知らせが来た。生徒会長はもちろん白銀御行だ。ここで変なイレギュラーは起きずに済んでホッとしたよ。一応、同姓同名の別人の可能性もあるので、日本に滞在させている俺の直属に生徒会長の写真と履歴を送ってもらったから、間違いはない。

ああ、原作開始まで後約半年。感慨深いものがあるが、ここで一つ問題がある。

俺は原作の名シーンを再現し、それを見る為に必死になって原作の流れを追い続ける努力をしてきた、つもりだ。

でも、俺は今仕事に追われてとても日本に帰る余裕なんかない。

よしんば、仕事に蹴りを付けて日本に帰れても、どうやって二人の名シーンを見ればいいのか。

いや、真の目的はかぐやを白銀御行に嫁がせる、であってデバガメが目的ではないのだから、悩みどころが違うという突込みは甘んじて受けよう。

……今更そんな事を考えるな、もつと前から対策を打つべきじゃないのか？という突込みも当然甘んじて受けるべきだろう。

いやさ、何となくだけど原作さえ再現すれば普通に漫画やアニメを見るような感じで、二人のストーリーが見れると何の疑問もなく思い込んでいたんだよ。

ま、まあ？デバガメするのだけが目的なら、んー……、方法は無くはない、な。

今までほとんど使い道のなかった魔法は、情報収集に限って言えば盗聴、盗撮に便利な魔法も幾つかある。その内の一つは最初にある程度仕込んでおけば距離によるデメリットは発生しない。

この魔法は、それほど難易度が高い物じゃなく、魔法の練習に熱が入っていた時期に使えるようになっていた。なんでこの魔法を練習したかは聞くなよ。

因みに既に秀知院生徒会室には魔法の種は仕込み済みなんだよね。うん、俺が生徒会長の時に、ちよつとね。

だがそれで果たして原作を満喫できていると言えるのかと思うとちよつと違う気がする。いや、目的は原作の満喫じゃないだろうと言えはその通り。だがどうせなら苦労に見合った成果を得たいじゃないか。

……もう一度高校生になって秀知院に潜り込むというのはどうだろう？ 戸籍を新しく作る位俺ならばどうという事は無い。既に今まで似たような事はやらかしている。世の中奇麗事だけじゃ回らないって事だよ。

今からかぐやと同じ学年に入り込むのは目立つだろうから、来年の新生になれば……。

まさかここで俺のベビーフェイスが役に立つときが来るとは思わなかったな。

ああ、でも、いや。

うん、いや冷静に考えれば無理だわ、これ。普通にかぐやにばれるな。うん、一応俺の優秀なブレーション、ではないけど突込み担当のママさんにも妄想で意見を聞いてみよう。

「何それ普通にキモイ。」

つて言われて、軽蔑されて終わつたな、うん。

他に何か方法はないかな。

なにか原作に干渉したいわけじゃないんだ。ただ、折角この世界に転生したんだからほんの少し原作の空気を間近に感じていたいだけで。

んー、暫く思い浮かべもしなかったから魔法に関する知識が錆びついてて何か有効な魔法が無いか、全然頭にうかばない。

いや、たとえば学校に潜り込む方法が浮かんだとしても、この仕事が忙しい状況で全て

をほっぽりだして日本に帰る訳にもいかんよな。そんな事をしたら折角対四条用に用意した様々な対抗策を全て失いかねない。

それだけ凄い勢いで四条は活動を活発化させている。

もうちよつと現場で踏ん張っていれば、後は日本から指示を出す形でも何とかかなりそうだけど、それが後どのくらいかかるか。半年か一年かまだわからん。

あー……んー……、これ詰んでないかい？

大人しくデバガメで我慢するべきか。いや、倫理的にNGな部分を覗くつもりは無いんだけどさ、せめて原作の幾つかのシーンを心のアルバムに取っておきたいからさ。「かぐや様は告らせたい」の大ファンとしては。

距離の問題、時間の問題、見た目の問題。全て解決するベストな方法。尚且つ絶対に身内バレしないで万が一にでも早坂ママにキモイって言われぬ方法。

そんな方法ある訳な……い？

あー、そうか。アザーセルフ、「もう一人の自分」って魔法が確かあつたはず。

確か元ネタはそれなりに使いにくい制限がかかっていたと思う。24時間しか効果が続かないとか、自分と全く同じ姿しか作れないとか、作成時、自分の側に複製体が作られる仕様になっているとか。

ただ、俺が手に入れたチートならば魔法の改良も出来る筈。ただし、相当に魔法の訓練をしなくては使えないだろうけど。

今から、魔法の訓練を始めて間に合うのだろうか。仕事もそれなりに山積みで、人目を避けて一人になる時間も無い。

いや、やるしかない。

ここまで踏ん張ってきたのだから、あと半年いや、必要な手続き含めると……たしか

秀知院学院高等部の外部生願書受付って1月初めくらいだったよな。

で、今が10月末。えつと、11月、12月、1月……えつと、えつと。

後2か月とちよつとあるかないかって事、だよな。

ああ、無理だわこれ。

かぐや様は兄さまを……

私は親の愛情を受けた記憶がない。母親は私が生まれてからすぐに亡くなってしまった。父親は母が亡くなってから殆ど私にかまってはくれなかった。

私には赤ん坊のころの記憶がある。

記憶にある中で一番古い記憶は多分、母の亡くなる少し前。赤ん坊だったからぼやとした視界の中だったけど、おそらく父と母が寄り添って外を見ている風景だった。

それ以来、私に家族と呼べる人は一人、いや二人だけ。

一人はもちろん父。

本当に回数は少なかったけど、抱き上げて母に沿わせてくれたから。小さい頃何回か頭をなでてくれたから。それが愛情なのかはわからない。

ただ、頭をなでてくれた父はいつも悲しそうだった。

もう一人は兄さん。私には兄は3人いる。だけど私が心から兄と呼べる人は一人だけ。

四宮家の麒麟児、四宮雲鷹。

小さい頃は、ずっと兄さまが私を可愛がってくれた。兄さまがお顔を見せてくれるたび私は笑っていたわ。私を育ててくれたのは早坂奈央。ちょうど同じ頃産まれた娘の早坂愛と一緒に育ててくれた。だから、私にとっては奈央さんはお母さんのようなものね。

でも奈央さんは私のお母さんにはなってくれなかった。

まだ私がかまく動けない時から何度か雲鷹兄さまは私のベッドに来てくれて、可愛がってくれていた。

隣に寝ていた早坂も、雲鷹兄さまはあやしてくれていた記憶がある。

しばらく顔を見なかった時もあるけど、気が付いたら私の顔を覗いて笑ってくれていた。

兄さまは小さい頃は神童と呼ばれていたって話で、子供の内からお金をいっぱい稼いで、すごく偉い人なんだって、まだ言葉を理解できていなかった私に奈央が寝物語に話してくれた。

その時は、言葉としてではなく音として何となく記憶していたけど、言葉を覚えてからその日の事を思い出せば、奈央さんが話してくれた内容を理解できた。

でも、兄さまが私を可愛がってくれたのは小さい時だけ。ある日を境に兄様はパツタリと私を可愛がってくれなくなった。

「まだ言葉は通じんだろうから言ってもわからんかもしれんがな。

俺は親父からお前を任された。かぐや、俺はお前を強くしなくちゃならん。もう甘やかすわけにはいかなかった。これから先、お前がどんなに辛かろうと、泣こうと手抜

きはできん。

すまん、俺にはそうするしかやり方がわからん。」

そう告げると、私の頭を一撫でして、部屋から出て行った。

いかに私が兄さまのような天才だとは言え、言葉をまだよく理解できていない時の会話を、細かい内容まではつきりと思いつけず出せる事は殆どない。この言葉の他で思いつけるのは奈央さんがよく話しかけてくれたお話の内容だけだった。

不思議と、兄さまのこの時の言葉だけはずっと耳について離れなかった。

その日から私の兄さまは兄さまではなくなった。奈央さんもお母さんにはなつてくれなかった。

お父さんも私を愛してくれない。

そして私に味方は誰もいなくなった。

幼稚園に行くようになって、お家でも沢山の悪い事をするようになった。間違ったら手を鞭で叩かれるの。すごく痛い。間違わないように、一生懸命頑張ったわ。

時々、兄さまが最後に頭をなでてくれた時の言葉を思い出したわ。強くなればいいのよ。そうすればまた兄様は兄さまに戻ってくれる。また頭をなでてくれる。そのはずよ。

強い人ってどんな人なんだろう。

兄さまは兄さまじゃなくなってしまったけど、私を色々なところに連れて行ってくれた。どんな場所に行っても皆、兄様に頭を下げていた。兄様は私を見るときはすごく冷たい目をしていた。

兄様はきつと強いのね。

少しずつ兄様の目を真似できるようになってきた。兄様を見るときはいつも真似し

ていたわ。だって、目の前にお手本があるんですもの。何となくにらめっこをしているようにで内心笑いを堪えていたのは内緒。

早坂と再会したときはうれしかった。早坂は赤ちゃんの時一緒にいたことを覚えていなかったけど、初めて友達ができるのだと思った。

私に味方してくれる子が早坂だったら素敵だわ。そう思った。

でも早坂は友達にはなれないって。

だからお願いしたの。お仕事でもいいから私の味方になってほしいって。

本当は友達になって欲しかった。本当は普通におしゃべりしてほしいかった。だって赤ちゃんの頃から一緒にいたんだもの。それってもう姉妹のようなものよね。

本当は、お姉ちゃんになってほしかった。

本当に欲しいものは手に入らないと学んだわ。

習い事を早坂も一緒に受けるようになって、表情を殺すことを学んで、泣いては駄目と教わって早坂は泣いちゃって。

母さんの七回忌の時に学んだわ。兄様もよく言っていた。言葉にした約束を守らない奴は信用できないと。

早坂も教えてくれた。信用できる人だけを友達にするべきだと。

早坂の顔が凄く寂しそうだったのを覚えている。

だから私に友達はずつといなかった。

早坂は友達じゃない。私の使用人で私の味方。それは早坂自身が選んだから。だから私に友達はいない。

早坂が家出をしたとき、私は間違えた。

いつも強い早坂が、奈央さんに嘘つきと怒鳴って家を飛び出したの。私はとつさに早坂を追いかけた。

あの子、足が速いから中々追いつけなくて。一度見失ってからあたりを探し回ってやっと見つけて。

「なんで」って聞くから、早坂が選んだ答えをそのまま返したわ。

だって、あの時早坂が求めていた言葉は、私にとってはどうしても口にはできない言葉だったから。

本当は友達だと言いたかった。でも、私は早坂と友達になる約束はしていなかった。

言葉で、ちゃんと確認して約束していなかった。だから、あの時私は「友達だから」とは言えなかった。

あの日から早坂は使用人になった。私には味方は一人もいなくなつた。

ある日奈央さんから、東京の四宮邸に雲鷹兄様が住む事になりそうだと。それを父が望んでいるという事を話して、私に許可を求めてきた。

良いも悪いも、元々この家は雲鷹兄様が東京に住む際に建てた家。私は兄様に住まわせてもらっているだけ。少し考えたけど、断る理由はなかった。

ふと思った。私に味方はいない。一人で生きている。私は泣かない。私は友達がいなくても平気だ。

私は……、強くなったのではないか。

兄さまの言葉が頭に浮かぶ。「お前を強くしなくちゃならん。」兄様は私が強くなったか見に来るのかもしれない。私が強くなったら兄様は兄さまに戻ってくれるのかもしれない。

そんな事あるわけないのに、その時は何となくそうだと良いなって思った。

でも、もしかしたら。

ただどこで弱いところを見せては駄目。強くなったと思ってもらえない。顔を見たらまた睨み返すか、気を抜いたら弱い所見せてしまうかもしれない。だってお久しぶりですもの。もしかしたら笑ってしまうかもしれないわ。

これは兄様のテストかもしれない。

幼いころからの家庭教師もよく、意表をついて急にテストをしてきた。そしてちゃん

とできなかつたら手の甲を鞭で叩くのだ。

それならば甘えないところ、強いところを見せなくては。

でも正直、兄様に会うのは怖い。今、あの冷たい目で睨まれるとどうすればいいのかわからなくなってしまうかもしれない。

……今はあまり兄様と顔を合わせたくない。

だって、もう今更な話じゃない。兄さまは兄さまではなくって私を愛してくれないのだから。子供が臍を曲げるような言葉が私の中にポツと出てくる。

だって子供だし。

自分でもどうすればいいのかわからない。もう少し時間が欲しい。

「普段、お互い顔を合わせないようにしていただければ問題ありません。」

少しでいいのよ。私の中で色々整理がついてからなら、また以前の様に兄様のあの冷たい目にも耐えられるから。

直ぐにでも兄様がお引越してくるのかと思つたけど、お返事をしてから、ずっと兄様は来なかつた。仕事が忙しくなつて、欧州に出かけているのだとか。

少しホツとした。

いつの日からか、少しだけ早坂がやさしくしてくれる時があつた。何かあつたのかもしれない。

そういえば、兄様がこちらに引越してくるかもしれないと聞いてから、少しだけ今までと雰囲気が変わつてきたような気がする。

だけど私との関係はずつと使用人と主人のままだった。気が付けば、ほんの少し立ち位置が私に近くなつた位の違い。

だけど、私に取っては大きな違いだった。

結局兄様はお仕事で2か月くらい欧州に行っていた。

ある日学校から帰ると、家の者が雲鷹兄様がいらしていることを伝えてくれた。

……普段合わないようにと御約束したけれど、こういうときくらいは挨拶をした方がいいわよね？

兄様のお家に住まわせてもらっているのは私の方なんだし。

流石に2か月も時間があれば私だって覚悟の一つくらいつくわ。

兄様の側近の方に挨拶をしたい旨お伝えして応接室で待つ。ちゃんと上座は兄さまの為にあけてあるわ。

う。それほど待たない内に雲鷹兄様が応接室に入ってきた。ああ、何年ぶりの兄様だろう。

「2か月の間、欧州でのお仕事お疲れさまでした、お兄様。これからは我が家でゆつくりとお寛ぎください。」

「自然と兄様を労う言葉が口について出てきた。でも隙は見せない。ちゃんと兄様を見習って目を作る事は忘れない。」

「おう、その言葉に甘えよう。急に世話になる形になっちまってすまん。変わりはないようだな。」

「変わりは……ありますよ？小学生の頃より成長しましたし、いっぱい勉強しました。家庭教師からも褒められましたし。」

「強く、なりましたよ。きつと。」

「ええ、おかげさまで、お兄様も。」

えっと、お変わりなく、お変わりなく？今気が付いたのですけど、本当にお変わりありませんわね。え？赤ん坊の頃に見たお兄さまとも変わっていないように見えるのですけれど。

「……っ！」

え？えっとお兄様って今お幾つでしたっけ？あれ？父も兄たちも私が子供の頃と比較すればちゃんと年を取っている。お顔も変わってきているし、しわも増えてきたわ。

奈央さんも、直接言うのと睨まれてしまうけど、その……、最近小じわが増えてきているって、この前零してたわよね。

私の計算が間違っていないければ兄様ってたしか39歳位よね？奈央さんと大して変わらないお歳のはず。でも、どう見ても私の同級生とあんまり変わらない感じなんだ。

「……お変わりがない様で。ええ、本当に……。」

思わず崩れた表情をグツとこらえて引き締める。駄目だ、これは罨よ。目の前のお手本に忠実に目を作る。

乗りき……つた！

私が体勢を立て直している間に兄様はきよろきよろと応接室の中を見渡していた。

「何かございましたか？」

内心の動揺を表に出さないように声を作る。先生に教わった表情を出さない訓練、こんな所で役に立ったわね。

「ああ、いや。所々、昔と変わっているなと思つてな。良い趣味だ。」

応接室の調度品は早坂と二人で相談していくつか変えていた。まだ「完全な使用人」じゃない時の早坂と。

「申し訳ありません。元々はお兄様のお屋敷だったのでですからご不快に思われたらご容赦ください。」

思わず声が冷たくなる。

「いや、今はここの主人はお前だ。お前の好きにすればいい。俺は適当に隅っこで暮らすから、約定通り、必要以上に関わるな。お互いにな。」

「っ！……」

私は認められた？ここの主人は私。それは私が強くなったという事ですか？

でも、ああ私は言葉をまた間違えたのね。言葉が足りなかったわ。心の準備が付くまではつてつけるべきだったのよ。

え？ちよつと待つてよ。それじゃ私はもう兄様とは関われない？

いや、普段は、だから。何か特別な事があればいいのよ。簡単よ、色々と理由を作ればいいの。そうして段々と空気を変えていつてそのうち新しい約束を交わしましょう。

でも、一度胸に広がった動揺は簡単には収まらなかつた。

強くなつたと、多分認められた。でも関わらないと約束してしまつた。兄様は兄さまにまだ戻つてくれない。

「分かりました。お兄様。それでは私はこの後用事がありますので失礼しますわ。」

カツとなつて、とつさに立ち上がってしまった。立ち上がったからには部屋を出なくてはならない。ほんの少しだけ期待する。

兄様が私を呼び止めてくれるのを。強くなつたなつて。

そんな事起きる訳がないのに。

欲しいものは手に入らない。足早に部屋を出て自室に向かう。

何故かいつもより近い位置で早坂が付いてきた。

そんな私に初めての友達ができて、少しずつ早坂との誤解も解けてきて。中学を卒業して、高校生になった。

入学式から一週間たったころかしら。仕事で忙しそうに世界中を飛び回っている兄様から一枚のカードが送られてきたわ。

たった一言添えられたカード。

「卒業、おめでとう。」

思わず声を上げてしまった私を、私は責めない。これが兄様が私を認めてくれた言葉ではないのはわかる。でも、今までこんなことしてくれたことはなかったのに。家族の誰もしてくれなかったのに。

生まれて初めてのお祝いの言葉！

うれしくて、どうすればいいのかわからなくて早坂に泣きながら抱き着いてしまった。丁度、カードを態々手渡しで届けてくれた奈央さんにも飛びついた。

早坂も奈央さんも涙を浮かべながら抱き返してくれた。

その日から、私の机の中に宝物が一つできた。引き出しの奥に大事にしまっているの。

お兄様は帰国しました

本邸に植えられた桜が丁度満開になっている。四宮に産まれたはずなのに、本邸の桜は殆ど見たことがなかったな。

黄光兄さんと密談する際に使う、離れから眺める見事な桜に少しの間目を取られる。兄さんはまだ来ていない。

目をやると、テーブルの上には酒と何種類かのつまみと料理が並べられていた。言外に俺を信用する、というサインだろう。まあ、この料理か酒に毒が入っていても特に問題は無いから構わないんだが、黄光兄さんが標的と言う逆のパターンもありうる。

ま、本邸で出された飲食物をそこまで警戒する必要もない。最近の黄光兄さんを警戒する必要もない。だろう。

かぐやが副会長になってからいつの時点で白銀御行に惚れたのかは、原作では明言されてはいない。

原作での時の流れは微妙にわからない。秀知院の生徒会選挙は10月開始。実際には夏休みが終わってから中間テストがあり、それが終わってから生徒会が9月末に解散。その前後から立候補者を募ることになっている。10月の半ばには選挙が実施される。4巻ラストのQ & Aでは9月の選挙と書いてあったが白銀の2期目の選挙日は10月15日だったし俺の時も10月くらいに選挙だった。

普通に考えれば9月だと夏休み明けてすぐの試験に引っかけたから、なかなかタイミング的に難しい。後で設定が変わったのかもしれない。

白銀御行の誕生日の話題がかぐやとの間に出た時は、まだ本当に選挙が終わってすぐの頃だったろう。

この間誕生日だったんですね、というセリフとその時の服装から10月前後である事がわかる。

そして原作かぐやは高校生になってから弓道の選抜大会に一度も出ていない。その理由は白銀と、もしかしたらクリスマスを過ぎすかもいけないから、である。

大会開催日はクリスマス日程とどん被り。大会参加をキャンセルする時期はいつでも問題ないかもしれないが、少なくとも12月24日前には白銀に惚れていたという事になる。

だからまあ11月中には惚れたのかなと思っていた。

日本に残している部下にそれとなく、かぐやの様子を確認させていた。近況を報告させたのだけでも送られてきたかぐやの写真にはあのリボンが結ばれていた。

思わずガッツポーズをしたよ。

ああ、アザーセルフ？うん、一応練習したよ。万が一の可能性にかけて。もしかした

ら相性が良くてあつきりと覚えられるかもしれないからな。

その時の為に戸籍も一つ作っておいた。ま、無駄になったけどな。

仕事は忙しい、プライベートで一人に成れる時間は寝る時間だけ。睡眠時は周辺に警備が付いているから、あんまり大きな音は立てられないし灯りをつけるのも不審に思われる。

四条の中でも過激派の動きが活発になっていたからな。常に周りに警護をつけるよ、黄光兄さんから厳命されていたし、本家からかなりの数の護衛を回してもらっていたのもある。

あいつら、うちの子飼いと違って融通利かねえんだよ。

今、四宮の血筋の者で外で四条対策の指揮を執っているのは俺だけだから、余計に護衛たちがびりついている。四宮の海外事業を立て直したのは俺だから、結局俺がやるのが適任だからな。

こればかりは仕方がない。

削れる時間は睡眠時間だけ。しかもうるさくすればすぐばれる。

当然訓練がはかどるはずもない。いや、ギリギリになってから気が付いたのが悪いだけなんだけどな。

ま、それでも一応、何とか使えるようにはなった。発動成功率は6割を切るけどな。数か月分の睡眠時間を犠牲にしてようやくこれだよ。

不老不死だから、死にはしないだろうと高を括っていたけど、本気で地獄だったよ。医療関係、蘇生関係の魔法を訓練していたときなんかと比較にならないくらい地獄な毎日だった。

ただ、そんな状態ではまともな魔法の改良なんかできるはずもなし。副案として分身体に変装させる手も考えたけれども、日本に帰れない状態で24時間で消える分身体を作ってもあんまり意味ないよな。

秀知院の外部生の願書もとづくに閉め切られちゃったし、今回作った戸籍はまたなん

かあったときに利用すればいいかとすっぱり諦めた。ま、アザーセルフ自体は使える魔法だからな。特に仕事をこなしながら気晴らしで遊べるというのは良い利点だ。

単純に仕事の処理量も2倍になる。覚えておいて損はない魔法だから、タイムリミットが過ぎた後も、睡眠時間を削って訓練は続けていた。

ただ、まあ、リミット過ぎた後は少しは寝たよ。朝方ちよつとはな。

ああ盗撮、盗聴系列の魔法はどうしたって？正直まだ心の中の倫理観が邪魔をして使っていない。

一応、日本時間の夜中に動作確認のために一度だけ使ってみたけど、それだけだ。

通学していた時も生徒会室に何か仕込まれていないかアラームの魔法と組み合わせ使っていただけで、別に悪い事には……。

四条の情報を抜くために使ったのは悪い事カウントに入れなきや駄目か？ああ、そうか。うん、悪い事には使っているけど、下劣な事には使っていない。

四条幹部の不倫現場の情報を手に入れる際に、少々、過激な場面に遭遇したことはあるが、故意ではないから許してほしい。

おかげで、彼は良い情報源になってくれたよ……。

妹のラブコメをデバガメするのは……下種な行為、だよな。

ああ、本当にどうしよう。

悩んでいる内には経ち……春を迎えて、黄光兄さんがまたあの時みたいにも一度日本に帰ってこいと連絡をしてきたのを切っ掛けに、日本に帰ることになった。

仕事も少し落ち着いたし、この時期なら多分、石上の件を生徒会で色々やっている時期だろう。

もしかしたコミック1巻目の部分はまだ始まっているかもしれない。

そんな風に落ち着き無くしはじめていた俺には、丁度良いタイミングの召還命令だったから、とりあえずの最低限の引継ぎだけして飛行機に飛び乗った。

現地引継ぎのスタッフが「これが最低限の引継ぎ資料ですか。」とうんざりした顔で膨大な資料を確認していたよ。

データで渡した量もそれなりにあるけど、未だにこういう処理は紙でやるのが多いんだよね。皆古い時代の人間が多いから。

「おう、悪かったな待たせて。なんだ、先にやってなかったのか。遠慮することあねえのによ。」

思考が一段落着いたタイミングで兄さんが部屋に入ってくる。

「酒はいくら飲んでも酔わない性質だからね。一人でやってもつまらないんだよ。」

「……言葉使いがガキの頃に戻ったな。何かあったか。ま、なりはガキのまんまだけ

どな。もう四十を超えているはずなのによ。

本気でお前を研究した方が人類の為になりそうなんだが。」

もう原作雲鷹を真似る必要は、多分ないからな。後は早坂愛の誘拐劇だけど、あれはちよつと考えている。白銀の活躍……うん？あれは活躍していたっけ？ああ、七味を八雲にぶっつけたか。まあ、活躍はなくなっちゃうかもしれないけど。

時期が来たらママさんと早坂愛に話を持ち掛けてみるか。

黄光兄さんを直接攻めるって手もなくはないけど、既に早坂愛は情報漏洩をやらかしているのだから、根本的な解決にはならんし。

「勘弁してくれよ。まだあきらめていなかったのかい。」

「ああ、親父もこの所体調が良くない。ま、年だからな。俺だってもう、それなりに歳だ。おめえを研究して長生きできるかもしれないねえなら、やらねえ手はねえだろ。」

「見た目だけ若いだけだよ、こんなの。」

「調べてみねえとわからねえだろ？まだ一度も病院にもいっていねえみたいじゃないか。一度バラしてみるのは一興だぜ？」

「調べるにしても何でいきなりバラされなくちやいけないんだい？第一、一興とやらで死にたくないわい。最近リアルに危機感覚えているから、そういうのやめてもらえるかと助かる。」

残念そうに、酒を注いだ杯を手につつ兄。静かに合わせて杯に口をつける。

「外向けの仕事、ご苦労だったな。正直、お前以外に適任者がいなかった。」

「出来るだけの手は打ってきたけど、これ、あちらさんは止まらないぞ。」

「ああ、ここ十数年で四宮は更にでかくなった。四条が飛び出していく前と遜色ない

規模に回復している。だが、四条も国内の四宮との取引を一部切り上げ、新規開拓した分でかくなっている。

欧州は兎も角、アジアで少々後れを取ったのも痛かったか。」

欧州は、俺がここ数年力を入れてきただけあって、四条と勢力圏はどっこいどっこい迄持ち込んでいる。ただ、アジアは色々リスクがあるから、俺は積極的には動いていなかった。

「まだ欧州が落ち着いたわけでもないけれど、今回の召還はどういう意図があつての事かな？」

正直、日本に帰れてうれしい反面、現場を放っておくのが心配なんだけど。」

長期占いの結果も、良くはなかったから、このままいけば原作通り……いや、双方の規模がでかくなっているから原作以上に強烈的な衝突になるかもしれない。

ただ、原作と違い地方の差がかなりあるから、どうやり合つたとしても最後に残るの

は四宮になるけど。

そうなるように今までいろいろと調整してきたからな。四宮とは直接関係ない俺の事業もそれなりの規模になっている。

四条が動けばカウンターパンチで俺の事業が勢力を伸ばせるように、もう仕込んである。

何もかも目論見通りにうまくいけば、だけどね。

「ああそれだがな。」

以前もしたように兄さんは自分の顔を一頻り撫でまわし少し上を向く。途中ため息が漏れていた。

「おめえ、最近まったく眠っていねえそうじゃねえか。」

「へえ、それは何処からの話だい。」

「おつとこええ顔すんな。年寄りには堪える。勘違いすんな。おめえの周りに手は入
れていねえよ。護衛の奴らにも余計なことはさせていない。」

おめえの側周りの奴らから、おめえを心配して一度まとまった休養を取らせてほしい
と訴えがあつたんだよ。

それをうちの護衛が俺に伝えてきた。ま、身内が漏らしたんだ。いい話じゃねえ。だ
が、今回は素直に受けな。」

一瞬、子供の頃の苦い記憶が胸をよぎる。分かつていたからこそノーダメージなんて
言っていたけど、実際にやられると中々厳しいものだよな。あれ。

「いいのかな？数年以内に四条は動くよ。早ければ一年。」

「親父が健在だ。まだ仕掛けてはこねえだろ。」

原作通りなら今年の秋頃に一度倒れるはず。ちようど生徒会長選挙のあたりだろうか。夏に一度急に呼び出されてかぐやが皆と買物に行けなかった時があったはず。あの時に既に何か予兆を感じていたのかもしれない。

素直に接することはできなくても、死ぬ前にもう一度会っておきたかった、とかなかぐやの誕生日の時には既に一度倒れていたって言う事になる。そしてその事実がかぐやに伏せられていた。

まあ、いいよ。それは。わかるから。

「内部の掃除はできたのかい？」

「鼠はいくつか排除できたが、把握しきれん。汚れ仕事の方はしがらみが絡みまくって自浄なんかできやしねえよ。」

「やったら四宮は内部から崩れる。」

「まあ、切っ掛けがなくちゃねえ。」

「あちらの穏健派とは連絡はとれているのかな？」

「いくつか穏健派閥のリーダーには繋ぎを取っているが、あちらも過激派の抑えが利かないらしい」

「手打ちの目途は？」

「今はまだ想定も出来ん。あちらがどう出てくるかだが。……青龍が四条家の息子と以前から接触を持っている。

もしかしたらその辺りから何か来るかもな。前からお前が言っていたろう？最悪の場合なんてな。

「どうやらそれが当たりそうだな。」

「その場合、俺がどういいう行動に出るかわかって言っているよな。」

「ああ、そんな時はそんな時だ。情で従業員に飯は食わせていけねえ。」

「ふう、分かった。そんな時はそんな時だ。」

睨むわけでもなくもう一度杯を交わして、立ち上がる。

「久しぶりに楽しかったよ、兄さん。忠告通り、しばらく休養を取ることにする。お手並みを拝見させてもらおうよ。」

「はんっ。ここまでお膳立てされて、みつともねえザマ晒せねえだろ。おめえは精々羽を伸ばしてろ。」

黄光兄さんの言葉を背に部屋を出ていく。

ようやく、兄さんがラスボスを務めるだろう確信が持てたことに安堵と。

……かぐやを裏切っているような嫌な気分になりながら。

お兄様は告らせたい、白銀に

京都の本邸を出て八雲ーズに運転を任せて車をのんびり東京に向かわせる。下道を国道一号通つてのんびりと。

途中、何処か適当なビジネスホテルに一泊。八雲ーズが本邸に一泊する案を提案してきたけど、あの流れで黄光兄さんと別れてきたのにそれはねえよな。

結局酒は盃2杯しか飲まなかったけれど、久しぶりの飲酒に心が少し踊っている。

前世の頃は好きだったんだよ。ブラック勤めだったから、それだけが楽しみな時期もあった。でも今はねえ、いくら飲んでも酔わんのよ。

まず間違いなく不老不死辺りの何らかの機能が酔うという現象を阻害しているみたいだな。

お陰で酒を呑んでも詰まらん。その代わり今世では女子の様に甘いものが好きになった。酒か菓子か、か。少し笑えるな。

そんなにグルメって性質じゃねえ。コンビニスイーツで十分楽しめる。我ながら手軽なもんだ。最近では八雲ーズがその辺りを弁えていて、俺の好みの菓子を常に用意してくれている。ちよつと気恥ずかしいけど、有難く恩恵にあずかっている所だ。

高校生になったかぐやに会う。少しは大人になったのかな。氷姫の時と比べると時を経たにもかかわらずリボンを付けたかぐやは少しだけ幼く見える。早坂にはまた年齢ネタで弄られるかな。四宮邸で暮らしていた時は、結構遠慮なくズバズバ物を言っていたからな。

時折八雲ーズが過剰反応しそうになっていたけれど、最後の方では「またやってら」って感じで慣れていた。いや、早坂の影響で八雲ーズが少し変わったのかもしれない。

このペースでのんびり下道をいつても、休憩を挟んで大体明後日の昼には四宮邸に着くだろう。

途中、うまいもんでも食って気分転換をするのもありだな。

ま、八雲ーズは早めにお屋敷に帰って疲れを癒してくださいと文句を言っていたから、明日は高速を使う事になるだろうが。

こういう車でゆったり旅も嫌いじゃないんだけどな。育ちのいい奴らにはわからんらしい。

ふらりと入ったビジネスホテルなのに、気が付けばホテルの周囲は何処からともなく黒服が集まってきている。ご苦労なことつて。久しぶりの日本だから気が抜けていたな。

ふう……。この先どういう流れになるにせよ、一度四宮の内部は荒れる事になる。四条の手打ちの条件は帝が主体になるのなら、原作通りの流れになるな。四条家にトロフィーをつけてな。方便なのは解るがかぐやをトロフィー扱いするのは好きになれん。それでもおそらく、この世界観的にも他の流れは無いだろう。

四条が動いた時こちらの策が奇麗に敬れば、物語終了後、四条家の影響は世界市場からある程度排除されることになる。四条帝と眞妃の兄妹には申し訳ないが、かぐやが四条帝を選ばないのであれば、四条家は将来の四宮家の禍根となる可能性があるからな。帝が跡を継ぐのであれば問題はなさそうだが。

実際の所、そんなに奇麗にいくかどうかは運次第つて所だな。未来は、先になればな

るほど予知の難度が上がる。

四宮内部でのかぐやの立場は可能な限り守るつもりだ。内部抗争で血みどろの結末を迎える事になってもだ。黄光兄さんには万がいかぐやに望まぬ結婚を強いるなら覚悟しておくように伝えてある。

なら、最初からかぐやを守れば何事もなく白銀とスタンフォードに行けるだろう、というのも正論だが、可能なら原作通り白銀御行からの告白をかぐやに、と考えればこういう危険な橋も渡らざるを得ない。

どのみち四条の攻撃は起きてしまうのだから。

態々黄光兄さんに伝えたのは兄さんが内心反発するのを期待して、という理由もあるけど、ある程度事態をコントロールできればと考えての事だ。

この望まぬ結婚という所がミソだな。

本人が四宮家の為に自ら望んで四条帝との結婚を受け入れる、そんな原作の流れになるのなら俺は実力行使はしない、という事になる。

まあ、あれは白銀を人質に取った脅迫交渉だけだな。別に兄さんが脅迫しなくても、未来予想を話してやればいい。事実を積み重ねていって、少しだけ過程を曲げて最悪の未来を話してやるだけで。

かぐやが四条と結婚しない理由である、「白銀御行」を恨んだ四宮家の親戚連中が暴走して、彼を害するなんて事もありうる。親父と名夜竹さんの時も親戚連中は結構厄介だった。ましてや黄光兄さんでは事実として抑えきれるかどうかわからん。

事実として原作でも四宮家は黄光の本家派閥以外にも派閥があつて、それぞれに思惑がある。

雲鷹の派閥もあれば、かぐやに期待している派閥もある。青龍……はちと判らんが、四宮家以外、つまり血筋を否定する派閥もあるかもしれない。

これ、多分原作でも、四条との手打ちができなかつたら親戚連中が暴発していた可能性あるんじゃないかな。

これは普通に事実だから、頭のいいかぐやならすぐに理解できる。そして、自分から

結婚を受け入れると言いついだらう。白銀たちに一縷の望みをかけて。

黄光兄さんはプライドさえ捨てる事が出来るならこう言えば良い。「俺じや親戚連中を押さえきれん」って

この時点で黄光がかぐやを信じて、話し合いでの手打ちに賭ける可能性は、原作ではゼロだ。この世界でも黄光は多少ましにはなっているけど、それでも妹を信じられるような人間にはなっていない。哀れだとは思ってくれてみたいだけだ。

それだけでもすごい進歩ではある。全然足りないけどな。

俺が黄光に受け入れられて、それなりに仲良くやれているのは、俺が政略結婚から逃げなかった事と、今までの実績を彼なりに評価しているからだらう。一目置いてくれる訳だ。

結局は、白銀たちを信じて道を用意していたかぐやが賭けに勝ち、白銀と結ばれる訳だが、そこに至る道は一步間違えればバッドエンド確実の細い糸だったからな。

藤原と伊井野が言っていたな。女の子だって一度は助けられるお姫様をやってみたって。かぐやにもそんな気持ちがあったのかもな。

今の四宮家は親父が倒れたタイミングで仕掛けられても、壊滅的な打撃を受ける所まではいかない。が、やはり食い破られたら痛い腹はいくらでもある。

元々身内だった奴等がその気になれば致命傷とまではいなくても、それなりにダメージを四宮に与えることは出来る。

今のでかくなつた四宮家相手でもな。

短期的に見れば、四宮家は結局追いつめられるだろうし、手打ちはどうしても必要になる。

手打ちができなければ四条は潰れ、四宮も瀕死になって他の三大財閥に食われるだけになる。敵は四条、四宮共お互いだけではいけないのだから。

結局は落としどころなんだよな。

事が起こる前に何とかできる可能性……。いや、原作を守りたいというのもあるけど

実際の所そりや無理だ。

話し合いで決着がつくなら、やり合う前にかぐやを連れて頭を下げれば済むはず。だが、実際にやってみても上手くはいかないだろう。かぐやの説得が功を奏したのは眞妃の助けがあったれば、ではあるけど、四条自身もこれ以上意地を張れる状況に無かつたって事が一番の要因だ。

かぐやはおそらくそのあたりの、引き時の空気、感覚が解っていたんだろう。

暴走した過激派はあの事件以降急速に力を落としたはずだ。

遺言書は……どうなるんだろうな。かぐやも親父が残した遺言状が決め手の一つだと認識して、道を用意した筈だ。

頭はまわっても記憶力はあっても基本馬鹿な俺じゃよくわからんな。頭がこんがらがってきた。

原作とは違い俺がいる。黄光兄さんとは仕事の上では反発していないし、むしろ兄さんと阿吽の呼吸でやってきている。

今更どちらが四宮を継いだとしても、この形は変わらないと思うんだよね。俺が日本の外、兄さんが国内。俺は当主を継ぐかどうかなんてどうでもいいし。

ただ、反本家派閥は俺を支持はしないだろうな。基本的に黄光兄さんのやり方にそって四宮を動かしてきたから。

彼らが俺を支持するとしたら、かぐやに禅譲する事を条件にした場合のみ、だな。

人生は長い俺の場合は特に。

俺が継ぐ事になっても適当に、かぐやの産む子に後を任せて、後は自由に生きるって選択肢もある。世捨て人ってのも憧れるな。

それまでは身体に鞭打って働かさ。

と、なると早めに白銀にプロポーズさせんな。「かぐや様はプロポーズさせたい」まで始まったら、それを楽しみに見るのも良いけど、あんまりかぐやを待たせるのも良くないだろう。

たしか、野球チームを作れるくらいに子供を作ってくれるはずだから、ミニかぐやとミニ白銀に期待しよう。

今度こそ、ただの優しいおじさんでいられたら良いな……。直ぐに外見年齢で置いて行かれそうだけどな。

かぐや救出作戦の大きな力になる藤原さんも考慮から外せない。四宮の後継とかぐやの身の保全、そこを藤原さんがどう読むか。黄光兄さんの四宮家内部でのポジションをどう読むかが鍵になるか？

ああ、頭の中が堂々巡りでおんなじことを繰り返しているようだ。グルグルしてくる。

原作通り、俺を経由してかぐやに四宮を継がせる、と言うのであれば俺はそれでもいい。かぐやは好きな事をして実務は俺と兄さんがやればいい。兄さんは物理的に俺が抑える。その内白銀も戦力になるだろう。そういう未来もありだな。

かぐやが四宮を統べるなら俺は喜んで協力しよう。
クライマックスには物足りないけど。

そもそも黄光兄さんが親父に遺言書をどう書かせるか。いや、そもそも書かせるかも

問題だな。

兄さんは現状、無理に四宮家の権力を自分に集中させる必要性を感じていない。と言うか無理すれば四条の時と似たような形で、俺がまとめた海外勢が四宮から離脱する可能性を理解している。

無理しなくても親父の希望通り普通に相続して、そのまま黄光兄さんが当主になれば今と変わらず外国を俺が担当して協力して運営していく形になるし、それで普通に四宮はまとまる。

問題になるのは四条との手打ちの件であって、遺言書は黄光を話のテーブルに付ける為の手段なんだよな。そして遺言書は交渉の材料にならないかもしれない。

親父は俺がちよこちよこ擦っておいたからな。もしかしたら罪悪感で藤原の最初の案が案外すんなり通る可能性もある。黄光兄さんが遺言状を親父に書かせなかつたら、だけどな。その可能性は意外と高い。

その場合はゴタゴタなしか？

相続や主導権争い。

四条と四宮の分裂の件、あれも原因が四宮家が非道がどうの言っているけど、根本的な所で言えば主導権争いと変わらんからな。それが証拠に四条グループの中にもそんなに汚い事をやっている部門はある。身内に犠牲者だつて出している。内側のいざこざでだ。海外が活動の主体なら、日本の比ではない位、そう言う事が必要になる。実体験から言えばな。

大きな組織を束ねて、仕事をするって事は奇麗事だけじゃすまされないうって事だよ。

読みが外れて遺言書を親父に書かせたとしても問題ない。どうせ親父の資産がすべて兄さんの手元にいった処で俺の資産には遠く及ばない。四宮内部に浸透させている俺の資産は他人名義にしている分を含めるとかなりの範囲に及ぶ。

その気になれば主導権は取れる。ま、それを兄さんも知っている筈だから、火中の栗を拾う可能性は低いんだ。

人間、欲深さにも限度があつてね。一定以上のお金を持つているとそれ以上持つてもあんまり意味が無いんだよね。資産を増やす事が目的のゲームをしている感じになる事もある。

兄さんも、原作兄さんならいざ知らず、少し俺が擦り過ぎたせいで、一寸すりへつたうちの自慢（笑）の兄さんなら、遺言書には触れないかもな。

うーん、そうなるとかぐや側は何を持つて黄光兄さんとの交渉材料にすればいいんだろう。親父に「四宮かぐやに四宮家の権利を全て相続させる」と言う遺言状を書かせる以外だと……。

無理に複雑に考えずに、かぐやが俺を使つて兄さんの動きを封じて話の席に着かせるつてパターンしか思いつかん。

ただ、その場合でも原作のドタバタをする必要が無くなる。

あの白銀が父の操縦するへりでかぐやを救い出し、月夜の空で告白するという恐らく

これ以上はない、ウルトラロマンティックな一夜を見る事が出来なくなるな。

数少ない、俺がほぼ確実に見る事が出来るであろう原作イベントなのに……。

それに告らせたいというタイトルを回収した神回なのだから、無くては困る。かぐやだつて告られたいだろうし。

あれが無くて二人はくつつくだろうけど、あつた方が綺麗だよな。

それにしても、原作者様は本当に色々な所に伏線を忍ばせる。白銀の部屋の張り紙に打倒帝と書いてあるのも驚いたけれども、クライマックスの白銀と帝、そしてあの場面全体が竹取物語をモチーフにしている。

帝から見れば白銀はかぐやを連れさる月、もしくは月の使者。黄光達がかぐや姫を月にやるまいとする護衛の兵。帝はもちろん「帝」、開封せずに燃やされた遺言書はおそらく、富士の山の上で燃やされた不死の薬。

クライマックスの前は白銀が「帝」の立場で、かぐやは既に月に連れ戻されてしまつていて、不死の薬はもちろん現金10億。白銀はかぐや姫を取り返す為に不死の薬を飲

んだんだ。

クライマックス辺りの仕込みは、原作を読んだ時には最初は何となくしか気が付かなかったが読み返していく内にハツとして感動が巻き起こった事を今更ながらに思い出す。

……俺みたいな無能がいくら考えてもどうにもならんな。仕方がない、物語の完成度が下がるかもしれないけれど……。

遺言書の部分は省いちやって、単純にかぐやの身柄を本家から攫って、追われて行つてラスト、がベストかもな。ふむ……何か根本的に間違っている可能性もあるけど、仕方ない。

燃やされる不死の薬の代わりになるモノ、か。

まだもう少し時間はあるんだから、じっくりとどうするべきか考えよう。

約束のやり直し

東京四宮邸に着いたら思いの他歓迎された。

かぐやはいつも通りの氷の目をしていただけ、リボンは付けたまま。イメージとしては氷のかぐや姫になる時はいつもリボンを外していた。違和感が凄かったから、そのリボンはどうしたと聞いたら、少し顔を赤らめていた。

「お兄様には関係の無い事です。それに私だって女ですから、身だしなみの一つも気にするものなのです。」

「そう言うものか。いや、良く似合っているがな、そのリボンをしているときは少し笑っているともっとよく似合うと思う。」

そう言うのと、「余計なお世話です。」と少し大きな声を上げてから、すこしこつちを見ていた。

「お兄様、どこか話し方とかお変わりになりましたか。それにお顔も心なしか、いつもよりもどこか優し気で。」

もう、かぐやを氷にする必要は無いからな。気を張る必要もあんまりない。というか、この先俺、何するかな。

アザーセルフ使って秀知院に忍び込む件、日本に戻ってきた以上、出来なくはないけど生徒じゃないからな。あんなに抜けている学校に見えて、かなり警備はしっかりしている。見た事もない生徒が校内に入り込んだらあつという間に排除されるだろうな。

まだ本人そのものの分身体しか作れないし。

やれたとしても、まあ、通学路をうろつく位だけど、それも普通に警戒されて職質される。いや、俺の見た目年齢だと補導されるかな。

高校生に声を掛けようとして補導される四宮雲鷹。うん、原作雲鷹からクレームがつく案件だな、これ。

盗聴、盗撮も無しだな。正直、今の時期はまだ良いけど少し先になるとかぐやと白銀のいろんな場面を見てしまうかもしれない。うっかりな、うっかり。

そんな事があつた後にかぐやの顔をまともに見れんわ。後ろめたくて。

……ああ、そうか。後ろめたい、か。俺の心の中では「かぐやさまは告らせたい」のヒロインではあつても、俺にとっては妹、なんだよな。推しの対象でもあこがれの対象でも性の対象でもなく。

……初恋の対象でもなく。漫画のキャラクターが初恋つてのもお笑いだけだな。……わすれていたけど。

妹、だもんな。だから見たくないのか……。

約17年、か。17年は長いわな。法的にはもう少しで結婚できてしまう年齢だ。ついでこの間まで赤ん坊で、幼児で、小学生で。もう高校生だ。

俺にとってはキャラクターではなく妹に、……なつたんだろうな。17年かけて。

多分、今俺の顔は複雑な表情をしているんだろうな。

俺の表情につられたのか、かぐやの顔が微妙なラインを保っている。氷なのか笑顔なのか。ひきつつているようにも見えるな。器用な事だ。お互いに。

「ああ、暫くまとまった休養を取ることになったからな。自分の所も問題はない。気も抜けようというものだ。」

親父が倒れるのは今年の秋。二度目は来年の春。少なくともそれまでは暇で特にやることは無い。そう言えば、今世でゲームやった事無いしゲーセンにもいったことないな。アザーセルフの練習がてら、そういう所に遊びに行くのも悪くないかもしれない。

いや、本体でスーツ着ていくか？魔法使つてまで手数増やす意味、今はねえよな暇になるんだし。

「色々と肩の荷が下りるような事もあったからな。以前とは違って本当に暫くやる事がない。」

自社のグループの方は大方針を決めておけば後は大きなトラブルでも起きない限り俺が口を出さなくてもいいようにはしてある。何せ、四宮グループの海外部門にかかりつきりでそれどころじゃなかったからな。必死に合間合間でそう言う風にできるように手当てしておいた。

定期的に絞めてはいるし、占いで問題が起きていないかどうか確認しているから、今の所喫緊の課題は無い筈。

問題が起きるとしたら四条が動いた時、だな。可能性として、此方の方にも手を伸ばしてくる可能性もあるんだけど、四条の規模でこちら迄手を回す余裕があるかどうか。

しかも動いているのは四条の過激派だけであれば、余計に他所に回す力は無い筈。

「それよりも、高校生活の方はどうだ。生徒会の副会長になったと聞いたが、上手くやれているのか。」

普通に話しかけている筈だが、かぐやが混乱しているように見える。先程引き攣った表情だったのが、よく分からない表情になり、氷の目はどっかに行ってしまった。

「え、ええ。生徒会の方は、特に何事もなく。」

様子がおかしい。思いもよらない事を聞かれたかの様だ。実際そうなのかもしれないが。

「あ、ああ。そうだな普段は関わるなど言う約定だったな。すまん、気が抜けていてすっかり忘れていた。」

いかん、氷のかぐや姫を作る為、最終的にかぐやを幸せにするためとは言え、自分やらかしてきた事を一瞬、忘れていた。今更、かぐやの兄であると胸を張れるわけでもあるまいに。

「そつ！そのお約束は、……お兄様がよろしければお忘れください。」

顔を逸らして呟くかぐや。忘れろとは言うがな。

「ん、俺は構わんがお前さんが辛かろうよ？年頃の娘のストレス要因になるのも気が

進まんのだが。」

再度氷の表情に戻ったかぐやが俺をにらむ。

「ストレス要因ですか……。お兄様はもう私を睨んだりしないのですか。」

「あ、ああ、気を張る必要もないからな。休日の初老の爺ならこんなかんじだろ。」

「申し訳ありませんけど、初老どころか成人しているようにすら、見えないのですが。」

「まあ、不老不死だからな。そう言う風に見える事も否定はしない。」

「ふ……え？」

「冗談を真に受けるな。」

再度崩れかけた氷の表情を引き締めるかぐや。

「私をからかって……楽しいのですか？」

「ああ、兄妹は揶揄い合ってじゃれ合うもんだろ。」

「きょつ……。」

また表情が崩れるかぐや。さつきから何かおかしい。だけど、考えてみれば俺、様子がおかしいと思えるほどこの子と話していないよな。単に原作のかぐやのイメージがあるから、こんな話し方はおかしいと判るだけで。

じつと俺をにらむかぐや、さま。怖いっす。つい俺も睨み返したくなるけど、さつき睨まないと約束したばかりなのを思い出して堪える。

「私は……強く、なりましたか？」

「は？あ、ああ。そうか、そうだよな。」

まさか天才かぐやとは言え言葉を理解できていない時期の俺の言葉を覚えている筈もない。この子の能力はどちらかと言うと直観像記憶が人より優れていると原作で説明されていたはず。まさか言葉の方も覚えているわけ、ないよな。

それとも本物の天才はその位のハードルは容易く越えてくるものなのか。

じつと答えを待っているかぐや。

「ふん、まあ、強くはなつたな。ただ、まだまだ精進すべきところはある。強くはあつても脆くちや意味がない。」

「まだ、不合格ですか。」

不合格？意味が解らん。

「いや、何が不合格かは正直分からないけど。十分強くなつたんじゃないかな？」

とたんに目を輝かせるかぐや。

「お兄様は、お兄さまですか？」

これ、本当に意味が分からない。え？かぐや様どうしちやつたの？何故かかぐやは俺にちゃんと伝わっていると自信に満ちた顔で俺を見つめている。

正しい答えが解らん。ええいままよ！

「ああ、そうだな。お前の兄さま、だな。」

微妙なイントネーションに気を付けて答えてみる。この答えが正しいのかは分からない。

「そうですか。」

答えたかぐやの表情は自然とリボンが似合う少女のものだった。

「あ、お帰りになったばかりでお疲れですよ。申し訳ありませんね、お兄さま。お部屋の準備は出来ていますし、直ぐにお食事を用意できますわ。

そうです。お酒は嗜まれるんですっけ？早坂、家に置いてあるお酒のリストをお願
いできるかしら。

あ、御免なさい、お兄さま。さあお部屋にお戻りになってお休みになってくださいな。
ねえ？早坂、聞いてる？」

周囲を置いてけぼりにして一気にテンションを上げたかぐやに、俺は置いてけぼりを
食らってしまった。

その日の夕食は、ハイテンションなかぐやと共に取ることになった。酔えないが酒の
味はわかる筈の俺だけど、上等なものだというワインの味が全然わからなかったことは
追記しておく。

お兄様は見守りたい

「……………こちらB地点対象が現れました。」

「……………対象はシネマ方面へ……………」

四宮の優秀な人材が結集したただ一人、主の為に総力をあげる。かぐやの初めての映画デート、ただそれだけの為に、何十人ものスタッフが。

もちろん内心は馬鹿馬鹿しいと考えている奴もいるかもしれないけど、ま、顔に出すような愚かな事はしない。

それにそんな不屈きな事を考えるのは極一部である。

皆、もしかしたら対象「白銀御行」が主の想い人であり、将来の自分たちの主人の伴侶になるかもしれない、その可能性まで当たり前前の様に頭の中にある。

本家から派遣された使用人達ではなく主に早坂が纏めている使用人達だ。俺や本家からの指示には当然従うが、忠誠の対象はもちろんかぐやだ。

いずれかぐやが四宮家で栄達すれば、自分達もその下で働き命懸けで主を支えていくつもりなの奴らだ。

現在はカモフラージュの為に中立であったり、次男派閥の端っこでお茶を濁している者たちが将来、かぐや派閥に参集し、表立って四宮家に覇を唱える際には、自分たちが主の側を守るのだ、と意気込んでいる者たちが多し。また半数以上はそういう派閥から送り込まれた者で構成されている。

そうなるように俺が仕向けた。

だから大抵の奴らは、自分たちのやっている事が馬鹿馬鹿しくても、真剣だし、手は抜かない。

原作で、四条との抗争の際、かぐやに縋った四宮に仕える家の者達も、そう言う家の人達だったのかもな。黄光兄さんの仕込みの可能性もあるけど。

俺の子飼いの奴らも大抵同じ感じだ。この人を支えて自分も栄達する。この人を支えていつかは主をトップにしたい。そんな風に考えている奴も多い。

「雲鷹様、私達はこういうのスパイ映画みたいで楽しいから良いんですけど、なんで雲鷹様迄参加されているんですか？四宮家の三男が使用人に交じって……。ご当主様が耳にされましたら嘆かれるかもしれせんよ。」

「なに、その嘆く予定の親父が俺に妹を託したんだからな。兄としては妹の将来の相手かも知れない男は気になるもんだ。

ここがかぐやが下手を打つてもらってもつまらん。まあ、困る妹の姿を見るのもそれはそれで楽しくもあるが。」

それにこの映画デートイベントは、学院内に干渉する術の無い俺が参加できる数少ないイベントの一つだからな。当然、万難を排して参加するに決まっている。

つーか多分、生白銀、見るの初めてじゃね？あ、いや、でも今の配置場所じゃ、映画館遠くて、ちらりと見る機会もないな。

変な動きして何か失敗したら目も当てられん。映画館に近づき過ぎてもかぐやにバレル可能性がある。自肅せんといかん。

「歪んでますねえ。こんな事は八雲ーズである私達に任せて、雲鷹様はお屋敷でこゆつくりしてほしい所ですが。」

「ゆつくりと言われても、本格的にやる事がねえ。妹が毎日学校に通っているのを横目に日がな一日ボーっとして一日何回か指示書をメールで出してそれで仕事が終わるだけだから。これじゃ落ち着かん。」

「普通はその指示書を書く為にそれなりの労力がかかる筈では？一度拝見した際は、その量と質に、正直お休みになられていないと思ってしまうましたよ。」

「あのくらいならな、大した量でもない。」

実際、神様からもらった情報処理速度と記憶力はこういう所では役に立つ。最近では睡眠時間に分身体を作って深夜から朝のうちに済ませてしまう様にしているから、俺自身はちゃんと眠れているし。

その内、仕事が忙しくなったら活用できそうだな、これ。

いずれ仙人掌カミングアウトでもして、堂々と使ってみるか。業務効率が跳ねあがるぞ！

……いや、自ら人間の枠から外れていくスタイルはやっぱりやめとこう。万が一かぐやに化け物を見るような目でみられたら悲しいからな。

「それより、なんで自分たちで八雲ーズなんて言い始めてんだか。」

「雲鷹様が私達を呼ぶときにどちらでもいい時は八雲ーズって呼ぶからでしょう。段々慣れてきてもう以前から私達ペアの正式名称になってます。」

「ああ、そう言う流れか。お前ら色々流され過ぎだろう。」

「今では私達の他、雲鷹様付の者6名全員八雲ーズの正式メンバーですよ。」

……四宮家の優秀な使用人とはとても思えない。が、その主人たる俺が根がふぎけているせいで、俺に仕える者たちも調子を合わせてくれているんだろう。

早坂が時折俺を弄るからな。それが八雲ーズに感染し、更に周りに感染したか。弄られても怒らない俺を見て、調子に乗ったのかな。

ま、その方が俺は気楽でいい。こいつらと仕事をする分にはこの先も楽しめそうだ。

「おら、仕事に集中しろ。望んで志願したんだろう？」

「雲鷹様も今は配置されている人員の一人ですよ。お言葉をお返しします。これ、かぐや様は知っていますか？」

「ああ、早坂は気が付くかもしれないが、かぐやは多分知らんだろうな。あいつが俺に惚れた男の情報を掴まれているなんて知った日にや、そりやもう大変な事になると思うが。」

「少なくとも四宮邸が一部損壊しても俺は不思議には思わん。」

「雲鷹様じゃあるまいし、そんな事にはなりませんよ。」

それにしても、これだけ大騒ぎしていて雲鷹様にバレないと考える当りが、かぐや様

のお可愛い所ですが、万が一かぐや様に気が付かれたらどうするんですか？」

原作でもあれだけ人員を動かせば、雲鷹には気づかれていた可能性はあるな。配置されていた原作の使用人たちも何故こんな事をしているのか、分からないほど鈍感じやなからうし、そのルートから雲鷹にも情報は漏れている筈。

解っていて、学生の頃の思い出作りを許容したか、そもそもかぐやに政略結婚をさせるつもりが無かったか。だから自分の身を守るように育てたのか。

やっぱりかぐやが幸せになれた要因に雲鷹は外せねえな。

そんなかぐやも感謝はしているとは言ったけど、その前に死ぬまで恨むとも言っていない。

この死ぬまで恨むという言葉も表面だけ取れば、誤解しそうだけど、裏を返せば死ぬまで忘れないという事。だから一生感謝する、って事になるよな。そうだとしたら、本当に分かりにくいツンデレだよな、兄妹そろって。

「大丈夫だろ。今のかぐやはそれどころじゃないよ。全神経を白銀御行の動向に集中

しているし、周りは見えてねえ。

自然な流れで白銀と合流する事だけを考えている。俺に気が付くはずがねえ。

それより、仕込みの方はどうなっている。」

チケットの買い方を知らず、白銀と段違いの席を買ってしまう喜劇を何とかしてやりたかった。ギャグ落ちも悪くないけど折角うまく誘えたデートだしな。

ここは純粹に良い思い出をつくってもらいたい。

映画館のチケット販売員全員に金を掴ませて、此方の人員を何人か潜り込ませた。白銀が買ったチケットの番号が解らずあたふたするかもしれないかぐやにさりげなく、白銀の席を伝えて正しい席へ誘導するようにしたんだ。

かぐやは今回に限って言えば詰めが甘かった。

ふつ、結構色々考えたんだけど、結局これが一番スマートだろうと思つてな。

「ご指示の通りに。しかし、こんな事をしなくても早坂あたりに話を付けてチケット

の買い方を事前にレクチャーさせれば済んだと思うのですけれども。」

ああ……そうか。

「いや、そうかもしれないが、現時点で俺達がかぐやの惚れた男の情報を掴んでいる、と早坂にバレるのは不味かろう?」

「いや、屋敷中大騒ぎだったし、早坂的には雲鷹さまにバレるのは覚悟の上だったのではないでしょうか。」

それに、もしそうじゃなかったとしても、私達八雲ーズが作戦の疑問点として早坂に質問するだけで解決したような気がするのですが。」

ああ、そうだな。うん、いやあ、全く馬鹿げた話だなあ。原作に関われると思ったら突然心が浮ついて、まともに頭が回らんかったわ。

「こんな所で何をなさっているのですか? 雲鷹様。

まったく、かぐやさまったら、折角私が雲鷹様にも白銀会長の件を漏らさないよう気

を付けていたのに。

いくら、ご注意申し上げても、ばれないように気を付けなければいけません、お願い早坂って……。

ばれない訳ないのに。っていうか、雲鷹様本人を監視人員に配置しちやつてるし！どおりで報告の声の中に若い男の子の声が混じっていると思ったら！」

いきなり後ろから早坂愛に声を掛けられたが、最初から分かっていたよ風を装って、ゆつくりと振り返る。実際は口から心臓が飛び出すかと思つたよ。

「まあ、惚れた腫れたは人を愚か者にするからな。」

「……え？雲鷹様ってそういう経験あるんですか？」

くう、煽り口調に素直に煽られそうになる。

「ねえよ、悪かったな。」

「ですよねー。だって未だに独身ですもの♪」

自分が愚かになるほど、誰かを好きになったことは無い。

「あーあ、これどうするんですか。まさかこんなバレ方するとは思わなかったですよ。第一、なんで雲鷹様がこんな事に参加なさっているんですか！」

「いやー……。暇だったからな。やる事なかったし。なんか楽しそうな事やっていたから気になってな。八雲ーズもノリノリで参加するみたいだったから、俺も混ぜてもらおうかなって。」

「馬鹿ですか貴方は。何処の世界に面白そうだからって妹の立てた作戦の監視員になるMIPがいるんですか。」

ミツプですよミツプ。もすと いんぽーたんと ぱーそん！最重要人物！！

貴方はもつとちゃんと自分の立場を自覚してください。本来なら10人位で済んだ配置人員があなたの警護をする必要が出ちゃって、私の知らない間に30人近くに増えちゃってるじゃないですか。」

……ああ、そうか。嫌にゾロゾロ黒服がいるなどは思っていたんだが。

「ああ、作戦の規模にしては嫌に人員が多いなと思ったら、これ、俺の護衛に回っている奴等もいたのか。」

呆れ顔の早坂は軽く上を向きながら苦笑いを浮かべる。

「もう……まったく。なんで貴方はご自分の保身に意識が行かないんですか。あ、不老不死だからはもう駄目ですからね。本気で冗談に聞こえないですから。」

いい加減、仙人ネタは止めろと注意されてしまった。

「いや、それよりも作戦はもういいのか?」

「かぐや様から先ほど解散命令が出ました。今残っているのは警護の者だけ、悟られぬ距離で付いているだけです。」

それで。」

早坂の目が少々きつく、冷たくなる。

「何をしたんですか。」

ああ、何か勘違いをさせたかな。

「いや、そのな。かぐやって映画館でのチケットの買い方わかっているのになって。」

一瞬ポカんとする早坂。

「え、いや、まさかかぐや様に限ってそんなポカやらかす筈が……。」

「多分、あいつ映画館初めてだろう？」

「か、会長がいますし。」

「あの意地っ張りが素直に男にくつついて受付いくか？システムが良く解っていないんだぞ？」

あれだろ？前から色々お前からやっていた仕込みの件だろう？映画の前売り券仕込んでいた奴。かぐやの事だから、あの券だけで映画を見られると思ってるかもしれない、席を決める必要がある事も知らんだろうからな。」

「あ……ああ、というかその辺りからバレていたんなら言ってくださいよ。いつ雲鷹様にバレるか私はヒヤヒヤしていたんですから。」

「だからな、チケットの販売員にこちらの人員を潜り込ませた。」

早坂が頭を抱えて呆れた声を出す。

「なんでそこまでしちゃうんですか。解っているなら私に一言いうだけで良かったじゃないですか。」

暫く動かなくなっただと思っただら、少し真面目な顔になって俺と向き合う早坂。

「というか、かぐや様が男性とお付き合いする事に、反対はなさらないので?」

……どう答えるか。今の時点でどういえば良いのか。

「俺達も親父には、恋愛は自由にしても良いと言われた。俺個人としてはかぐやが幸せになるなら構わん。

俺の口から兄さんや本家の者には伝わらんよ。八雲一ズ、おめえらも解っているな?」

「承知しております。」

「命に代えても秘匿します。」

「……と、いう事だ。」

表情を緩めない早坂。

「恋愛は自由、ですか。」

「そう言う事だよ。この場ではこれ以上は言えんな。……上手く立ち回るんだろ。」
とたんに理解の色を見せる。

「では後ほど、また相談に乗っていただけますか？私の主がだんだんアホになってきている件について、話を聞いてくださる方がいないので。」

「アホってお前な……。」

「それを言うなら私達の主も今回アホだったよな。」

「結局この件でいったいいくら使ったんだ？」

「いや、大した額じゃない筈、数百万程度だと思いが。」

「たかが販売員を買収して人員潜り込ませるだけでそんなにかかったのか？」

「いや万が一に備えて色々やっていたみたいだ。上映作品全ての中央辺りの席を終日押さえたりとか」

「アホだな。」

「アホだろ。」

「アホですな。」

アホだよな。

早坂愛は癒されたい

最近のかぐや様は雲鷹様と夕食を一緒にする機会が多い。最初の内は雲鷹様は遠慮しようとしていたのだけど。

「そうですか。残念ですわ。」

と、少し寂しそうな笑顔をかぐや様がしたら、急に気が変わったらしく、一緒に食事をする事になった。

ただ、朝はかぐや様も忙しいし、昼食は大抵学校にコックが食事を届けに行く。ご家族で一緒に出来るのは、夕食だけの様ね。

雲鷹様ものんびりと休養を取っているとか言いながら、なにやら夜中ゴソゴソ作業をなさっているようで、就寝時間が過ぎてもしばらくの間は部屋の明かりが消えることは無い。

おそらく夜のうちにご自分の会社からの報告を確認して指示書を作成されているだろう。

こんなんでお休みは取れているのだろうかと思うのだが、八雲―ズ達の話だと夜中には電気が消えてるし、以前よりも顔色が良いという話だ。

お二人の夕食が始まる前に手早く自分の夕食を済ませ、お傍に着き。お食事が終わった頃に別の仕事に回る。正直宿題などやっている時間は限られているし、時間の余裕などほとんどない。

お食事中、ご兄妹としては拙いのであろうけど、それなりに話も弾んでいた。雲鷹様は普段、冷たい印象を受ける方だが、休養を取られている今は本当に、印象が変わらせてしまった。

例えるなら、以前の雲鷹様は目付きが悪い背伸びをしているヤンキーだとしたら、今の雲鷹様は姉であるかぐやのいう事を素直に聞く可愛い弟、といった雰囲気だ。

おもわずかぐや様もおかわいいと口を漏らす程度には印象が変わっている。ついつい、色々としやべりたくなる様で、時折、会長の事を話しそうになり会話が不自然に止まってしまふ事もある。

みていてこつちはヒヤヒヤものですよ、かぐや様。

特に今日は映画デートが上手くいったことを、どうしても喋りたいらしく、いつもなら楽しんでいるお食事も、会話が中断するたびに私に視線がチラチラ飛んできて、正直どうすればいいのか戸惑う。

使用人風情が主人たちの会話に混ざる訳にもいかず、じっと耐えているけど。

ああ、かぐやさまに言ってやりたい。その目の前で何も知らないふりをしている男は、今日、かぐや様の映画デート大作戦で監視役として配置されていた一人なんですよって。

そんな事を言ったら、かぐや様はどんな表情をするだろう。ちょっと楽しみだけど、

雲鷹様から話を聞くまでは私は何も話せない。

そんな話が弾んだのかどうか微妙なお夕食を終えて、私も仕事を終え、かぐや様に呼び出され、今日の映画デートのお話を聞かされる。

かぐや様的には偶然映画館であつて偶然席も隣り合わせになつただけで、デートではないとおっしゃっていましたが、そうですか、偶然ですか。

その言い訳を当日配置されていた私達にする必要はあるんでしょうか。

かぐや様が楽しそうに話される内容を聞いている内に、わたしも心が弾んでくる。一日の疲れが抜けていく気さえする。同時に私のお腹の中に黒いものが貯まっていく。この後これを上手く誤魔化して報告しなくてはならない。

かぐや様を裏切るのも、誤魔化すのも、もういやだ。報告したくない。かぐや様を裏切り嘘をつき、黄光様にも嘘をつかなきゃいけないのが辛い。

黄光様に申し訳ないとは欠片も思わない。ただ、嘘をつくのが辛くなる。

ただ、今日は雲鷹様にご相談に乗っていただけの日。かぐや様はまだ興奮冷めやらぬみたいだけど、多分そろそろ……。

やっぱりウトウトされるかぐや様。今日は沢山興奮されて疲れたでしょうしね。そのままベッドに横になる。

「おやしゆみなさい、早坂。」

「お休みなさいませ、かぐや様。」

かぐや様の就寝を確認してから手早くシャワーを浴び、身を清める。

少しドキドキしながら部屋の前に待機している八雲一ズたちに入室の許可を求める。

一応寝間着に上着を羽織った格好で、年頃の娘が男の部屋に入り込むときの姿としては駄目だろう。

けど、子供の頃の延長でその辺りは私も雲鷹様もルーズになってしまっている。八雲一ズも特に変な誤解はしていない。

「失礼します、雲鷹様。」

「おう、お疲れさん早坂。

さ、いつもの儀式でもしとくか。

この部屋で行われた一切の会話は四宮雲鷹の名に置いて他者への他言は禁ずる。これは俺のお前に対する強制的な命令で、お前に選択権は無い。

お前が上司に報告する際、情報の秘匿を行い、罰せられた際にはこの件を上司に伝える事を許す。

お前に選択権は無い。ここで話した内容は上司に上げる必要は無い。」

「了解いたしました、雲鷹様。」

決まり事の文言を呪文のように唱える雲鷹様とそれを了承する私。

私達の会話はいつも、このステップを経てから始まる。これは雲鷹様が私の精神的負担を軽くするためのおまじないのようなモノ。

これがあるうがなかるうが、私はかぐや様の為に伝えてはいけない情報を取捨選択し、報告を誤魔化している。かぐや様を裏切つて、禿も裏切つて。禿は良いけど、報告相手って本家の人のよね。結構鋭い人だから、誤魔化すのも一苦労なのよ。

本家に報告するまでの時間にして僅か10分か20分。時折もてるこの時間が私の癒しと救いの時間だ。

別にこの時間帯で、かぐや様の秘密を雲鷹様に漏らすわけじゃない。ただ、この先本家とのトラブルが起きた時、この件を理由に情報を秘匿する事が出来るというだけの話。

「この場で雲鷹様にそう脅されたので、雲鷹様には報告したけど本家には報告できなかったんだよー。私なんか雲鷹様にさからえるわけないよー。文句があるなら雲鷹様にいってよ？雲鷹様が自分が本家に上げとくつて言っていたから私はちゃんと報告したもん。」

本当ならこんな子供の言い訳は通じない。

ただ、雲鷹様が間に入っているから、四宮家では無理が通ってしまう。今の所そんな最終手段は発動したことは無いし、うまく本家を誤魔化せていると自負している。

雲鷹様を盾にしているようで狡いし申し訳ないんだけど、もともと雲鷹様は悪ガキの性質があるらしくて、こういう事は楽しんでやられているから、私もまあいいか、と言

う気になってしまう。

でも、この変な儀式のお陰でいくらかは私の気が軽くなる。実際に本家にバレた時は雲鷹様は私を全力で助けてくれるだろう。

そう、約束してくれたし。

この場で話す内容は、前から相談させていただいている私のいわば愚痴のようなものなんだけど先ほども言った通り主の秘密を漏らすつもりは無い。無いけど、今日のようにもうバレバレになってしまった事に関しては今更秘匿しても意味無いですし。

「で、珍しく作戦が上手くいって、デートできたようですよ。」

「ほう、チケットを上手く買えたのか？」

「いえ、そこは雲鷹様のご心配の通りでしたけど、販売員が白銀会長がチケットを購入するまでかぐや様を列に並ばせていたのが幸いしたみたいです。」

恙なく会長の席を把握している販売員がかぐや様の応対を出来たみたいです。

会長はものすごく動揺していたみたいですけど、隣の席になったのを確認して露骨にほつとしていたらしいです。」

自分も、入り込ませた人員から報告は受けているんだろうけど、この場で重要な事は情報の確認じゃない。私のストレス解消だ。だから私が話したい事を話して良いと言ってくれた。

私が小学生の頃からずっとだ。常に時間を作れるわけじゃない忙しい雲鷹さまはそれでも月に一度くらいは電話してくれたりして私の話を聞いてくれた。

「やはり、屋敷の中に男の縁者がいるのは年頃の娘には暮らしにくいだろうな。どこか近くに家を買った方がかぐやものびのびでできるんじゃないか？」

「そんなことは無いんじゃないでしょうか。かぐや様の表情も以前と比べてかなり明るくなりましたし、雲鷹様にお会いできるのが嬉しいみたいですよ。」

「お分かりになるかは分かりませんが、かぐや様にとって唯一の近くにいる肉親ですから、雲鷹様は。」

そう私がいうと自覚が無かったのか、理解の色が顔に浮かんだ。うん、冷たい目をしていない雲鷹様は内面が解りやすい。

もしかしたら、仕事中は内面を読まれないためにあえてあの氷の表情をしているのかもしれない。

もう、お仕事をしなくても一生食べていける位に資産はあるんだから、楽なさつてもいいのに。

……身の回りの世話は私達がかぐや様と纏めて面倒を見ればいいのだし、八雲ーズも多分私の意見に賛同するだろう。

「今日のお食事の際も本当に楽しそうで、時々会話が不自然に止まりましたよね。あれ、そのうちかぐや様からぼろっと会長の事を漏らしてしまうかもしれないですね。」

「そこまで間抜けじゃないだろうかぐやは。あ、いやあ……。」

言葉に詰まる雲鷹様。

「それで、恋愛は自由という意味を教えてくださいませんか雲鷹様。」

「ああ、察しはついているだろう。その言葉のままの意味だ。結婚の自由は、俺達にはないよ。かぐやにもな。」

「そんな……。」

想像はついていたけど、当たり前結論だけど、それでもショックはうけてしまう。今はまだ会長が好きだと私にすら素直に言えないかぐや様だけど、本当に白銀会長が好きなのは見ていてわかる。

でも、最終的に破局する運命なんて……。

「まあ、俺は好いた相手と一緒にあってほしいと思っっているけどな。だからこの件に關しては黄光兄さんと対立中だ。」

……白銀御行はいい男か？早坂。」

「……。はい。雲鷹様と比べればまだまだ人間として足りない部分もありますけど、かぐや様にお似合いの方だと思います。」

今の時点では考えすぎかもしれませんが、いずれかぐや様を四宮家から連れ出してくれそんな人と良いなと思っています。」

「そうか。俺なんかはただ腐れた人間が運よく上に上がったただけだが、まあ彼が本物なら、かぐやを幸せにしてやれるかもな。」

ふむ、かぐやが気兼ねなく俺に会長さんの事を話せるようにした方がいいかもな。」

「それはどうでしょう。普通の兄妹の中でも、好きな人の相手の事は秘するもの。それが公になる時は、かなり関係性が進んだ時ですね。」

「好きかどうかは置いてき。友人として言う者があるという世間話も気軽に出来ない様じゃ、かぐやもストレスがたまるだろうし、うっかり口を滑らせたときに言い訳もしやすいじゃないか。」

なに、彼一人と接触を持つわけじゃない。」

「と、言いますと？」

「本当は正体を隠して色々やりたかったんだがな。どうもそう言う機会もなさそうだし。」

何を言っているのかちよつと分からないで少しオロオロしてしまう私。

「生徒会役員を纏めて夕食に招待するって言うのはどうだ？もちろん時期は見てからになるが。そうだな、期末テストがおわった夏休みの前あたりに一度、かぐやが世話になつているからと言う理由で。」

なるほど。白銀会長を一人招待するのでは、かぐやさまも反対するだろうし、雲鷹様にバレたかと心配もするだろう。でも普段かぐや様がお世話になつて言うからという態で全員招待してしまえば、その心配もない。

「えっと、その場合年齢の件は……。」

「ああ、藤原千花、というのがあるだろう？あれには俺が何者かバレている。だから最初に口裏を合わせるように此方から連絡しておく。

出来れば、単にかぐやの兄だと伝えるつもりだ。あんまり騒がれたり、変な誤解を受けないからな。

特に白銀御行が誤解したら、愉快的展開に発展しかねん。」

「それはそれで見てみたいですけど。確かにそうすれば、かぐや様も了解するかも知れませんね。」

「ああ、それに自分から誘うのでは変な意味を持たせてしまうかもしれないが、親族が招待するのであれば、仕方なくという態も取れる。つとそろそろ遅くなるだろう？睡眠時間が足りないよと、碌な事にならないぞ？」

俺はこの前身に染みた。」

貴方の場合はちょっと特殊です。5か月以上ほとんど寝ていなかったって聞いた時には、流石に焦りましたよ？今でも雲鷹様には無理はさせるなど本家からの指示が出て

いるんですから。

でも確かに、そろそろ時間もいい感じでしょう。

「解りました。えつと、今日話した内容は雲鷹様のご意向により、どなたにもお話ししません。本来の私の役目上、受け入れがたいお話ですが、止むをえません。でしたっけ。久しぶりででしたから。」

「ま、適当でいいさ。気持ちの問題を解決する為の呪文だからな。なんでもかんでも俺のせいって事にしちまえ。大丈夫、お前は悪くない。いや、マジでな。だから気にするな。」

さ、さっさと自室に戻って捏造報告してさっさと寝ろ。身体が持たんぞ？」

「あははは、了解しましたー。……おやすみなさい、雲鷹様。」

「ああ、お休み早坂。」

部屋の外に待機していた八雲ーズに軽く頭を下げ、自室にもどる。

今日はぐっすり眠れそうね。

お兄様は誘いたい

いつも昼食は八雲ーズになにか適当に買わせるか、外で適当に食べている。やることは無くても家に籠っていると本格的にニートになったような気分になるからな。

それに俺一人の為にコックに何かを作らせるのは悪い。

かぐやの弁当を作って持って行っているのだから、それと同じものでも構わないのだろうが、家にいるのだからと、態々別の物を作ろうとする。

それがお仕事ですからと言われればそれまでだけど、一度、随分と力を入れた弁当をもしよろしければ、と八雲たちの分も含めて出されたことがある。

それでピンツと来た。ああ、そうかかぐやが原作で、白銀の弁当の件で自分の弁当とおかず交換をする為に高級食材をふんだんに使った物を作らせた話があった。

折角だからと、昼食に頂く事になったけど頭の中は今生徒会室はどうなっているか、そればかりに頭がいく。

盗聴の魔法だけでも使いたい誘惑を断ち切って弁当に手を付ける。

うむ、白銀が食い損ねた牡蠣が美味い。海老も尾頭付きで……アワビの刺身も入っているのか。

というか、この量、かぐやの一食分には明らかに多いな。特にオカズの部分が山盛りで。あの子はそれ程沢山は食べられない。最初から、誰かに分ける為に作られた弁当である事は一目瞭然だ。

原作のかぐやの弁当を思い出そうとするけど、流星に一コマ、しかも弁当のコマなど覚えていようはずもない。

生前の記憶にも、神様のチートはちゃんと働いてくれているのだが、余程弁当のコマに興味が無かったのか、頭には全然残っていない。

ちよつと俺には炭水化物が少ないが、バランスの取れ……バランス……は取れていないかもしれないけど、細部に気を付けているいい弁当だ。

夏に食うとしたら、ちよつと怖いけどな。

白銀なら、この弁当を見てその意図を見抜いてもおかしくは無い筈だけど、別の事に

目がいつてしまったせいで、かぐやの本心を見抜けなかったという事か。

ふむ、やる事は特になし。学院で何が起きているのか時折出てくる早坂の愚痴であたりを付けるしかないと考えていたけど。

これは意外と、外から見ても何が起きているのかわかるかもしれないな。

今丁度、かぐやがタコさんウインナーを食べずにテーブルに頭を突っ伏している頃かな。

そんな事を考えてその日は過ごしていた。

その日の夕食後の珈琲を飲んでいる時、かぐやが楽しそうに色々話してくれた。

「庶民の方達がその、お弁当で色々私達では見た事の無い様なものを食べているので、少し興味があつたの。」

「それでね、私の友人の藤原さんがタコさんウインナーを分けてくれましたね、私、初めて食べたんですよ。タコさんウインナー。」

当然、白銀が作ってきた、とは言わない。まだかくやの中では白銀の事は秘密なのだろう。俺の口から本家にその辺りの情報は漏らさないし、応援もする。と今かくやに言っても楽し気な空気を壊すだけだ。

早坂のいう通り、家族に好きな異性の話は、余程関係性が進まない限りは中々話したりはしない、だったよな。考えてみれば俺も今世は自分の口から親父にも話したことは無かった。

自然と、相談したくなるまで黙っていた方が良いな。

「藤原というと、あの藤原家のお嬢さんか。パーティーでは何度か顔を合わせた事があるな。」

俺と話をするときはいつも顔が引きつっていたのを覚えている。」

「お兄さま、藤原さんとお知り合いなのですか。」

「ああ、あの子は意外と社交的な集まりには顔を出す事が多いからな。」

俺の年齢をデータで知っていたんだろう。外見の若さもな。それでも初対面の際は面白いくらいに顔が引き攣っていた。」

「もう、お兄さま、藤原さんに何か変な事していませんよね。」

「いや、フランスでパーティーの際に顔を合わせただけで、特におかしなことは……。ただ、いつもの仙人ネタを振ったら暫く本気で信じてしまつてな。誤解を解くのに少々苦労した。」

可愛らしく頬をぶくつと膨らませて怒り顔のかぐやが可愛いな。

「やっぱり変なことしているじゃないですか。今後その不老不死とかいうネタは禁止ですよ、お兄さま。」

「俺の唯一の持ちネタなんだが。」

「周りの人は笑うよりも引き攣る方が多いんじゃないですか？」

思い返してみれば、確かに、このネタを振った際に周りの反応はいつも微妙だった気がする。

「そうかもしれんな。新しいネタを今から考えるか。」

「そうなさってくださいな。さて、私はそろそろ自室に戻らせていただきますね。」

コーヒーを飲み終えたかぐやがそう告げるとティールームから退出しようと席を立った。

ああ、ここで先日 の件、生徒会役員との会食の件を話せば自然な流れになるな。ちよつと早い気もするが、皆の予定も合わせる必要があるし、少し先に予定すれば問題ないか？

石上はまだ生徒会に参加して日が浅いだろうし、今すぐは気おくれもするだろう。もう少しこなれてくる頃。やはりかぐやの相合傘イベントの後あたり。7月の頭辺りにした方が良いな。

「ああ、かぐや少し待つてくれないか。」

キョトンとした顔で振り向いて止まる。

「今すぐではないが、今度、そうだな夏休みに入る前に一度生徒会の皆さんをこの家に招待して夕食をご馳走したいと考えている。」

もちろんこの家の主はお前だから、お前が気が進まないというのなら無理には言わないが、お前の兄として、妹が世話になっている役員の皆さんに挨拶とお礼をしておきたくてな。

何より、お前が楽しそうに話す生徒会のお前の友人たちに俺が会ってみたいんだ。俺の我儘だから、嫌なら断つてくれてもいい。」

それに夏休み前に皆でどこかに行く事によって、夏の間のスケジュールも色々埋まりそうじゃないか？原作の、会えない間にこそ愛が強まるというのも良いがそれと花火大会はまた別腹という事で一つ……どうだろう。

かぐやが誘うのではなくあくまで兄の我儘と言う所が、かぐやの自分から誘うという精神的障壁を小さくしてくれるし、俺も生白銀を見る事が出来る。ついでに次期恋愛頭脳戦のプレイヤー石上もみられる。

おそらく、気まづい関係になっているという三年生の他の役員はこないだろう。

こんな俺のナイスな提案に、かぐやの顔が一瞬輝き、何かに気が付いたように曇り、暫く考えるような仕草を見せる。

「えっと、兄さまを紹介する時に何と紹介したらいいでしょうか？」

「普通に、お前の兄、四宮雲鷹ではだめか？藤原の娘には知られている事だしな。」

「多分、皆さん、兄さまの見た目に戸惑うのではないかと思うのですが。」

「今更だ。俺の年齢ネタは財界では鉄板のネタだからな。毎年、威力が増してきているから、同級生なんかに行くわすと面白いぞ？」

「ですから、そのネタは今後禁止です。」

ふむ……、いい具合に兄妹として遠慮が無くなってきた。それでもまだ八雲ーズや早坂なんかより遠慮があるような感じだが。

「……兄さまを、皆に変な目で見られたくないんです。」

……。なんだこの可愛い生物。思わず魂が抜けかけたぞ。不老不死のはずなのに、危うくここで新たな世界に旅立ってしまう所だった。

「……、まあ、年齢を態々伝える必要は無いだろう。元々俺もそう言うつもりだった。藤原のお嬢さんにはお前から、俺の年齢の件、黙っているように伝えてもらえば。俺を兄として紹介しても、若く見えるお兄さんだな、と思われるだけで済むだろう。」

「それで誤魔化せるでしょうか？」

「世間に出ている情報を一般人がもっているならば、だが。目の前に映る現実と耳にした情報を秤にかけてどっちを信じるか、だな。

意外と人間、目に見える事実には流されがちだ。」

そう言うとかスリとかぐやが笑った。

「そうですね。その辺りはお兄さまの経験の方が豊富ですものね。わかりましたわ。時期を見て、皆さんを誘ってみますね。」

そう言うとかスリでもしそうな足取りでかぐやはテイルームを出て行った。

かぐやの後についていく早坂は、部屋を出るタイミングで無言で右手でサムズアップをしてくれたよ。

お兄さまは参加したい

またぞろ、四宮家で皆が色々動いている。なにやらコックまで駆り出されて、メガホン持たされたり、庭師がスーツを着せられて出かけて行ったりしている。

そう言えばこの前も普段とは違う服装をして何人かが出て行ったな。

今日は八雲たちも、それぞれ本来の性別の服を着せられ、早坂に連れられて出て行った。

細かい事情は教えてもらっていないけど、これってアレだよな。多分、白銀御行にスマホを買わせるための作戦、って奴だ。

本当に、原作を読んでいるとき思ってたけど毎回毎回、色々思いつくな、かぐや様は。いや、かぐやは。

それにしても八雲（男）の男装姿、久しぶりに見たな。

そろそろ元に戻らせてやるべきか。最近全然文句を言わなくなってきたからかえって目覚めさせてしまったかと危機感を覚えているのだけでも。

この前、女八雲から、男八雲が鏡を見てポーズを取っていたとか話していた。本人は、上手く人の目を誤魔化せるための訓練ですとは言っていたけど、早坂も俺も女八雲も信じていない。

ただ、原作に無いトラブルがかぐやの身に起きた時、女性の振りが出来る男の護衛がいれば頼もしい。

もう少し辛抱してもらうか。もう、本人も望んでやっている可能性もあるが。

今回も作戦は上手いかなかったらしく、疲れた顔で帰ってくるチームを横目に、次は俺も参加したいと正直に早坂に言ったんだがな。

「何を考えているんですか貴方は。また黒服を何十人も引き連れて、周囲の注目を浴びたいんですか？」

お願いですから普段は優秀なその脳味噌で少しは考えてくださいよ。何でかぐや様関連の事になるとアホになるとアホになるんですか。」

いや、そこまで言わんでもいいやん。今回はちゃんと指揮官である早坂にお伺いを立てただけでも評価してもらいたい。

「雲鷹様にはお話ししていませんけど、かぐや様が何をしようとしているのか、どうせ察していらっしゃるんじゃない？」

「今回は良く解らん。外から見ているだけだと作戦目的がみえてこん。」

原作メタ的には解っているけど。

「ただ、目標人物の視界に着飾ったモブを見せる事で何かに誘導しようとしているのかなと思う。」

まあ、恐らくは白銀御行関係だろう？

面白そうだから、参加したかったんだが。」

「前にも言いましてけど面白そうだからとか言う理由でミップがその辺をふらつかな
いでください。」

「いや、俺は大概保身に興味はないかもしれないが、そこまで行くと過保護じゃないか
？」

「雲鷹様はその位しないと、周りで観ていて危なつかしいんです。」

うーむ、外見が若く見えるから中々信用されないんだな、これは。

全く不老不死も時と場合によりけり、だな。

ともあれ、この作戦は確か直ぐに成功したわけではない筈。かぐや曰く、どれだけ手
を焼いたか、と言う回想がある。

「因みに、何時からこの作戦やっているんだ？」

「そうですね。進級する前位からは定期的にやっていますけど、会長、あれでなかなか鋭いところがありますから、同じ人員は繰り返し使うのが難しいんですよ。

それでも店員とかに扮するのなら、同じ人でも問題はありますが、通りすがりのモブなんかで、その人物の印象が強かったりすると、気が付かれてしまう可能性があります。

一度参加した人は少し時間を置いて参加する事になりますので、中々人員のやりくりが難しく……。

前回と違って今回はこちらから八雲さん達に声を掛けたのですが。

失敗でしたね、雲鷹様の気を引いてしまうとは。」

普通なら側仕えの者を主人以外が使おうとすれば当然、その者から主人に話が行く。そうなれば俺に筒抜けになる、そう考えるのが当たり前なんだが、八雲たち、俺の側の者たちには屋敷の協力要請には俺に断りなしで受けるように言い含めている。

なんせ、世話になっている側だしな。それと俺は一人でも問題ない。

やる事と言ったらPCいじっているか、アイテムボックスに菓子のため込むか、指示

書を作っているか。ここしばらくはインドアで外にあんまり出ていないからな。

そういうえば最近、スマホの安い料金プランが発表されたから、そろそろこの作戦も大詰めという所かな。

「まあ、心配するな。今回は俺も大人しくしているよ。最近部屋で出来る暇つぶしも手に入れたしな。」

俺の言葉に興味をひかれたのか、早坂が話を聞きたそうに見つめてくる。

「へえー、読書でも始められたんですか？」

「読書はな、結構すぐに読み終わるし、中身丸ごとを覚えちゃうから読み返す事もない。前は本を読むのは好きだったんだがなあ。」

今は教養や社交に必要な物だけ一気に読んで、それで終わりだな。」

少し早坂の顔が引きつる。

「そういう所、かぐや様と似ていますね。その無自覚な天才ぶりとか。」

自前の能力じゃないからな。つい傲慢する様に話してしまうが、褒められたりすると返って虚しくなる。自分の中身が空っぽの様な気がして。

「まあ、この前ゲーミングパソコンって奴をパーツで色々買ってみた。まだゲームはやっていないが、パーツとか色々弄っていると結構楽しいな。」

「あ、それ、分かります！私も時間がある時は自分でパソコンを組み立てたりするんですよ！」

「ああ、結構前にお前からそんな話を聞かされたからな。自分で作るとか言うのにちよつと興味が湧いてやってみたくなくなつてな。」

「へえー!?CPUは何を積んでいるんです?メモリは?マザーボードはこの前良い物が出ましたよ！」

ゲームするならメモリもそうですけどグラフィカも良い物を揃えないと駄目ですよ。あと忘れちゃいけないのがサウンド関連ですね。ヘッドホンやスピーカーはメーカーでかなり差が出ます。

ちゃんといい音でゲームをやりたいのならそこは拘るべきだと思います。」
目を輝かせる早坂。やっぱり自分の趣味の範囲の話は、楽しいらしい。

「いや、ゲームは何をやるか決めていないしな。とりあえず組んでみたただけだ。というか、早坂、お前ゲームなんかやる時間ないだろうに、どうしてそこまで詳しいんだ。」

「嫌ですわね。ゲームをやるかどうかは重要じゃないんですよ。そういう高スペックなPCを自分なりに厳選して組むのが楽しいんじゃないんですか。

それに、私の趣味はちゃんと仕事にもいかせていますし。

見てください、このシユシユ、これ実は私が組んだ小型PCなんですよ!」

軽く、俺の青春時代の頃のテクノロジーを超えてくるものを自力で組み立ててしまう早坂に少し笑う。

結局、その後はPCの話で盛り上がり、俺の作戦参加の要望はすげなく却下された。もしかしたら早坂はこれを狙って話を逸らしたのかもしれない。

追記しておく、その後の作戦で、漸く目的を果たせたらしい。

白銀会長、スマホデビューおめでどう！

……そういえば、かぐやの携帯、まだガラケーだという事を指摘する必要、ないよな？

ガラケーからスマホへの切り替えは、かぐやの精神的な脱皮の一つの象徴になつていく。だから、ただスマホを買い与えればいいという問題ではない、という事は重々わかっているもの……。

というか、ガラケーが大事なら、それはそのまま使つて、別でスマホ買えばいいのに、と思わなくもない。思い出は大事に取つておいて、使えばいい。それとは別に必要なも

のを揃えるくらいかぐやの立場なら許されてしかるべきだろう。

だって俺のかわいい妹だもの。

俺だって仕事とプライベートで使い分けしているし、何なら仕事用も私用も数台は八雲たちに持たせて管理している。

まあ、自分で持つて管理しているのは極、親しい者たちだけが番号を知っている一台だけだけだな。

かぐやの為の予算は、屋敷の管理費や使用人の給与、それ以外の運営に必要な費用、接待費なんかだな。幅広い人脈作りは、それこそ幼稚園の時からやってきているから、当然それなりに来客が多い。

それにかぐやの為の、まあ昔でいう化粧品つて奴も年間、それなりに手配している。簡単に言うると小遣いみたいなもんだ。

年間数億程度だがそれでも携帯の複数台持ち程度でどうこうなる金額じゃない。使用人全員に一台ずつ無駄に増やしたって、どうって事はないはずなんだが……。結構

余っているみたいで年々かぐやの資産に積みあがっているはずなんだけど、まさか確認していないって事はないよな？

……もしかして遠慮でもしているのか？

ふむ、かぐやがスマホに変えて、精神的な脱皮を果たしたら、遠慮することはないと話しておくか。

「それ、多分、雲鷹様からもらった携帯電話だったからだと思いますよ。」

後日、早坂から指摘されてストンと腑に落ちた。ああ、そう言えば原作はいざ知らず、この世界では俺が機種を選んでかぐやに買い与えた記憶があるわ。

そっか、そう言う事か。

アソート1

かぐや様は……穴があつたら入りたい

会長と連れ立って校内の見回りを少しの間する。この短い時間だけでもちよつとしたデートの様で、心が躍る。少し浮ついた気持ちで会長を見ると、なにやら心の内に欲望が湧き上がってくる。

会長をオトしたらあんな事やこんな事を……。

あら、会長の目も私を見つめて何かを考えている様子。一体何を考えているのやら。

そんなに熱く見つめられると、少し恥ずかしいですね。

そんな事を考えていたら、校長から呼び止められ、会長に雑誌を手渡して何やら話している。

「と、いう訳で、私は少し忙しいので、あなた方にこの本の処分をしていただきたいのです。これも秀知院生徒を導くあなた方の仕事の一つ！

この本は教育上よろしくありませんからねえ。

で、任せましたよ？

私はこれから行かなくてはいけない場所があるので！」

そう言うと、スマホ片手にどこかにいってしまった。

生徒会室で藤原さんに会長が雑誌についての経緯を説明してたら、藤原さんが興味を持ったのか、雑誌を開き、直後に動揺して声を上げた。

なにか怖い写真でも乗っていたのかしら？

「乱れ……いや淫みだれています！」

この国は淫みだれています！」

生徒会に藤原さんの悲鳴の様な言葉が響く。少し内容に興味があるわね。テーブルに放り投げられた雑誌に手を取り、中身を確認する。

丁度藤原さんが読んでいた部分が開いたままテーブル面の方に落ちていたので、何処を讀んでいたのかは直ぐに分かる。

……初体験はいつだったアンケート……。つい声に出して読んでしまったけど、これが藤原さんがそんなに騒ぐような内容かしら。「高校生までに」が34%……。うん、別におかしなところはありませんが。

私の始めては、多分記憶にある限りはまだ自分でも動く事が出来なかった頃、奈央さんにしていたいたのが最初だったはず。

あんまり思い出したいくはないのだけれども、そのしばらくあとお酒に酔った黄光兄様が何かのはずみで私にしてきたのが二回目。そのあと兄さまが消毒してやるとかおっしゃってしてくれたのが三回目だった記憶があるわね。

私からしたのは……。そう言えばまだ幼稚園に通う前の頃。奈央さんにキツスをしてもらった私は嬉しくなって奈央さんの手に軽く、掠る様なキツスをした事があったわね。

奈央さんはキツスされたと思っていなかっただでしょうけど、あれが私からの初体験かしら。

懐かしいわね……。

なにやら会長と藤原さんがアンケートの内容に対して否定的な見解をし始めましたけど。

「そうですか？ 私は適切な割合だと思います。むしろ少ないんじゃない？」

と、言ってしまった。そう、言ってしまったのよ。

二人の、特に会長の慌てた様子を見て、私はここがチャンスだと思った。だからここぞとばかりに攻め立てたわ。

会長が慌てふためき、青くなる姿はそれはもう、私に作戦成功の確信を持たせるほどに。

作戦は順調にいったはずなのだけれども、ふと何かに気が付いた様子の会長が初体験とは何かを知っているのか？と

その後の事はちよつと思ひ出したくないわ。だって、男の人が、その、あんなで、そうなって……女の人が、こうなっちゃって、そうなって。

でね、こう、けだものの様な男の人がね、その……でね、女の人がこう、色々ね。うん、そんな事を私、経験済みだって会長や藤原さんの前で知ったかぶって言ってしまったのよ。

だって、そう言う事は普通結婚してからって法律で……、え、決まってない？ いや、でも……だって早坂……。

私、暫く学校に行きたくないかも。早坂……どうしよう。

「はあ、そんな事で登校拒否なんかできる訳ないでしょうに。大丈夫ですよ、そんな所もかぐや様のお可愛い所だと、生徒会の皆様も解っていただけにいる筈です。」

会長にそう思われたかもしれないから、恥ずかしいんじゃないの……早坂の馬鹿。

黄光の苦惱

手を一切付けられていないツマミや料理。二度だけ交わした盃と残った酒。それら

を軽く見渡して、一つため息が漏れる。

ふと気が付くと背中が汗で少々湿つぽい。

雲鷹が出て行つて、暫くは座つたまま少し気が抜けていた。気を取り直して、畳に落としてしまった盃、とは言つてもこれはぐい飲みつて奴だが、それを拾い手酌で一息に呷る。

結構いいぐい飲みでな、好事家からしたら100万くらいポンと出す代物だ。

自然と肺から出てくる酒精の混じつた吐息に、漸く人心地が付く。

雲鷹を待たせちまつたのは、心の準備をする時間が必要だつたからだ。そんな自分の弱い部分を酒で誤魔化さなかつたのは、ここが一つの正念場だと思つたから。酔つた頭であいつの前にでて、やらかしたら、下手をすれば四宮の中でやり合う事になる。

四条とやり合う前に四宮が傾くな。そうすりや本家派閥の奴らが何人も巻き添えになる。

幸いにも、あいつは俺に協力的で野心がない。

ただ一つ、拘っている点を除いてあいつは譲歩する。

たった一つの例外は……。もう一度酒を呷り、冷めるのを待ただけだった料理に手を付ける。

たった一つの例外がかぐやだ。あいつは何でか一応妹であるかぐやに執着している。まあ、十数年手元に置いたんだ、情もうつるかもしれないがな。

一応、か。まあ、ありや間違いなく四宮の血筋ではある。俺を見る時の笑顔の裏の、冷たい目付きが本当に雲鷹そっくりだ。多分、俺にも似ているんだろうな。自分では判らんが。

四条のガキが青龍に持ってくるだろう提案。恐らくは以前から雲鷹が指摘していた、かぐやを嫁にという話だろう。

最初は何を言っているのかと鼻で笑っていた。女一人にどんな価値があるってな。そんなもんで四条が矛を収めるのかって。雲鷹に理路整然と説教食らったが。

まあ、確かに外から見りや血筋って奴は馬鹿にならん。人が結集するには十分な理由

だ。そのくせ、血の繋がりがなんかあつさりと裏切られたりもする。身内からすれば厄介なものでもある。

かぐやの産んだ子なら四宮に口をはさむのに、大義名分を得やすい。少なくとも他人よりはな。

そう言う意味ではかぐやが四条にとってそれなりに価値を持つのはわかる。

だけど、その手打ちの条件を持ち出すのは恐らく、四条のガキなんだろう？

……色恋か。

判らなくもねえ。昔は俺も、似た様な頃があつた。

ふんつ。そんなもん何にもなりやしねえのに、物好きなものだ。そんなもん、何時かどうでもよくなつちまうんだよ。現実を追われて生きりやな。

そう言えばまだかぐやがガキの頃、四条のガキがかぐやと接触したという報告があつたな。あれは何のパーティーだったか。まあ、ガキ同士と言えど男女。年齢的に間違いは起きねえだろうが、かぐやが懐いたりしたら面倒だから雲鷹に、四条のガキに近寄ら

せるなど話した覚えがある。

そうか。

もしかしたら、かぐやの方も憎からず想っているのかもな。

四条とぶつかれば、被害は馬鹿にならない。戦争が長引けば、本当に命を落とす連中も出てくる。前線で汚れ仕事を抱えている下つ端なんかはあつさりと命を落とす事になる。

上の奴らは責任を抱え込み、自ら首を括るだろう。

俺も、いい加減、腹をくくらにやならん。

万が一、そうなるにしても、相手が四条のガキなら、かぐやもかわいそうな事には成らんだろう。惚れるより、慣れ。

俺のところに嫁に来た時に、あいつが漏らしていた言葉だ。

あいつだつて俺が好きで結婚した訳じゃねえ……こういう世界に産まれたら、みんな似たり寄ったりなんだ。

雲鷹を敵に回すわけにはいかねえ。四宮を割る事になる。事が済んだら俺の首一つ、そんな時代じゃねえがそんな覚悟でやるしかねえ。

第一、俺にはそんな沢山の人の命を背負えない。俺の失敗で、何百人が死ぬ事になるかを考えたら、恐ろしくなる。

器じゃねえんだよ。言われなくても解っている。

だけどあの時は俺しかいなかった。今は雲鷹がいる。なのに、雲鷹は俺に遠慮して一歩引いている。有り難くはあるさ。お陰で十分虚栄心は満たされたよ。

だけど、そろそろ覚悟を決めにやららん。雲鷹を敵に回さぬように立ち回り、四条との戦争で出来るだけ犠牲者を少なくする。その為にかぐやが必要なら、人柱にする。

俺のプライドなんざこの場面では邪魔にしかならん。雲鷹を説得する。必要なら頭を下げる。代償に首を預ける。そして、かぐやを使う。

四条のガキが出してくる提案で本当に戦争が終わるなら、その条件を飲まない選択肢は、ねえな。

これが俺の最後の仕事になるのかもしれない。

勢いよく呷った酒の味が苦く感じた。

お兄さまは共犯者

つい先日、夕食後のコーヒータイムの際、かぐやから募金活動の話が出た。最初の内は、友人の相談に乗ったのは良いけど、中々力になれなかつたとか、藤原のお嬢さんが何かある度に演劇部に走って行って、変な格好をしてくるのか、話して笑っていた。

お話に夢中になつていても流石にかぐや、人の秘密を漏らすような下種な真似はしない。友人の相談に乗ったという話題は出ても相談内容や相談相手の情報は一切会話には入れてこない。

ただ、その相談に乗って、人の悩み事に答えるのは中々難しいものですね、と感想を語っていただけだが、お陰で、原作の大体どの部分に差し掛かっているのかは分かった。

本当に、何でもないうようなことを話すことが楽しいようで、こういう所だけを見てみると、その辺の女の子と何も変わらない。

これが白銀を相手にすると、いかに相手を掌で転がし自分に告白させるかという一点

で、頭を高速回転させ、傍から見ても頭がいいのかそうじゃないのかわからない結果を出す訳で。

……誰かを好きになるといふのはそれだけ凄いなんだらう。そういう形でフォローするしかできないな。

ボランティアの話と友人の相談、それに藤原千花が絡む、という事はもうすぐ相合傘イベントが始まるという事。ついこの間白銀のスマホがどうのこうのと言う話を聞いていたはずなのにあつという間にもう梅雨だ。

原作を読むとかなり長い時期の話のような印象を受けて、1年と少しという実は短い期間を28巻にわたって描いている事に、驚く。いや、ちゃんと時間の流れがあるタイプの学園ものであれば当然なのかもしれないけれど。

それだけ短い期間で、彼ら、彼女らはあつという間に成長し、恋をし結ばれた。

今回かぐやに相談した柏木さんなぞ……母親になってしまっている。いや、ご懐妊のところまで終わってはいるか。一部未来の話を除いて。

もちろん、原作開始の最初の一学期にもびっしりと物語が詰まっている。彼らの青春に無駄な時間なぞ一瞬たりともないのだろう。

こっちは休養中だから、毎日のんびりしているせいで、少しでも気を抜くとあつという間において行かれるだろう。ましてや初老のおっさんだ。誰が何と言おうとおっさんだ。時がたつのが速く感じるよ。

とは言え生徒会メンバーを夕食に招待する話がかぐやにしているから、うっかりイベントをスキップしてもいずれ彼らと会う機会はあるはずだけど。

相合傘イベントが起きるのが丁度衣替えの日。学院の年間の行事予定を確認すればそれがいつなのかは、かぐやの話が無くてもまあ、分かっただろう。ただそこまで頭が回らなかつただけだ。自慢して言う事じゃないな。

だから目の前で起きているこの光景は、まあ必然な訳だ。

「で、お前さんは一体何をしているのかね？朝っぱらから、そんな物騒なものを持つて」

「おゝ、お兄さま!?!あ、いえ、これは、ですね。その、違うんです!」

すごい声が出たな、おい。

手に千枚通しをもって車庫をうろつく姿を見て、何でもないと判断する奴にまともな奴はいない。

その言い訳を聞いて何事も無しと判断する奴もいないだろう。

観念したのか、千枚通しを俺に手渡すかぐや。

「お兄さま、てつきりまだお休みになっているものとはかり……。」

確かに休養中である俺は普段この時間は寝ている。

シユンとしたかぐやの脳内では今頃、作戦失敗の文字が浮かんでいるかもな。ただ、俺としてもちよつとした悪戯心で、かぐやの行動を見たかっただけで、なにも邪魔しようと考えた訳じゃない。

「まあ、こういう悪戯がしたい年頃……なのかもしれないが、ちよつと物騒だな。車をパ
ンクさせて何を企んでいるのやら。」

「それはですね。その、たまには自分の足で学校に通いたいと考えまして……。」

嘘をつくときのかぐやの目は、少なくとも俺にはわかりやすい。メタ視点で答えを知っているからかもしれないけど。

だがここで全てを打ち明ける訳にもいかないだろうな。そうすれば自ずと白銀御行との事も口にする事になる。

少し悔しそうにするかぐやに苦笑を浮かべる。

「それでタイヤをねえ。ま、そう言う悪戯は俺も面白いから好きだが。タイヤのどの部分を刺すつもりだった？」

俺の言葉に耳をピクリとさせるかぐや。

「えつとですね……、良いんですかお兄さま。」

「悪巧みは俺も好きだ。それにお行儀のいいだけの奴じや、社会に出ても振り回されるだけだ。

ちよいとやる事が物騒だが、ま、真面目一辺倒な奴よりやらかす奴の方が面白いかもな。

もちろんやられる方になると腹立たしいが、今回は自分の家の車で、自分が乗る予定の車。

何か深い訳があるんだろう？俺には説明できないような。」

何やら深刻そうな顔を作ってかぐやに千枚通しを返してみる。

まあ、素直に相談してもらえれば、警護の人間を周りに配置するなどで、かぐやの希望をかなえてやれるのだが、原作では本家の目もあり不用心な真似はできなかつただろ

うし、この世界では責任をとれるだろう人物に、事情を詳しく説明することができない。

「えっとですね、こうやってタイヤの横をブスつてやろうかと思っていました。」

何やら共犯者を見るような目で、ちよつと悪い笑顔を見せるかぐや。

「ああ、そのやり方じゃ駄目だな。タイヤの側面にそんな穴が開いていたら、すぐに人為的なものと気が付かれる。今回は良くても次にやらかすときには警戒されるぞ。」

ま、側面はゴムが比較的薄いから穴はあけやすいのは事実だが。」

「次って……。そんなに何回もこんなことしませんよ。いえ、そんな風に思われても仕方ないですけど。」

でも、それならどうすればいいのですか？」

少し困り顔のかぐや。俺もタイヤにいたずらをした経験はないが、前世の頃はよく車のタイヤがパンクして、難儀した経験はある。

「こう言うのはな、ま、俺もやった経験はないけど、こう、タイヤの溝にうまく、な。ここに穴が開けば、パツと見た分じやわからないし、修理したとしても普通のパンクと見分けはつかないだろう。」

かぐやから再び千枚通しをヒョイツと取り上げて、力任せにバスタツつとやらかす。一気に空気が抜けていくタイヤを見てかぐやの顔がキラキラ輝く。

「因みに、やる機会はないと思うが、トラックのタイヤなんかにはやろうと考えるなよ。普通車とは空気圧が違う。本当の話かは知らんが、ダンプのタイヤにいたずらした奴が大怪我をしたという話も聞いたことがある。」

そういうと、心外だというような顔をしてかぐやが頬を膨らませる。

「私だって、そう見境なくそんな事はしません。今日はいい……、いえ、その、今日は快晴にはならないとお話でしたので、紫外線もそれほど気になる事もないでしょうし、少し街の中を歩いてみたかったですから。」

流石に、「かい」で、止めたか。うんべたな展開だ。素直に嘖き出してかぐやににらまれる。

「あ、お兄さま、ありがとうございます！他に準備することがありますので失礼しますね。」

はっとした表情で時間を確認したかぐやが口早に礼を言ってから車庫から走り去っていく。

「それで、学校が終わるころにはタイヤの修理も終わっているだろうが……。どうするつもりだと思おう？」

車庫の陰から早坂がひよつこりとして出てきた。

「気が付いていたんですか、雲鷹様。」

「こういう時に早坂がかぐやを一人にしないだろうなと思ってな。単なる勘だ。で、かぐやの狙いはわからんが、帰りの車は無い方が都合がよいのかな。」

「ええ、そうですね。今回の作戦の内容をお話しするわけにはいきませんが、メインは帰りになるみたいですから。」

知っているよ。さて、原作ではどうやったのかな。たとえ修理できない側面に穴をあけたとしても、ディーラーを呼んでタイヤを交換してしまえば、時間は一日かからない。その辺早坂が何とかしたのか、それともタイヤに穴だけじゃなく、足回りに何か細工した可能性もあるな。そんな描写はされていなかったけど。

「早坂なら、主をどうフォローする。」

「あのまま雲鷹様が止めずにタイヤの横に穴をあけるようでしたら、他にもいたずらされているかもしれないから、と提案してディーラーで点検して貰いますかね。」

一日預けていれば、目的も達成されるでしょうし。」

「この屋敷には俺の車があるが？」

「そこは色々理屈をこねるんじゃないですか？ いつ必要になるかもわからないお兄さまの車を私の為には使えないとかなんとかか。」

「徒歩での通学圏内の距離の登下校に貸し出すくらいなら、わずかな時間だから理由にはならんぞ？」

「そうですね。」

苦笑しながらため息を堪える。本当に人を好きになるという事は偉大だな。

「パンクした車は万が一を考えて、俺の名前でディーラーに預けとけ。俺はこれから直ぐに出かけることにする。車でな。」

おそらく今日は忙しくなりそうなんだな、夕食の時間まで帰ってこれないだろう。かぐやにはよろしく言っておいてくれ。」

「本当にかぐや様にはお甘いのですね。了解いたしました。お気をつけて行ってらっしゃいませ。」

笑みを浮かべた早坂の言葉を背に、八雲ーズに5分以内に車を用意しろと声をかける。

さて、どこで時間を潰すかな。

対象Fは遠慮したい

TG部での活動を終え、私はいつものように生徒会室に足を向ける。今日は比較的一回のセッションが短めのゲームをやっていたので、皆さんが集まる時間には少し余裕はある筈。

カード中心の簡単なゲームの場合一回のセッションが5〜6分以内に終わるものもあるから、何回か遊べるし、手軽で楽しい！

テーブルゲームについてよく知らない人の為に説明すると、人生ゲームの様にボードを使ったり、色々な小道具を使って複雑なルールを理解して戦略を練ったりする物もあれば、手軽にトランプやUNOの様にテーブルとカードがあれば出来ちゃうものもあるの。

たかがテーブルゲームと侮る人がいるかは分かんないけど、本格的なものになるとゲームの導入部分だけで一時間くらいかかっちゃったり、プレイ時間が6時間とか、か

なりかかっちゃうものもあつたりするのよ？

そんな大作ゲームは流石に休日に誰かの家に集まってプレイするか、1日のプレイ時間を決めて、そうですね……、囲碁の打ち掛けってわかりますか？あんな感じで一度中断して次の日に持ち越す事もある位。

私達の場合はプレイルームをそのままにしておいて、次の日の放課後に再開って感じですかねー。

よ。
だからそんな大作ゲームをするときはー、生徒会をお休みしちゃうときもあるんですよ。

今日、そんなゲームをやってなかったのは、良い事なのか悪い事なのか……。
部室を出た後、珍しく私を探していたかぐやさんが話しかけてきたんですよ。

「藤原さん、少しお話があるの。」

そう言って人気の少ない場所へ手招きするかぐやさん。あはっ！内緒話！恋バナでしようか!? そんな感じでウキウキしながらかぐやさんの手のなる方へ、いえ、本当に手はなつていませんけど、そんな感じで付いて行ってしまった私がバカでした。

周囲に誰も居ない事を確認してから話始めるかぐやさん。ちよつと照れた感じがかわいー！これ、絶対恋バナだ、なんて思っていたんですけど。

「あのね、今度夏休みに入る前か、そうね夏休みの最初の日でも良いかもしれない。皆を我が家の夕食にお誘いしたくて。そのね、それで、他の皆さんにお誘いをする前に藤原さんにお話をしておきたくて、声を掛けたんです。」

残念、恋バナじゃなかったです、けど、これはこれでグートですよ！

「お呼ばれ！滅多に無いかぐやさんちにお呼ばれー。行く、行きますよー、もちろん。え、でもどうしてこんなところに隠れてお話するんですか？それに皆さんって。」

そう言うとかぐやさんは少し恥ずかしそうに、でも嬉しそうに話してくれる。

「ええ、藤原さんはうちの兄を知っているんですよね？その兄がですね、いつも私がお世話になっていている生徒会の皆さんを招待したいと言っていますね。」

他の方も予定を合わせる必要はあるでしょうけど、藤原さんもお家の都合もあるでしょうから、早めに確認しておきたくて。

それとですね、兄の件で少し藤原さんをお願いしたい事がありました。」

ああああ、かぐやさんの言葉が私の耳を滑っていく……。

「えゝえゝゝかぐやさんのお兄さんって、論外のお二人じゃないですよね。」

「論外って……。まあ、間違っていないでしょうけど、私にとってお兄さまは一人だつて以前お話しした事がありますよね。」

もちろん、かぐやさんが高校生になってから暫くして、いつものかぐやさんとは全く違う雰囲気になって私に話しかけてきたことがある。

皆には内緒ね、って言われたから、今まで誰にも話したことは無いけど。何でもずつといなくなっていたお兄さまから、中学校を卒業したお祝いにカードが送られてきたんだって。だからもしかしいたらその内お兄さまが帰ってくるかもしれないって。

その時も今も、かぐやさんの言っている事がちよつと良く解らなかつたけど。

それに、なんかちよつと言葉のニュアンスがちがった気がするんですけど。返ってくる？帰ってくる？んんー？

そんな事を言つて滅多に笑わないかぐやさんが、楽しそうにしていたのは昨日の事のように覚えています。

ただ、かぐやさんのいうお兄さまって、多分、間違いなくあの財界の仙人、絶対零度のカミソリ、氷の魔王とか言われちゃってるあの雲鷹様ですよ。

密かに長生きを願う政財界のご老人たちに、崇拜されていたり、本気で仙人としての弟子入り志望者が後を絶たないと言われているあの……。

うちのおじいさまも信奉者の一人だったような気がします。なんでも年を取るほど、馬鹿らしい可能性を信じたくなるんだって言っていましたね。

殆どたった一人で、四条家が抜けた後の四宮グループの海外事業を立て直した、立志

伝中の人物。そして繰り返しますが、本当に仙人ではないかという疑惑まである男！

私あの人苦手なんですよー！初めてお会いした時は確かもう40歳近かったはずなのに、どう見ても15〜6歳にしか見えなくて。

お父様から注意されてはいたけど、初めて見た時は吃驚して……。おもいつきりリアクションしたかったのを一生懸命堪えて御挨拶したのに、すごく冷たい目で私をにらむんですよ？

まあ？後で聞いたらいつもあんな顔をしている方で、あの時も特に怒っている訳じゃなかったってお話でしたけれど……。

対照的に声はとっても優しげで、引き攣り笑いをしている私を和ませる為か手品をしてくれて、それがすごく不思議で……。ついなんで？どうして？って聞いちやって。

手品と優しげな声に油断して、何で年を取らないんですか？って聞いちやったんですよ。そしたら私でも解るくらい、周りがスーツと冷たい雰囲気になっちゃって、雲鷹様は薄く笑って。

「実は俺は不老不死の仙人なんだよ。」

なんて言うんだから、もう絶対本当の事だつて信じちやつて、こわくて震えちやつたんだから。

正直、少し泣いちゃつたかもしれないです。

後で冗談だよつて言ってくれましたけど。あの後何度かお会いしていますけど、いつもあんな感じで氷の笑顔ですし、雰囲気もすごく怖いし。暫くパーティーに参加するのが怖くなったんですから。

あ、でも会うたびに、子供をあやすように手品を見せてくれたのは嬉しかったかも。

とっても不思議な手品なんですよ。かぐやさんも言っていましたけど、幾つかの手品はかぐやさんでも種が想像もできないそうで。

私なんかは全然ですけど。天才のかぐやさんにも分からないなんて、どういう仕掛けなんだろうって。

ああ、そんな事を考えている場合じやありませんでした。黙り込んでしまった私を心配したかぐやさんが不安げにしています。

「もしかして、迷惑だったかしら。兄も、もしかしたら藤原さんには怖がられているかもしれないとおっしゃっていましたから、無理にとは言いませんけど。」

「え、いいえ！そんな事ないですよ。ちよつとお兄さまの御顔は怖いですけど、声は優しいですし、色々手品を見せてくれましたし。」

でも、やつぱりちよつと怖いので出来れば遠慮したいかななんて少し思っちゃったりしているくらいで。

でもそんな風にオロオロしている私を見てかぐやさんは少し笑って、私に携帯の写真を見せてくれた。

「藤原さんとお会いした時のお兄さまは、お仕事とかで気が抜けなかつたらしくて怖い顔をしていたみたいなの。」

ほら、みてくださいいな。これが今のお兄さまのいつもの表情ですよ。」

その時……。

折り畳み式のガラケーの液晶画面に映った一人の少年？の笑顔は、強力な衝撃となつて確実に私の胸を打ち抜いたの。

「ええー！これがあの雲鷹様ですか!?今までは冷たい顔のせいか、多少は年を取っているように見えなくも無かったのに、こんなに爽やかな笑顔になっていたら、確実に今まで以上に年齢詐欺じゃないですか!?

いい加減にしないと警察に訴えますよー!何の罪も犯していませんけど!

ああ、私自分が何を言っているのか分からない!」

混乱している私にかぐやさんは優しく声を掛けてくれる。

「先日、東京の四宮邸に帰ってきてくれたの。暫く、お仕事をお休みしてのんびり過ごされるってお話で。

私もお兄さまに再会した時には驚いたわ。以前とはすっかり様子が変わって、柔らか

くおなりになつて。」

「柔らかくつていうか、もうほとんど別人ですよ、これ。」

「うう……、そうね。それは少し否定できないかも。それで、藤原さんは招待を受けてくれるのかしら。」

そう不安げに首を傾げるかぐやさんに、嫌です、とは中々言えない訳で、はい。思わずうなずいてしまいました。

「喜色満面のかぐやさんからお礼を言われて、満更でも無くて思わずにぱーつてなつちやいましたよ。」

ああ、やつてしまった。

「それでね、藤原さんに相談と言うのは、兄の、年齢の事なんです。」

「ああー、そうですね、雲鷹様、あれで42歳位でしたっけ。犯罪的なギャップです

よねー。」

「それは少し言い過ぎ……でもないかもしれないけど。兄もそのあたりのことを気にしているの、出来れば生徒会の皆さんには兄の年齢の件は内緒にしてほしいの。」

「あー……わかりましたけど、その内漏れちゃう可能性ありますよ。かぐやさんのお兄さんの話、上のお二人は兎も角、雲鷹様に関しては有名ですし、調べようと思えば一般人でも調べられちゃうと思います。」

もしかしたら既に知っている可能性もありますし。」

そう言うのと万事解つているという風に頷いてかぐやさんが笑う。

「ええ、その時は仕方ありませんから。兄も解つてくれると思います。」

……それに見た目のインパクトで、そんな情報頭から飛んでしまう可能性もありますし。」

「ああ……。それはそうですね……。今の雲鷹様が、写真の通りだとしたら、少なく

とも私は騙される自信がありますし。」

それにしても雲鷹様って、やっぱり年齢の事ご自分でも気になされていたんだ。あー
……なんか悪い事しちゃったのかなー。やっぱり顔を合わせづらいですね。
でも、なんか可愛い所もあるんですね。かぐやさんのお兄さん。

緊急ミッション コーヒーを入れ替えよ

「それで、なんで雲鷹様がここにいるんですか？」

深夜の秀知院学院、生徒会室へつながる通路にわずかに響くささやき声。急にかぐやからミッションを受けたらしい早坂の後を追って隠密ミッションのノリで行ったのだが、どうやら途中からばれていたようで、どうにも間抜けな話である。

因みに自分でも忘れがちだが、神様からもらった強靱な肉体のおかげか、早坂の高性能な肉体能力に負けずにここ迄ついてこれたのは、我ながら流石と言わざるを得ない。

当然夜中の潜入で、警備システムが稼働しているから、正々堂々と正門や裏門は通れるはずがない。一部警備システムを無効化したのか、生徒会室に一番近い壁からサササツとアニメの様に登って行った時には目を疑った。

早坂家の連中っていうのは、俺の子飼いの奴らのような常識レベルの奴らと違って、本当に忍者のような動きをする。青龍兄さんの所の奴が早坂家に関して忍者か？と言及していた部分に関しては、同感だと言えんな。

「かぐやのミッションだろうか？妹の無茶ぶりのせいで、女の子を一人で夜中に危ない事をさせる訳にはいかないからな。早坂が心配だったというのもある。それにこういう事には興味がある。」

久しぶりに生徒会室を見てみたかつたし、暇だったから丁度良い。」

「丁度良いじゃないですよ。」

それにしても何故ばれた。それなりに音は立てずに動けたと思うんだけど。俺の顔から疑問を読み取ったのか、早坂が半笑いの表情で答える。

「雲鷹様がお気づきかは判りませんが、今秀知院の周りに黒服の人たちが集まってきていると思いますよ。既に何台か車が周りに止まっているみたいですよ。」

まったく、急に夜に黙って屋敷を出ていけば、八雲ーズたちも慌てているでしょうに。」

なるほど、それであればたか。

「まあ、確かにこれでたとえ今から雲鷹様がお帰りになっても、女の子一人とは言えない状態になるかもしれませんが、却って危険な状況になりつつあるんですけど……。」

心配していただいたその気持ちは、……正直に嬉しいのですが。これ、ばれちゃったかどうかですか。黒服たちが警備システムに反応しちゃったらかぐや様のオーダーを果たさせませんが……。」

「あいつらだって馬鹿じゃない。状況位判断して、軽々に学院内にまでは入ってこないだろうが……。まあ、バレない内に事を済ませるしかないだろうな。目的は何だかわからんが、生徒会室に忍び込むのだろうか？ さ、急ぐか。」

「何、当然の様に自分も参加するつもりなんですか。」

そうはいつでも、もうここ迄ついてきちゃったし。今更引いてもあんまり意味はない。

「意味はありますよ。赤外線センサーを感知するためのゴーグルは一つしかないんですし、雲鷹様はここで待っていてください。」

「まあ、さて。すぐに返すから一度ゴーグルを貸してみてくれ。」

一瞬眉をひそめてから、素直にゴーグルを渡してくれる。装備を確認してからゴーグルをつけセンサーの位置を確認した。よし、覚えた。

「覚えたから返す。」

「え!?!」

早坂にゴーグルを手渡し、まだきよんとしている早坂を置いて原作の様に壁を蹴り、赤外線センサーを躲して生徒会室の扉迄たどり着く。

「ええ!?!嘘! 雲鷹様ってそんな事も出来たんですか?」

小声ながらもそれなりに驚いた声を出す早坂。

「昔から、結構運動は得意だな。特に訓練はしなくても、何となく動けるんだよ。」

「そんなのずるいですよ。私は小さい頃から必死で訓練を受けていたのに……。」

やっぱり、それなりの訓練を受けていたのか。素であれだとしたら、何か特殊な遺伝子でも受け継いでいるんじゃないかと疑うレベルで動けるからな、彼女等は。

考えている内に早坂も同じようにして赤外線を躲して生徒会室にたどり着いた。今更遅いが、無言で二人静かに生徒会室に潜り込む。

そして早坂が手早くインスタントコーヒーの瓶をカフェインレスとすり替える。これも思うんだが、こんな大げさなことをしなくても、なんとかすり替えできると思うんだけどな。

本当に良心的なすり替えだし。瓶にはちゃんとカフェインレスってプリントしてあ

るから、白銀が何かの偶然で柵の中を見たらそれまで、の可能性もある。

……やるとしたら中身をすり替えたインスタントコーヒーの瓶を、予備品として事前
に持ち込んでおいて、隙を見てすり替えたほうがスマートのような気がするのだが。

可能性としたら、夜に早坂といつもの話し合いをしていたら急に作戦を思いついた、
とかかもな。俺も今回の作戦発動に気が付いたのは偶然だった。そろそろあるかなと
思つて外をぼんやりと眺めていたのが幸いしたな。

毎回毎回、本当に色々かぐやは作戦を考えるけど、天才ゆえの発想のせいか、たまに
こんな風に大胆な手段を平気で使ってくる。

目的を終えると、早坂は漸く少し落ちついたのか、俺の方を振り返って前で両腕を組
んで俺を見る。なんか姉に怒られる弟と思わなくもない。自分でも。

「本当に今更ですけど、なんでここまで来ちゃったんですか。」

早坂視点

雲鷹様がこの件を知つたら絶対についてくると思つて、車も使わないで黙つて夜の通学路を走つて来たつて言うのに、この有様。屋敷を出る際、深夜の街に響いていたのは間違いなく私の足音と息遣いだけだった。

本当にどうやってついてきたんでしようか。まさか校舎の中に入るまで気が付かなかつたなんて。雲鷹様、トレーニングを積めば家のママよりも凄い事が出来るようになるかもしれない。

雲鷹様は少し考えた後、声を殺して答えてくれる。

「早坂に一人で危険な事はさせられんだろう。ママさんとの約束もあるし、なによりお前が心配だからな。」

そういう事を平然と言う。私の様な小娘を口説いて……いるつもりは全くないんだらうけど、言われる方の身になっていただきたい。

ドギマギしそうになって、一度深呼吸をして落ち着こうとしたら、薄く開けておいた生徒会室の扉の向こうから、階下を歩く何者かの足音が僅かに聞こえた。

「不味いですね。見回りの時間の合間を縫ってきている筈なんです、少し時間をかけ過ぎたかもしれません。」

生徒会室前の廊下は一本で他に姿を隠せるところはない。態々センサーを切つて生徒会室内迄調べられるかどうかは賭けだけど、ここは音を立てずにじっとしていた方が良くかもしれない。

「周りに集まりつつある黒服連中に何となく刺激されて、見回りの時間を早めたのかもな。これは俺の責任だな。」

「いえ、こういう任務にイレギュラーはいくらでもありますが。まあ、雲鷹様が付いてきてしまうというイレギュラーは今まで経験した事がないですけど。」

少し考えた雲鷹様が窓を少し開け外を見る。段々と足音が大きくなってきて、トラン

シーバーで何かを話しているみたい。

ヤバイ、これセンサーを一時的に切って、生徒会室内に入ってこようとしている？

逃げ道は……そう言えば滅多に開けられることの無い隠し部屋がこの部屋にはあつたはず。雲鷹様にそう進言しようと思った瞬間、私の体は少しだけ宙を舞い、雲鷹様の腕の中に落ちた。

何をされたのか一瞬理解が出来なくて、理解が及んだら大声を上げそうになつて必死に口を両手で塞ぐ。なんでお姫様抱っこなんですか!?!いきなり何をしやがりますか!盛大に混乱している内に雲鷹様が身軽に窓の外枠まで移動していく。

体幹が安定しているのか、それとも不思議な安心感のせいか、既に生徒会室の外側に身を乗り出しているというのに不安は感じない。

「え?ちよつと雲鷹様、何をなさっているんですか。」

「え?ああ、お姫様抱っこ。いや、すまん。逃げ道はここしかなさそうだし、おつきんに抱っこされるの嫌かもしれんが、少しの間だけ我慢してくれや。」

そういうと器用に外側から窓を閉めて、何のためらいも溜めもなくすつと宙に身を躍らせる。ちゃんと私の首にダメージが行かないように頸部から後頭部にかけて手でカバーをしてくれて。

衝撃は思ったほど無く、一瞬の浮遊感の後、まるで忍者アニメか何かの様に音も少なく着地した。

ただ、私はそれに気が付く事もなく、ずっと雲鷹様にしがみついていた。その……、首に手を回してさえいたかもしれない。

雲鷹様が何かを喋っているけど、なんかよく頭に入っていない。

苦笑を浮かべる雲鷹様は私を抱えたまま、私がセンサーを無効化した壁を何でもないような顔をして乗り越えてしまう。

「おい、おい？大丈夫か早坂。流石に飛び降りるのはちよいと怖かったかもしれない。歩けるか？腰でも抜けたか？

……仕方がない、このまま家まで連れて行くか。」

気が付いたら、私は屋敷に戻ってシャワーを浴びていました。いつの間に私はここに？

……かぐや様には作戦は成功しましたとだけ伝えましょう。それにしても

「なんか、すごかった……。」

アソート2

かぐや様は1位になりたい……、早坂？

「お兄さま、今日から暫くは食後直ぐに部屋に下がらせていただきますね。」

この所、食後のこの一時は私の癒しになっている。もちろん、早坂とのお話もとても大切な時間ではあるのだけれども。早坂にはお兄さまにお話しできないことを話せるし、お兄さまにはその日あった事を何となく話していると楽しい。

こんな本当に何でもない事を話す事が楽しく感じるなんて……、普通の兄妹ってこんな感じよね？

「ああ、時期的にはそろそろテストか。勉強は大いに結構だが、無理しすぎて体を壊すなよ。」

残念なのは、お兄さまに勉強を教わる必要がないって事なのよね。私くらいの成績に

なると授業や試験内容を理解できていないという事は無い。間違えるのだから数問、ケアレミスだったり引っかけ問題に引っかけたり、勘違いしていたりと言うのはあるけど。

全く分からなかったという事は無い。だから、誰かに教えていただく必要は無いし、かえってそれは時間の無駄にもなりかねない。

今回こそは、本気で学年一位を狙っている私としては、ここで手を抜くわけにはいかないから……。残念ですけどお兄さまに教えてもらってテスト勉強と言うのは後日に取っておいた方が良くもしいわね。

「はい、わかっています。試験前日に体調を崩すわけにもいきませんし。」

コーヒーを飲みながら、全くだと呟いて早坂を見るお兄さま。

「ああ、早坂。お前も勉強する必要があるだろう。俺の人員をそっち中心で使っているから、お前も少しは自分の時間を作れ。

なんだったらかぐやと一緒に勉強している。

それで集中できない様なら別の部屋でもかまわんが、ついでにかぐやがやり過ぎないように見ていてくれると助かる。

気が回らんで、急な予定変更だが、大丈夫か？八雲ーズ。」

急に話を振られた早坂がいつもとは違う雰囲気であたふたしている。この子、この前生徒会室に潜入した後位から、なんか変なのよね。

ん………気に留めておきましょう。

「ええ、こちらの応援なら問題なく勤められます。女八雲なら、かぐや様の側付きも早坂程ではありませんが努めることも出来るでしょう。」

雲鷹様に問題が無ければテスト期間中はそのように手配しますが。」

「問題ない。大体うちの労働環境がおかしいんだ。こんな子に小さい頃から……いや、昔からよくある話ではあるか、こういう家なら特に。」

……それは確かに私も考えたことはある。でも私にとって早坂は……友達であつて

ほしい人。お姉ちゃんになってほしかった人。側で支えてほしかった人。この四宮の家が常識的な行動をする家なら、きつと今、私の側に早坂はいなかった。私の我儘ではあるけど、早坂が側に居てくれないと嫌だ。

早坂にとつては、迷惑な話で本当は普通の高校生でいたかたかもしれないけど。早坂なら許してくれるかな。

「え、あ、ありがとうございます。本当に宜しいんでしょうか。」

嬉しそうにはにかむ早坂。なんか頬が赤い気がする。……いや、ここはまだ観察の手ね。余計な事を言わずに良く空気を読む必要があるわ。

柏木さんでしたっけ、「芽生えかけた芽に触れすぎると、成長せずに枯れてしまう」とか言っていた気がする。もしかしたら別の人の言葉だったかもしれないけど。

「ああ、男八雲に一時的に屋敷の使用人の指揮を執らせる。適宜、早坂の指示を確認する必要は出てくるだろうが、此奴もなかなかできる男だからな。

何も心配せずに、暫くは学生らしく過ごしてみる。安心しろ、その間の給与は通常通り支給される。」

「不思議と男の人には見えないんですけどね、男八雲さん。」

何かの照れ隠しなのか、お兄さまの言葉を受けて早坂の言葉が八雲さんを弄る。弄られた八雲さんの顔も特に不快な表情はしていない。こういうやり取りは私の知らないところで何度か繰り返されてきたみたいで、二人の間にある種の信頼関係が透けて見える。

「これは主の指示で仕方なく。私の趣味ではありません。」

決まり事を答える様に八雲さんの言葉は淀みがなかった。

お兄さまの指示、ですか。お兄さまには男の人を女装させて楽しむ趣味でもあるのかしら。

……ハッ！もしかして、お兄さまが未だに独身なのは……、えー!? えーえー!!? そう言う事なの? そう言う事なの!? 八雲さんとお兄さまはつと危ない、表情と声に出してしまう所でしたわ。」

「いや、声に出てるし、そう言う事じゃねえから。最初は冗談だったんだがな、女装で
きる男がいれば、色々と便利だつて言う理由がある。後はかぐやの警護をするときにも
便利だからな。」

無論、男が付いていけねえセンチタイプな部分には流石に女八雲が付いて行かないや
ならんが。

周りに女しかいないと油断した襲撃者の隙を突けるのは大きいからな。」

うっかり声に出ていたようね。恥ずかしさのあまり顔が真っ赤に茹で上がるのを自
覚したわ。お兄さまはちゃんと私の事を考えて八雲さんを女装させていたというのに
……。

「あーはいはい、かぐや様ー。折角頂いた時間なんですから有効に使いましょう。」

あんまりいい思い出ではありませんが、また小さい頃の様に机を並べて一緒に勉強し
ましようか。

分からないところがあつたら教えてくださいね。

それでは皆様、お言葉に甘えさせていただきます。私達は失礼させていただきますね。」

いいタイミングで早坂がフォローを淹れてくれて、私を自室の方に連れて行く。

自室へ向かう廊下で早坂の足取りがいつもよりも軽やかな事に気が付くけど、態々指摘するような野暮はしない。もし今、私が早坂の自分でもわかつていない想いを自覚させてしまったら、産まれたばかりの芽は枯れてしまうかもしれないから。私の勘違いの可能性も高いし。

代わりに別の部分を弄る。

「あなたも本気を出せばそれなりの成績は取れるでしょうに、いつもテストは手を抜いているんですよ。」

「いや、単純に勉強する時間があんまり取れませんからね。授業の時間くらいしかないか勉強できませんよ。」

それでもあんまり目立たないように、上位に食い込むような成績は取るつもりは無いですけど。

普通にやってあんな感じの成績ですよ。」

そうは言うけど、中学、高校と大体の範囲は小学生の時にある程度なぞって頭に叩き込まれているし、今の彼女の言葉にも余裕を感じる。

いえ、……無粋な真似は止めておきましょう。

折角持てた、一緒に勉強する機会を無駄にしないように大切にしましょうか。

会長は怖じ気づく訳にはいかない

「四宮の家へご招待、だと。」

期末テストが終わり後は生徒総会を控え、段々と忙しさを増していく生徒会。普段はいつの間にかにやってくる、仕事を終わらせいつの間にか帰っていく石上会計もこの所、生徒会室にいる時間も多し。

この手の書類仕事に関しては、たいして戦力にならない藤原書記も自分に出来る範囲

の作業を手伝ってくれている。

とは言え、まだ準備期間は余裕がある上、各部活動などから上がってくるはずの書類もまだまだ全てがあがってきている訳でもないから、進捗状況を見ながら作業を進めていく感じで、切羽詰まっている状況じゃない。

今も作業が一段落を終え、皆で休憩していた所なんだが。

「皆さん、夏休みの初日に何かご予約はありますか？

予定が無ければですけど、もし宜しければ皆様を当家の夕食にご招待したいと思いまして。」

個人的には大きな爆弾を四宮が投げてきた。

驚いている石上会計を横目に、何故か藤原書記が自慢顔で胸を張っている。

咄嗟に高速回転を始める頭の中。予定は、いや、四宮に誘われる可能性を考えて現時点では入っていない。さて、何故いきなり四宮は誘ってきた。何か裏がある？皆と言つた。という事はこれは特に裏がある訳では無く、生徒会の団結力を高めるとかそう

いった意味合いでなのか。

いや間違えるな白銀御行。四宮はそんな単純に物事を進める奴じゃない。何が切欠にせよ必ず、何か思惑が隠されていると考えるべきだ。夕食と言ったな。夕食を頂いてただ帰るといふ事は無かるう。その後少なからず談笑したり、藤原書記も来るのであればなにかゲームを持ち込んでくる可能性もある。

当然、時間も遅くなり、もしかしたらお泊りという事も無くはない。いや落ち着け白銀御行、冷静に考えろ。

夏休みの初日!? どうか、夏休みの初日に皆が集まる切っ掛けを作る事で、夏休み中に男女で集まる抵抗感をなくす為の策。それにしても四宮からそんなに積極的な手を打つてくるとは……。何を狙っている?

「ええ!! 四宮先輩の家つてすつげえ金持ちですよ。そんな家にお呼ばれされるなんて、気後れするんですけど。」

服って何を着ていけばいいんですかね。フォーマルな服なんて前に親戚の結婚式に出席したつきりだからサイズもう合わないだろうし。」

ん？確かに。服か……、中学時代に買ったものくらいしか持っていないし、フォーマルな物は手持ちに無いな。大体制服で何とかなかったから、今までそろえた事が無かった。その内一着仕立てんといかんとは思ってはいたが。

「そんな形式ばった集まりではないので、気になさらないでくださいな、石上君。制服とか普段着で全然大丈夫です。

私の兄が、私がいつもお世話になっている生徒会の皆さんにどうしても一度お会いしたいと申しいています。

皆さんもご予定があるかもしれませんが、無理にお願いする訳には行きませんが、もしよろしければ兄の我儘を聞いていただければ幸いですわ。」

ちよつと待つと待て！四宮のお兄さんだといつまりご家族と初顔合わせって事か。いやいや落ち着くんぞ。世話になってる生徒会の皆さんって所を素直に受け取るべきだろう。なるほど、それなら仕方なく、止むを得ずといったスタイルを保てる。

その上で夏休みに男女が集まる抵抗感を弱めることも出来るだろう。

ここは乗るべきだな。いや、裏があるうがなかるうが四宮からのお誘いを断る手はないのだが。

それに制服でも問題ないというのであれば、急な出費も免れることも出来る。一応、コストパフォーマンスは悪いが、衣装レンタルと言う手も考えたんだがな。

「会長は、夏休みの初日なにかご予定はありますか。」

「あ、ああ、大丈夫だ、問題はない。バイトの予定もその辺りは空いているからな。喜んで参加させてもらおう。」

四宮のお兄さんか。幾つ上なのだろうか。もしかしたら大学生くらいかもしれないな。ん？、たしか四宮家の家族構成に関して、以前チラツと聞いたことがあった気がするが、四宮に年の近い兄がいたかな？

……いや、こういう上流階級の家族構成なぞ、公表されることは滅多に無い。何かの気のせいかもしれないな。

目の前では石上が四宮に参加する旨を伝えている。何故か怯えの表情を浮かべながら、ではあるが。

「四宮先輩のお兄さんですか。なんかすっげえ怖そうなんですけど。」
こちらに寄ってきてこそそつと小声で漏らす石上。ああ、心配するな。俺も正直結構ビビっている。だが、ここで怯むわけにはいかないんだ。いずれ四宮との関係が進めば、正式にご挨拶をしなくてはいけない相手だからな。
ここで苦手意識を持つわけには……。

「それでは皆さん、ご参加くださるといふ事で、兄に伝えておきますね。」

四宮の輝かんばかりの笑顔と、その隣にいる藤原の微妙に引き攣っている笑顔に、どうしても一抹の不安をぬぐい切れなかった。

大丈夫だよな？俺、お兄さんに取って食われたりしないよな。

同衾イベント発生中

まあ家にいて、かぐやの話や早坂の話の話を聞くだけでも、大体秀知院学園の中で何が起きてきているのかは、ある程度分かるもので。

早坂が深夜の学校潜入をやらかさそうとしたから、後ろからついて行って混せてもらったり、自分でも半分忘れていた強靱な肉体の性能により、早坂が驚くような身体能力を発揮して赤外線センサーを躲したり、緊急回避の為に窓から外に脱出してみたり、お姫様抱っこした早坂に「急に何をしてくれるんですか」と怒られたり。

食後の時間にかぐやから急に心理テストをふられたこともあった。恐らくはテスト内容を覚えるついでに、俺を巻き込んで談笑しなかったのだろうが。

幾つかの質問のうち、原作に出た質問も答えたがかぐやは答えを教えてくださいなかつた。ニヤニヤしながら揶揄ってきたりして、まあ随分と楽しそうだった。

原作で出てきた質問に関しては、檻の中の子猫はゼロと答えたり、肩を叩かれて振り

向いた先に居た人はかぐやだと答えておいた。

檻の時は、何でゼロなのですか？と聞かれ、「子猫を檻に入れるのはあんまり好かん。母猫と落ち着く場所にしてほしいからな。」と答えてかぐやを悩ませたが、振り向いた先に居たのがかぐやだという答えには十分満足させたみたいで、「お兄さまは私の事が好きなんですわね！」と揶揄ってきた。白銀と同じように、「ああ、だとしたらシスコンかも知れんな。」と言うと嬉しそうに「そうなんでしょうね。」と笑っていた。

前世での初恋だし、今でも推しだからな。それに妹だから好きなのは当たり前だろう。救いは、この約17年がかぐやが俺にとつて本当に妹になった事だ。ここで変に拗らせなくてよかったと言わざるを得ない。

本当はもつと学校で色々あったんだろうが、時間はあつという間に過ぎていく。先日かぐやから会食の予定が夏休みの初日になった事を伝えてきた。本来は藤原のお嬢さんが初日から海外に行く事になっていたらしいのだが、早めに話しておいたおかげで、出発日を一日遅らせる事が出来たとか。

その日は藤原のお嬢さんは四宮邸に泊まって、翌日ご家族と空港で待ち合わせをする予定にしたらしい。

他のメンバーが当家に宿泊するかは流れ次第、だな。

毎日が日曜日の今の俺にとっては、何時でも問題は無い訳だから、もちろん快諾しておいた。これでようやく生白銀を見る事が出来るなど考えていたある日。

台風が来て、妹がびしょ濡れで帰ってきた。

結構体を冷やしたらしく、少し体が震えていた。急いで、身体を拭いて風呂で体を温めたが、運命は変えられないらしく、翌日風邪をひいたかぐやはアホになって寝込んでしまった。

ああ、そうか。このイベントを忘れていた訳じゃないが、自分がその時にこの場にいるとは考えていなかった。さて、どうするべきか。このままだと確実に白銀御行が家に来るな。

「申し訳ありません、雲鷹様。私が付いていながら、かぐや様がこのような事になってしまいました。」

ゴホゴホしながら寝込んでいるかぐやのベッド脇で本気で申し訳なさそうに頭を下げる早坂。

「おにいちゃん……。早坂は悪くないの。」

初めてかぐやにおにいちゃんと呼ばれて固まっている俺。初めて呼ばれた時は「いに」だったからな。心の中ではこう呼びたかったのかもしれない。今の状態であれば、まだ判断能力が残されているが、この後おそらくかぐやは半分寝ている状態になり、アホになる。

原作の雲鷹よりは側に居た時が多かったからか、何度かそんな状態のかぐやを見たことはある。

「早坂、かぐやは俺が見ているから、お前は学校に行っておけ。」

そうしてしまえば、原作のイベントは回避されてしまうが、ここは一番暇な俺が面倒を見るべきだろう。妹だしな。

「いえ、お側に居ながらかぐや様をびしょ濡れにさせてしまったのは、私にも責任があ

りますし、着替えなど同性の手も必要になるかと思われます。かぐや様お世話は私にやらせてください。」

着替え、か。確かに年頃の娘の看病など、出来れば同性の方が向いているか。

「そうか、すまん。早坂の言葉に甘えよう。」

「お任せください、雲鷹様。」

何時までも年頃の娘の寝所にいる訳にもいかないからな。そつと部屋を出る。

「え、おにいちやんどつか行つちやうの？やだやだやだやだ、いなくなつちややだよ、にいに。」

急速な幼児化を成し遂げていくかぐやを早坂があやして大人しくベッドで寝る様に誘導する。実に十数年ぶりの「にいに」呼びの衝撃を受け流す事が出来ずに、少々よろけながら。

「どこにも行かんよ。」

と一言残してから。

どうにか寝かしつけてきた早坂が厨房にかぐやの朝食をオーダーする頃には、俺からかぐやと早坂の病欠の連絡を入れておいた。

俺が学園に直接電話をすると声が若いせいで怪しまれるので、事情を把握している校長に直接、だけどな。

だけど実際どうするか。この様子だと原作の様に早坂が悪ふざけか、それとも踏ん切りがつかない主へ発破を掛けたのかいまいちわからんが、白銀をかぐやの寝所に置き去りにする、という原作前半の山場の一つ、同衾イベントが発生しないかもしれない。

というか、まず今の早坂だとやらかさないだろうな。俺がいる影響はそれ程弱くないみたいだ。

白銀会長に關しても、上手い所かぐやの寢室へ放置できたとして、見舞いの前に顔合わせをすればほぼ確実にかぐやからの強引な同衾の誘いにも一度は負けても、睡魔に必死で耐え直ぐに出でしてしまう可能性が高い。

原作ではかぐやに本当に何かがあつた場合に備えてだと思ふが、ドアの外に早坂が待機していた。

「ふむ、生徒会長さんは見舞いに來るかな。」

「今までの流れでしたら、ほぼ間違いなくいらつしやると思ひます。」

「会長さんがどんな男か、試すか。」

「そう言う口実で前提条件を整えよう。その後、早坂と簡単な打ち合わせをしておい

白銀御行視点

どうしてこうなったのか。いや、俺も色々と流されてしまった感がある事は否定できない。

ゲームを勝ち抜き、四宮のお見舞いに行く事になって、途中お兄さんがいる事を思い出して、玄関で挨拶してからプリントと手土産を渡して失礼する予定だった。

お兄さんにしてみれば、病気の妹さんに会いに来た得体のしれない男なんか警戒の対象でしかないだろうからな。

だが、対応に出てくれたスミシー・A・ハーサカさんの言うには、お兄さんは仕事が忙しくて今日は部屋から出てこれないらしい。少々怖気づいたのは否定できない。玄関先で品物をお渡しして四宮に宜しく伝えてほしい旨話したら、そう言う事は直接言った方が良いとやや強引に四宮の寝室へと連れ込まれてしまった。

数時間、二人つきりになってしまう事や防音がどうか四宮の記憶がどうか、まるで煽っている様な話を聞かされて、ほぼ判断能力を失った四宮と二人きりにされ、どんな話の流れなのかそのままベッドに引き込まれた。

「かいちよーもうちに住む事になったの？きいてない！」「いにとかいちよーがいれば毎日が楽しすぎてたいへんね。」「照れてるの？おかわいこと……。」

四宮かぐやの柔らかく、眠たげな声に包まれて誘われて、ドキドキが治まらなかったはずなのに気が付いたら意識が落ちていた。指先に暖かな感触を一つ、手に入れた後で。

気が付いたら、目を覚ました四宮にベッドから追い出され、出て行けと怒鳴られ、慌てて部屋の外に出たら目の前に若い……年の頃は四宮と同じか僅か下くらいの、少し驚くくらいの美形の男がいた。

おそらく間違いなく、少し若く見えるけど四宮のお兄さんだろう。ああ……本当に最悪だ。今は無言で付いて来いとアピールされて、言われるまま四宮家の応接室に通されて、ソファアに座って対面している。

目が、な。物凄く冷たい目をしているんだ。まるで初めて会った時の四宮を数倍冷やした感じの目と雰囲気。未だ無言のお兄さんに俺からも何も言えずにただ黙って座っているしかなかった。

「……大体は見張らせてもらっていた。」

衝撃の一言がお兄さんの口から発せられる。これは……本当に不味いかもしれない。こんなところで躓くなんて。クソっ！どうしてこんな事に、油断だ。いやでも俺は自分からベッドに入った訳では無いし。いや、言い訳か……。

お兄さんからの冷たい視線と謎の圧力が高まってきて、いよいよこれは駄目かもしれないと思いはじめた頃、いきなり圧が無くなって、視線も緩まった。

「ま、唇一つ指先だけでってのは情けないけどな。」

にやり、という言葉が似合いそうな悪い顔を一つしてから続ける。

「意気地は無いが、妹の側に置いてても安心できるくらいには自制心もちゃんとある。あの状況で惚れた相手に手を出さねえってだけでも、誠実だとは理解できる。」

まだかぐやから紹介されていないからな。名前は名乗らん。お前さんも今は名乗らん方がいい。」

「……、はい。わかりました。あの、今回の事は言い逃れをするつもりはありませんが、その」

「どれだけ頭を高速回転させてもこの場で身内に対して出来るいい訳なんてたかが知れている。」

俺の言いよどんでいる言葉を片手を上げて止めると、先程とは全然ちがう優し気で、それでいて揶揄い顔のお兄さんになった彼が話を続ける。

「まあ、この状況で何を話しても説得力はねえわな。だが実際問題手は出してねえ。誠実な奴だと評したろ？今はそれで言いたい事はしまっておけ。」

「幾つか確認する。虚偽や韜晦はゆるさねえ。その場合はそういう奴だったと判断する。」

「ああ、安心しろ、この場で話したことはかぐやには漏らさねえ。約束だ。どんな胸糞悪い話が出たとしてもな。」

再び強まる圧と凍るような目に思わずつばを飲み込んでしまう。クソつ、こんな事で四宮を……。

「わ、わかりました。」

返事が自然と小さくなる。

「お前さんは……かぐやに……。惚れているのか？」

いきなりド直球を投げられて、即答できなくなる。

だけど、ここで怯めば、誤魔化せば一生お兄さんから理解を得ることは出来ない。まさか四宮に告らせる前にお兄さんに告らされることになるとは。

言葉を詰まらせていると言葉が続いた。

「安心しろ、今はまだかぐやは混乱したまま侍女と騒いでいる最中だ。この部屋の会話は録音、録画含めて記録は一切されてもいない。俺からも誰にも漏らさない。そういう条件だ。」

本心を言え。」

ここで怯めば俺は終わりだ。男として、四宮かぐやに想いを寄せる一人の男として。

キツと目に力を入れ、お兄さんの目を見る。

「ええ、俺は四宮かぐやが好きです。あ、愛していると言って良いのか、こういう経験が初めての俺では判りません。」

ですが、かぐやさんの事を考えると、胸が潰れそうになるくらい苦しかったり、彼女に相応しい男になる為にじつとはしていられないくらいには……想っています。」

「それでこの状況で指一つ唇に、か？意気地がないのか、何なのか。ただ、俺の立場としては傷つくかもしれないかぐやが無事だったことを喜ぼうか。」

「あの、この状況はわざと、ですか。」

「ああ、混乱してはいても頭はまわるな。妹が気になっっているかもしれない男が見舞いに来たんだからな。その男を見極める位はさせてくれ。」

とは言え、まさか妹からお前さんをベッドに引き込むとは思わなかったが。こりや、本当に妹の記憶に残らなくてよかつたな、お前さん。」

椰揄う様に笑うお兄さん。少し、意地が悪い様な気がするんだが、立場を入れ替えて圭ちゃんに近づいて来る男を兄の立場で観た時に、同じような状況になってこんなに寛大でいられるか自信がないな。

もしかしたら手が出てしまうかもしれない。

「先ほども言ったが、ここでの会話は無かった。俺達の初対面は会食の時になる。お前たちの仲を引つ掻き回すつもりはあんまりないんだ。

妹に恨まれたくはないからな。ただ、お前さんが真剣な気持ちなのかを知りたかった。

なに、身の潔白は家の優秀な侍女が確認するだろうさ。

八雲ーズ。会長さんを送ってやれ。自転車できているなら、積み込んで持って行ってやれ。もう外は暗いからな、将来の妹の旦那になるかもしれない相手を事故かなんかで失う訳にはいかん。」

だ、旦那って。まるで女子の様に顔が赤くなっているのが自分でもわかる。いや、そのつもりだしその覚悟はあるけれど、いきなりお兄さんにそんな事を言われれば誰だつてあせるだろう？

「あの、今日は本当にお騒がせしまして申し訳ありませんでした。」

「悪い事をしたわけじゃあるまいし、仕掛け人に謝る必要はないさ。ただ、早めに妹と仲直りしてくれよな。」

悪戯っぽく笑ったその顔はどことなく四宮かぐやを思わせる笑顔だった。

後日、四宮とは仲直り出来たが、そこに至る道も色々あった事を追記しておく。人はケーキ一つで修羅場を迎えるものだと言った。

夏休み寸前

「うおら！生徒総会お疲れえい！」

会長が心の底から解放されたような声を出して、手に持っていた総会の書類を宙に放り投げる。

あらあら。

巻き散らかされた書類を回収すると、隣で自分でも書類を拾っている会長と目が合う。少しだけ、お疲れ様という気持ちで笑うと、会長も笑みを返してくれた。

ここ数日、本当に忙しかったし、会長は恐らく自宅でもあんまり眠れていなかったんじゃないかと思う。目付きも、いつもよりも鋭くて目の下のクマも濃いわね。

会長に気を取られている内に皆の話は明日の会食についてになっていた。

「四宮先輩のお兄さんってどんな感じの人なんですか？僕、あんまり政財界の人達の話って詳しくなくて。」

藤原先輩はあつた事あるんでしょ？」

「そういう上流階級の人達の家族構成とかは中々表に出てこないですからねえー。私も詳しくは知りませんが、なんどかお会いした事はありますよ。」

眼光鋭い、怖い人って印象でしたけど、喋ってみたら優しく、怖がっている私に手品を見せてくれました。

それが本当にプロ顔負けの手品でしたね。すごく不思議で未だに種とか全然分からないんですよ。まあ、他の人の手品の種も分かったことは無いんですけど。」

藤原さんと石上君が、兄の話で盛り上がっている。ちゃんと約束を守ってくれて、兄の情報は最小限にとどめてくれている。それを横目に、会長はその話に入って行かない。

心なしか、顔が引きつっているようにも見えるわね。少し緊張なさっているのかしら。自分に置き換えてみれば、気持ちちは良く解るわね。

私も明日急に会長のご家族と会食、という事になったらまず平静でいられる自信はありませんし。

……もしかして、私のお見舞いに来てくれたあの時、私が知らないだけで兄と何かあったのかもしれない。兄からも会長からも、そう言う話は聞いていないけど、示し合わせているという事なら、多分破局的な事には至っていない筈。

もし、お兄さまが会長を認めてくれなかったら……どうしよう。そんな不安が私の中にずつとあるのは確か。だから、会長の事をお兄さまには相談できないでいる。

お兄さまが会長とはお付き合いを許さないとおっしゃられたら。私はどうするのが会長の事が気になるようになってから、時々そんな事を考えるようになった。お兄さまが帰国なさってからはその回数が増えた。

お兄さまは厳しい。小さい頃は理不尽な目にも何度もあつてきた。でもそれにはちゃんと理由があつて、ちゃんとお兄さまの表情を探れば……。

不本意な本心が何となく透けて見える。私を心配している心が、どことなく冷たい表情、仕草の下から染み出ている。

それはもしかしたら赤子の頃のあの言葉。厳しくしなくちやいけないって、言葉が私にそう誤解させているのかもしれない。

お兄様だった頃はずっと観察していた。私の考えは間違っていない、そう信じる事ができるくらいにはお兄様も、内心を消しきれていなかった。

だけど、あのお祝いのカードを頂いたことで私の疑惑は確信へと変わった。後は答え合わせをするだけ。

だからお兄さまが帰国する時は不安半分、期待半分だった。

万が一、お兄さまが会長とのお付き合いを反対したら。そんな事は決してない、と言いつけるほど私には自信がない。

お兄さまが現在独身なのは、お父様が決めた許嫁の方が結婚前にお亡くなりになったから。その後もお兄さまは一人でいる事を選び、お父様もそんなお兄さまに無理に別の縁談を持つてくることは無かったと話に聞きました。

心の、冷静な部分が……、会長への気持ちをお兄さまには隠しておいた方が良いと警

告してくる「お兄さまとは対立したくはないでしょ？」と。

もう一人の私は「お兄さまを信じるべき。ちゃんと話せばわかってくれるわ」と主張する。そんな心の中でのやり取りを最近はずっと繰り返している。

会長かお兄さま。どちらかしか選べないのなら、私はどちらを選ぶの？

まだ、そんな深刻な段階じゃない。そんな事になるかどうかも分からない。だけど、何となくだけどお兄さまは許してくれるような気がするのよね。

そんな事を考えるとまた心の中で、「そんな油断をしていると足をすくわれるわよ。」って叱られてしまうけど。ただ、その私の冷静な部分もお兄さまを警戒はしている、最終的には障害にならないと判断しているみたい。

一番の障害は、お父様。そしてその意を受けた黄光お兄様。

何としても今回の会食を成功させて、会長とお兄さま、お互いの第一印象を良い物にしなくてはならないわね。

お見舞いの時に顔合わせをしている可能性はあるけど……。考えてみたらあの時、私

は動転して会長を追い出したのよね。

風邪で寝込んだ妹のベッドにもぐりこんできた会長……。それがたとえ寝ぼけて自分から引き込んだしまったとしても……。お兄さまから見たら会長の印象って最悪じゃないのかしら？

え!? ああ、その可能性を全然考えていなかったわ。

ここはお兄さまがああ騒動に、気が付かないでいてくれたと信じるしかないわね。あの日珍しくお兄さまは仕事が忙しかったって早坂が言っていたし。

まさか、この私が神様に祈りたくなるなんて考えた事も無かったわ。

ふと皆を見ると、会話は既に夏休み中の予定の話になっていて藤原さんが会食の翌日にハワイに行くと言っている。

そうなのよね。この子は夏は色々予定が詰まっているみたいで……。そう言えばお兄さまも八月前には一度アメリカに行くってお話だったはず。何時までもアツチを放っておく訳にもいかないって言っていたわね。今回は夏休み中には戻ってくるって

お話だったから、お兄さまが居なくなってしまう訳では無いけど。

何か考え事をしながら「調整が上手くいくか。」ってこぼしていたから、色々と予定が詰まっているみたいね。

「行こうぜ石上。夏の終わりには大きな祭りがある。タコ焼き位なら奢ってやる。」

いつの間にか皆の話が、夏祭りの話になっている。藤原さんも勢いよくお祭りの話に食いついてきた。夏祭り、いいわね。

「良いですよね。わたあめ！射的！打ち上げ花火！」

花火っ！会長と花火！良い！

一瞬で私の心配事は吹き飛んで、夏の一大イベントが私の頭の中を支配したわ。我ながら即物的に思わなくもないけど、チャンスの女神に後ろ髪は無いって言いますし、この機会を逃してはいけません。

お祭りのある日は8月20日だと会長が確認してくれて、スケジュールを空けておくと言っている。

「そうですね、私も……。」

予定を空けておきますね、そう続けようとしたとき後ろから藤原さんの声が被ってきた。

「あー……あ、駄目です。そのあたりトマト祭りでスペインでした。あっちゃあー。」

しまった！考え事に気を取られていて、藤原さん対策の無の心を忘れてしまっていたわ。

残念がつている私と会長を見て、藤原さんが自分を置いて行ってしまふのかと私達を責めてくる。私としては、正直初めての友達である藤原さん抜きで花火大会に行くのは、少々気が引けなくもないですけど。

でも折角の会長と花火のチャンス、逃したくないのも事実。なんとかこの事態を乗り切る為に頭を巡らせる。私だけ除け者にして、なんておっしゃりますが、そもそも予定が合わなかったから仕方がありませんねってお話ではないですか。

でも、そんな冷たい事、藤原さんには言い難いわね。

そんな私と、そしておそらくは会長の内心の葛藤を石上君が吹き飛ばしてくれた。

「え!?!普通にいきますけど。」

その後石上君から飛び出した正論の刃は、コントロール不能のモンスター、藤原さんを滅多切りにして逃走させてしまった。

暴言を吐きまくって生徒会室を飛び出す藤原さん、自覚のない刃で藤原さんを切りつけてしまった事を後悔する石上君。

「僕も……、帰ります。」

意気消沈して立ち上がる石上君。

そんな石上君に、私と会長はあなたは正しいと自然に肩に手をやっていたわ。

強くなったわよね、石上君って。これから先藤原さんは石上君に任せた方が良かったかしら。

四宮家にて

白銀御行視点

もしよろしければ、と用意された仕立ての良いスーツに袖を通す。あんなことがあった後だからな。四宮のお兄さんの印象を少しでも良くしたくて、自分で会食用のフォーマルスーツを用意するか、レンタルするか考えていたんだが。

どうも四宮は俺が服を用意しようとしている事を察していたようで、俺と石上のサイズのスーツを用意してくれていた。招待してもらったうえでここまでしてもらおうのは申し訳ないと、一度断ろうと思ったのだが、元々来客の為にこういう用意はあるようで、「ある物をお貸しするだけですから、お気になさらずに。」と言われてしまった。

内心忸怩たるものが無い訳では無いが、ここは悪びれずに有難くお言葉に甘える事にする。身を整えてから、一度皆で集まり漸く挨拶、つまり俺とお兄さんの「初対面」を迎える訳だ。

いまさら白々しいが、それでもこれが約束だ。表情に出なければいいのだが。

……一応お兄さんとはちゃんと和解、というかある意味認めてもらえたはずだが、それでも少々胃が痛む。こう、キリキリとな。ちい、石上からもらった胃薬を飲んでおくんだったな。

「皆さん、ようこそ我が家へ。皆さんに紹介させていただきますね。此方が私の兄、四宮雲鷹です。いつもは少し怖いお顔をしているんですけど、今日は皆さんに会えるのを楽しみにしていたのか、ずっとこんな感じで笑顔なんです。」

会長、藤原さん、石上君。今後は私同様に兄も宜しくお願いしますね。」

花が零れるような笑顔の四宮。これはいつもの駆け引きは一切ないと見て良いな。いや、油断するつもりは無いんだが、どうもお兄さんに駆け引きをしている所を見られたくない、と考えているように見える。

気のせいかもしれないが、ま、俺も同感だからな。なんとなくわかる。

……身内に恋の駆け引きを目撃されるのも、ちよつとクルものがあるよな。

「初めまして、私が四宮かぐやの兄、四宮雲鷹という。皆様には常日頃からうちの妹が世話になってるようで、一度お礼と、出来れば面識を得たいと考えていたんだ。」

四宮と、顔立ちはそれ程似ていないが、どことなく目付きは似ている。あの時は動転していて良く解らなかつたけど、確かに四宮の兄と言われれば、納得できる容姿ではある。ただ、どちらかと言うと兄と言うよりも弟といった見た目ではあるけど。

本人が気にしていたら事だ。その辺りは流しておいた方が無難だろう。

お兄さんの表情からは、あの日の事を匂わせるようなものは一切感じない。あの時感じた恐ろしい程の威圧は、何かの勘違いだったのではないかと思ってしまう程優しげな雰囲気、俺の記憶の方が間違っているのではないかと錯覚してしまう。

流石に四宮のお兄さんって所か。こういう腹芸は日常茶飯事なんだろうな。

「今日は、気軽に楽しんでいってもらえると嬉しいよ。」

そう、お兄さんが言葉をしめた。いかん、緊張で少し頭がふらついてきた。顔に出すな白銀、無様な真似を見せるな。完璧に、格好よく、挨拶をキメる。そして初対面であ

る事を装いきるんだ。

「本日はお招きいただき、ありがとうございます。私は妹さんの同級生で、生徒会の会長を務めさせていただいております、白銀御行と申します。

お兄さんとは、宜しければ今後ともよろしくお願ひしたいです。

それと、今日はお言葉に甘えさせていただきます。」

うん、ちゃんと挨拶、出来ているよな。続いて、藤原と石上が自己紹介を続ける。藤原は面識があるからお久しぶりですという言葉が出たが、その表情は先程までと違い、何処か安心した様な笑顔になっている。

藤原も緊張していたんだろう。お兄さんが柔らかく笑うと珍しく顔を赤らめていた。

「あ、後で手品見せてくださいね！」

藤原の言葉に、お兄さんは快諾していた。手品か……。お兄さんは手先が器用という事かな。ん？まで、まさかこれ各々一芸を披露するなんて流れにならないだろうな。

いや、まさかな。どこかの会社の歓迎会でもあるまいし、こういう席でそんな事は起

きる訳もないな。

石上の挨拶を受けたお兄さんが、四宮から話を聞いていたのか石上に話しかけている。

「石上君、パソコンに詳しいんだって？俺も最近、暇だな。自分でゲーミングPCを組み立ててみたんだが、組み立てるだけ組み立てて一度も使っていないんだよ。

それはそれで何かを作っている感があつて楽しかったんだが、全く使わないのも何か違うだろう？

だがこういう事にはどうにも疎くてな、どういうゲームをやればいいのかかわからん。

良ければ後で、お勧めを教えてくださいと嬉しいな。」

「あ、はい。その位の事でしたら喜んで。まさか四宮先輩のお兄さんがゲームとかに興味があるとは思っていませんでした。」

石上も先程迄緊張してビクビクしていたはずだが、そんな様子を察したのか、お兄さ

んは普段とは違うであろう、おっとりとした話し方で石上に話題をふる。お兄さんの優しい気な雰囲気にも緊張も解けたようで、いつもの調子が出てきたみたいだ。

元々、空気を読まずに強烈な突込みを入れる特性を持っている奴だからな。一度気が緩めば、意外とこういう場合には向くのかもしれんな。

「この年になるまで、その手の物には触れてこなかったけどね。人間、暇になってやる事が無くなると駄目だな。

定年を迎えて突然やる事が無くなった奴が認知症になるという話はよく聞く話だ。ボケ防止には新しい事を始めた方が良いらしいな。」

なにやら苦笑を浮かべるお兄さん。冗談にしても外見にそぐわない内容に少々違和感を覚える。そう言えば、お兄さんって幾つくらいなんだろう？四宮のお見舞いに行つた時に仕事が忙しいとか話があったから、少なくとも24〜5歳といった所だと思っただが。

こういう家柄だから、大学を出ていないという事は無いと思う。本人の希望がどうあれ、進路にそれほど自由があるようには思えない。

……東京に居を構えている、という事は仕事か四宮、いやかぐやかどちらかが理由か。

もしかしたら俺達の先輩、という線も十分にあるな。家柄からして秀知院を卒業していてもおかしくない。

ふむ、生徒会で昔の資料を調べれば何か出てくるかもな。

「あははは、お兄さん、認知症になる様な年齢でもないでしょうに。任せてください、寝る暇もなくなるくらいに遊べるゲームを幾つか紹介させていただきますから。」

ん？気のせいかな、微妙に四宮と藤原の顔が引きつっている。

「嫌だわ、お兄さまだったら。あんまりそう言う冗談は言わないでくださいな。さ、会長も、皆さまもこちらへどうぞ。」

「あ、そうですよね、何時までもここでお話していても仕方ありませんもんね。ささ、会長も石上君も行きましょう！」

何やら慌てた藤原に背中を押され、四宮の後をついていく事になった。

会食は、特別な挨拶とかは無く、お兄さんの簡単な言葉と乾杯の一言で始まった。始める前は色々と緊張もし、お兄さんから何を言われるか不安でもあったが、最初にお兄さんの、

「特にマナーを気にせず、ファミレスで食事をするような感覚で構わない。気楽にやってほしい。肩が凝る様な礼儀を守るのは、仕事の付き合いのパーティーだけで十分だろ。」

まあ、顔合わせ、人脈作りとして決してパーティーは馬鹿にできんのだが。」

との言葉に、俺も石上も幾分救われた気分になった。

全く経験が無いという訳では無いが、それでもこういう席に場慣れしている訳ではないからな。

食事中、石上は雲鷹さんに気に入られたのか、PCとゲームの話で盛り上がり、幾つかのゲームを薦めていた。お兄さんも興味を持ったらしく、一人で始めるのもつまらな

いからと、夏休み中に一度遊びに来ないかと誘われていた。その流れで、彼も一人では来にくいだろうから、と俺も誘われて快諾した。

夏休みに四宮に会うための口実としては悪くない。ご家族にお呼ばれすれば出会うのは必然だろう。

チラリと目をやると四宮も笑顔を浮かべている。問題は無いと考えていいだろう。惜しむらくは、お兄さんは仕事で7月の終わりに一度アメリカに行くらしいから、機会はあっても1〜2度といった所かな。

このままでと、藤原を利用しての四宮と夏休みを過ごす計画は、藤原自身に予定が詰まっているせいでおじやんになる所だったから、渡りに船とはこの事だな。

「お兄さんがこんなに話しやすい方だったなんて、意外でしたよ。失礼ですけど、もうちょっと怖い方かなって。」

でも、本当にお若く見えますよね。

四宮先輩のお兄さんって事は18歳以上でしょうし、もしかして秀知院を卒業された先輩なんでしょうか。

お仕事って言われていましたから、お若く見えてももう成人されているのかもしれない

せんけど。」

俺も興味がある質問だったが、四宮と藤原の空気に微妙なものを感じて、躊躇った質問だったのだが、流石、石上だな。躊躇なく踏み切った。

そして案の定、四宮と藤原、もしかしたらお兄さんも表情を少し強張らせ、空気が凍っていくのを感じた。

早坂視点

会計君の一声で会食の空気が凍り付く。いえ、凍り付いているのはかぐや様と対象F藤原千花ですけれど、雲鷹様も会長さんも二人から感じる雰囲気_Fに顔を引きつらせてしまっている。

まあ、当然、こうなりますよね。解っていましたよ。

「速やかにプランBに移行。女八雲さん、時間を持たせるために男八雲さんのフオローに向かってください。」

プランCの方も準備を始めておいてください。視覚に訴えるイベントで話の流れを

うやむやにしましょう。」

「やっぱり早坂のいう通り、トラブルが起きたわね。折角ゆつくりお休みできるような雲鷹様を取り計らったというのに、結局仕事をさせる事になってごめんなさいね。」

女八雲さんの言う通り、今回は生徒会の皆さんに私の素性を明かさない為、という名目で私は午後半日の休暇を頂いている。

書記ちゃんの前では私は男の子のハーサカだし、会長の前ではスミシー・A・ハーサカだから、雲鷹様が気を使ってくれたのだけれども、この面子が集まってトラブルが起きない訳、無いものね。

心配になって裏方に混ざっていたんだけど、案の定、つて奴ね。

「いえ、どの道かぐや様と雲鷹様が気になって、碌に休めませんから、ここにいる方がいくらか気が楽です。

それに事態が悪化してからフォローする方が大変ですし。」

因みにプランBはシェフが、「本日の料理を担当させていただきました。」と乱入するプランで、会話をぶった切る役目を負っている。

そして、プランCは目の前で仕上げるタイプの料理、この段階だともうデザートを出しても問題ないタイミングだから、パティシエが目の前でデザートの最後の仕上げをして、提供するプラン。

目の前でパウツとクレープに火をつけたりして、会話の流れをコントロールするきつかけを作る訳ね。

かぐや様と雲鷹様なら、ここから話を別方向に持っていく事は容易い筈。雲鷹様がおふぎけにならない限りは、だけど。

あの方、たまにフォローできない悪ふぎけをなさるときもあるから……。

既に四宮家料理人総責任者、とは言っても厨房は2人態勢なんですけどね。えっと、責任者が会長さん達の所まで出て行った。

んん……!?会長さんの目が訝しげに料理長の顔を見ているけど、何かあったかしら。

二人に面識なんかある筈が……あ、いや、もしかしてスマホ作戦の時とか？

ま、まあ、家のコックが休日には街中を歩いていたらとしても何もおかしくない訳だから、バレたとしても問題は無い筈。ただ、次の作戦に彼は使えないわね。

間を持たせるために、八雲ーズ達もメインの二人が飲み物を注いで回っている。

女装していた男八雲が態と低音の声を出しての性別バレという自爆技で、完全に話の流れを吹き飛ばしてくれた。主のためとは言え、その自己犠牲の精神に思わず涙する私。

やらかした筈の男八雲の何となく「やってやったー」とでも言いそうな表情に、ちよつとだけ微妙な気持ちになりながら、最後の止めとして出撃していくパーティシエの背中を見守った。

会食を終えて

一瞬凍結しかけた空気だが、恐らくは早坂の手配りか、足早にダイニングに入り込んできたコックの機転で流れが変わった。

ばれたらバレたでそれで俺は構わんのだが。今更だし、俺の鉄板の持ちネタだからな。かぐやには今後禁止されたネタだが。自分から振るのでなければ問題は無かろう？

とはいえ、もう俺がかぐやに対して壁や重荷でいる必要は無い。一々かぐやを悲しませるような行動を取る必要は……ああ、ちよつとだけまだやらなきやいけない事もあるが基本的には殆どない。

気分的には孫娘の幸せを願う爺ちゃん的心境、といった所かな。

前の人生では孤独のままだったから、親戚の子供達とも交流らしきものは全くなかった。

だから、正確にはこれがどういいう気持ちなのかが分からない。妹であると同時に精神

的な年齢差から考えると曾孫とか玄孫、下手したら来孫、昆孫つて所か。

この場にいる誰であっても俺にとつては小さい子供の様なもの、なんだなと改めて考えると、ふとした寂しさが湧き上がる。

原作の雲鷹は親の命令通り結婚した筈だよな。その辺はもしかしたら反発したのかもしれない。原作ではおそらく、だが少なくとも家族は持っていた、と思う。これも、明記はされていないかったけどな。

原作の彼のように俺も結婚していたら、一時でもこの寂しさから逃れることは出来ていたのかもしれない。その後の喪失に耐えられるかどうかは自分でも良く解らんが。

俺のズルした手品に、目の前の子供達が年相応に驚愕の表情を浮かべ、笑っている。その笑顔を見てほんの少しだけ彼らとのつながりを感じて寂しさが薄まる。

良い歳こいたじじいが女々しいものだな。

「これ、何度考えても種が分からないんですよね。」

お兄さんは一度もそのソファから動いていませんし、お兄さんに近づいた人も誰も居ないのに、何でいつの間にも私のポケットに紙切れが移動しているの？

ねえねえかぐやさん、これ絶対手品じゃないですよ。ただの魔法とかかもしれませんかよ!？」

直感で正解に辿り着く藤原の嬢ちゃん……。恐ろしいな、と内心苦笑する。

最初、雲鷹様と呼んできた藤原嬢に、もつとフランクで構わないと言ったらお兄さんと呼ばれるようになった。適度な距離感だろうな。

「藤原さん、前にも言った通りお兄さまの手品は私も良く解らないですよ。

私、この手の手品の種を見破るのはそこそこ得意なんですけど、こればかりは全然わからなくて。」

既にはダイニングからリビングに移り、各々楽な服に着替えてもらってくつろぎながら、それでも目だけは俺の手品に釘付けになっている状態だ。

アイテムボックスを利用した手品は、マジモンの魔法だからな。常識にとらわれてい

る内はどんな天才でも答えに辿り着けやしないだろう。が、やり過ぎは厳禁。

相手の衣服に物を仕込むときは重さが殆どない物を選ばないと、感覚の鋭敏な者であればコイン一枚であってもポケットに移動させられた瞬間に気が付かれてしまう事がある。

かぐやには一度感付かれて、面倒臭い事になった。それが種を見破るカギになると、一時期必死になって考察していたみたいだけど、ポケットが重くなつたタイミングにどうやってコインを入れたのかが解らなかつたようで、何とか事なきを得た。

確実にそのタイミングでポケットにコインが入つた、という事実がかぐやの思考をうまい具合にロックさせてしまったようだ。

それ以来、他者の衣服に物体を移動させる際には、重さが殆どない一円玉か紙切れにするようにしている。

「いや、本当にこれ何が起きたのか分からない位凄いですよ。え？藤原先輩に事前に仕込んでいたんじゃないかなければ説明つきませんよね、これ。

いや、でも僕も仕込まれた覚えは無いんですけど、ポッケにメモがいつの間にか入っ

ていましたし。」

「石上と俺のはここでお借りした服だからな。前もって仕込んであったと考えれば説明はつくが、問題は書いたメモ書きの内容が全く俺の筆跡のまま、文面も同じという事だな。」

しかも雲鷹さんは一度もメモにも、それを入れた箱にも手を触れるどころか近づいてすらない。

……わからん。」

メモが置かれたテーブルに何か仕掛けがあるのかと会長さんやかぐやたちが調べて頭を悩ませている。いくら調べても、単なる超常現象であって手品としてはズルだから種が解る訳も無いんだけどな。

どうやら会長さん達にも好評の様で何より。

何度かのアンコールを受けた後、かぐやの睡眠時間が近づいてきた為にお開きになった。

何気にかぐやが会長さんの横をキープし続けているあたり、少しほっこりした。俺の

目があるせいかな、会長の方からはかぐやに近づきにくかったのかもしれない。

今日は藤原嬢が泊まっていく予定だったのと、時間も遅くなった事から、暗い夜道を帰らせるわけにもいかないと、会長さん達も泊っていくように勧めた。

「お疲れさまでした、かぐや様、雲鷹様。」

皆が自室に戻って息を抜いている合間を縫って、早坂が声を掛けてくる。

「ごめんなさいね、早坂。折角お兄さまが八雲ーズを貸し出してくれてお休みがとれたのに、中途半端になっちゃって。」

「いえ、問題はありません。私自身は裏方で結構ゆっくりできましたし、美味しい料理もいただけましたから。」

それよりも、本当に雲鷹様の手品って不思議ですよ。私も子供の頃から何度か見せていただいていますけど、未だに種が分からないんですから。」

話を逸らして、主の精神的負担を軽くする。うん、従者の鏡だな。その代わりに俺が矢面に立たされる訳だが。

まあ、嬉しそうな顔をしているから、別にいいか。あと、手品の種はこのままじゃ100年経つても分からんだろうから、考えるだけ無駄だぞ。

「ふん、今後は年齢ネタが使用禁止だと可愛い妹様に申し付かったからな。何とかこの手品一本で場を持たせなくちゃならん。

だから種は教えんぞ？」

可愛いといった部分で嬉しそうな表情を見せるかぐやだが、種は教えんとの俺の言葉にかぐやと早坂の表情がしまったといった雰囲気になる。元々教えるつもりは無かつたけど。二人が何か言っているが軽く手を振ってあしらう。

「それよりも、白銀御行だったか？中々いい男じゃないか。」

意味ありげに視線をやると、一気に挙動不審になるかぐや。え、とかあ、あのとかな言葉にならない声が漏れる。

悲しませるつもりは無くても揶揄うのは楽しいものだ。やり過ぎると意固地になつて返つて道を歪めてしまふだろうから、手早く切り上げるが。

「落ち着け、俺は別にお前を揶揄うつもりは無いんだ。」

嘘だけだ。

「俺個人の感想としては、白銀御行という人間を俺は気に入った。それをかぐやに伝えておきたかっただけだ。」

お前がどう思っているかはわからんが、な。」

顔を真っ赤にして「私は別に」とか「お兄さま、勘違いなさらないで」とか漏らしている。この時点では確か、早坂に突つ込まれても会長さんに対しての気持ちは否定していた時期だな。

早坂も少し責めるような目で俺を見る。まだ早いですよ、とハンドサインで伝えてきた。いや、特に今までハンドサインなんか使ったことは無いんだが、何となくジェスチャーでわかる。

「まあ、俺が勝手に良い奴だと思ったという話だ。変に勘違いしなくていい。

四宮の家として、しがらみもあれば色々な考え方もあるだろう。親父や兄貴がどう考えているかもな。

ただ、お前には好きなように生きてほしいとは思っているよ。お前は強くなった、だろ？」

スツと氷のかぐや姫の表情に戻るかぐや。冷たい目で俺を見つめながら、少し考えている。やがて何か覚悟を決めた様な真剣な瞳を向けてきた。

「それが、四宮を。お父様やお兄様方を裏切る様な生き方でも、ですか。」

先ほどまでの暖かい、柔らかい雰囲気吹飛ぶ。早坂も僅かに顔を青くして、心配そうに俺を見ている。

冷たいままのかぐやの頭を軽く撫でる。吃驚したのか、身を竦める氷かぐや。

「ここが俺にとっての最初の山場って奴かな。」

「いいんじゃないか？それでも。女の子一人の人生を生贄にするような生き方は、出来れば俺はしたくないからな。」

その為に、それなりに力を付けたつもりだ。」

かぐやの表情が緩む。リボンが似合うあの表情に少しずつ戻ってきた。

「とは言え、しがらみと言うものは中々に厄介だからな。そう簡単に人情って奴は切り離せるもんじゃねえ。親も肉親もな。」

俺の言葉をかみしめるようなかぐや。

「切り離す、ですか。」

「そうなつちまうこともあれば、そう見えてしまう事もあるって事だ。簡単に結論が出る話でもねえ。ま、今は深刻に考えるな。」

悩み事があつたら相談しろ。俺で良ければ、だけど。

ああ、知つての通り俺は独身で浮いた話一つない男だからな。
恋愛相談は苦手だが、たつての願ひと言うならば受け付けなくもないぞ。」

途端に慌てた顔になるかぐや。女の子だな、コロコロと表情が変わる。

「れ、恋愛相談つて、私はまだ誰も好きになつたりしていませんつて。ねえ早坂!？」

テンプレートのような反応を返すかぐやをあやす様に早坂が動く。

「かぐや様、あんまり藤原さまをお待たせしてはいけませんよ、ささ、お部屋に戻りましょうね。」

「ちよつと、早坂、まだお兄さまの誤解を解いていません。」

「ここにで変に誤解を主張する方が余計に疑われちゃいますよー。いいから早くいきましようね。」

早坂に少々強引に連れていかれるかぐやを横目に、おやすみ、と一声告げて自室へ戻

る。

……さて今回、場を少し動かした。この程度では原作の流れが変わるような事にはならないかもしれない。ただ、要所要所でのかくやの精神的負担が少しは軽くなるかもしれない。

原作の再現には出来れば拘りたいが最低限、あの二人が幸せになればそれで目的は達成されると判断しても良いだろう。

出来ればその先も拘りたいものだが。

先を何度か占う。半年先、その先。占う未来が遠ければ遠いほど、占いの精度は落ち、未来は揺蕩い始める。

だが試行回数を増やしていけば、段々と確度を増していく。

もう直ぐ親父が倒れる。原作通りなら一度立ち直るが、今回はどう転ぶか……。

占いを続ける。

親父が倒れるタイミングで、四条との抗争が水面下で活発化するだろう。此方が四条を刺すタイミングは、四条が四宮を刺した時。資金はその時の為に、少々過剰なほど用意できている。

投資や投機は元金が大きければ大きいほど、リスクもリターンもでかくなるからな。

アザーセルフを起動して作業を再開する。アメリカの本社に戻ってから少々忙しくなる。日本で遊んでいる間に、どんどん案件が貯まってきている。もう一人の俺がPCに向かうのを横目に……。

占いを繰り返す。……ツ……チャ。

揺蕩う未来のその先にかぐやと白銀の笑顔がある事を願って……。

アソート3

石上視点

「よう、石上久しぶり。」

黒い高級外車から顔を出して声を掛けてくる会長に、軽く手を上げて答える。

「久しぶりと言う程期間は空いていませんけどね。精々1週間ですか。」

「ああ、すまん。俺のバイトの都合に合わせてもらって。それにしても態々黒塗りの高級車でお迎えとは、少々気が引けるがな。」

八雲さんがドアを開けてくれて車に乗り込む。うん、男の娘な八雲さんの方だ。正直、男の人だつてわかった時には本当に驚いたし、男の人もこんなに可愛くなれるんだって初めて知ったんだよな。あの衝撃は少々、僕の中の何かを揺らしてしまったけど、この一週間で何とか立て直せた。

今日また出会って、少し揺らいでいるけど。

ああ、それにしても車内はクーラーが効いていて涼しいな。別の事を考えて心の健全性を確保しよう、うん。

「夏ですからね。家に着く前に汗をだらだらかいていたら、匂っちゃいますし、会長の家ってそれなりに距離がありますから、気を使ってくれたんだと思いますよ。」

「匂うか、マジか。ヤバいな。」

会長の顔が少し引きつって、体臭チェックを始める。いや、普段からその辺は気を使っていますから、汗臭かったりはしないんですけどね。

「大丈夫ですよ、普段、そんな汗の匂いしたりしませんし。ただ、あちらが気を使ってくれたって話で。」

そんな事を話していると、ボソツと車を運転してくれていた男の娘八雲さんが呟く。

「お客様のお話には口をはさむ無礼をお許しください。

雲鷹様は今後もお二人をお呼びする際には車をやると思いますが、どうぞ遠慮せずにお受けいただけると助かります。

少々、事情がありました……。」

運転席の八雲さんの表情は良く解らない。だけど多分、これ詳しく話を聞いてちゃ駄目な奴……だよな？ここで「事情って何ですか？」なんて聞いたらまたやらかしてしまう気がする。

「そうですね、わかりました。態々お手間を取らせるのが少々心苦しかったもので。そうおっしゃるのであれば、お言葉に甘えさせていただきます。」

会長は深く突つままずに、軽く流す事にしたようで、僕にも視線をくれた。了解です、会長。無言で少しだけ頷く。

うん、僕にもこういうやり取りは出来るんだな。

1週間ぶりに訪れた四宮先輩の家では先輩とお兄さんがそろって出迎えてくれた。……四宮先輩が満面の笑顔で会長を見つめているんだけど、本当に会長の事何とも思っていないのかな。

いや、ここに突つ込むのは命がいくつあっても足りない行為。学んだじゃないか石上優。それに本当のところがどうであつたとしても、多分、触れないでいた方が良いでしょう。ラブコメとかギャルゲなんかのパターンでもそう言うのあるよな。

周囲が囁し立てるせいで駄目になつちやう恋とか。四宮先輩、結構意地っ張りの様な気がするし。僕が下手に口をはさんだせいでどうにかなつてしまつたらと思うと……。うん、やめとくほうが無難だ。

会長は……。どうなんだろう。多分、四宮先輩のこと好きだと思つただけど、以前四宮先輩の地雷を踏んだ時の事がトラウマになつていて、聞けないや。

自分に置き換えてみると、と。あ……。多分聞かれても素直に認めないだろうし、会長だつてきつと否定するだろうから。会長から何かを言わない限り黙っている方が正解なんだろう。

雲鷹さんのお部屋は仕事の資料があつて、使えないという事でリビングにPCを何台か持ち込んでレクチャーをする事になった。

この前も来た事があるけど、本当に広いリビングで、ゲーミングPCも……、また持ち込まれてきたけど全部で何台あるんだろう、これ。

「いや、PCについては仕事で使う以外では詳しくはないからな。何も調べずに必要なパーツをとりあえず買い集めて、パズルみたいに組んでいたんだ。

後で聞いたけど、色々と相性とか、元々使えないパーツとかがあるようだな。

だから、余ったパーツで良さそうなものを組んでいたら、PCが増えた。」

いや、増えたって……。この部屋に置いてあるだけでも6台くらいあるんですけど。

「調子に乗って色々とそろえたからな。まだ使えていないパーツもあるし、後何台かPCを組めるとは思うけど、これ以上作ってもな。

もしよかつたら余っているパーツ、幾つか持っていくか？」

……金持ちなんだなあ、本当に。まあ、新しいグラフィックボードは欲しいとは思っていたし、遠慮なく後で見せてもらうとして、まずはやるべき事をやらなくては。「ええ、宜しければ後で見せてください」と返事をして、自分のノートPCを取り出し、準備を始める。

「ああ、会長さんはPCにはあんまり興味はないかな。」

「いえ、そんな事はないのですが、自宅には自分のPCがありませんから、あんまり詳しくないんですよ。」

「なるほどな。もしよかったら余らせてしまっている奴を何台か持って行ってくれればいいんだが。」

会長は先輩の方をちらりと見てから少し考えていたようだ。

「いや、残念ですが頂いても多分使う時間が無いと思います。色々、やらないといけな
いことも多いですし。」

会長の言葉に何度か頷く雲鷹さん。そりやそうですよ。生徒会業務にバイトと試験で1位になる位の勉強、だけじゃない。他の生徒が起こす面倒事に巻き込まれたり首を突っ込んだり。そのおかげで救われた一人が僕だ。本当にちゃんと眠れる日ってほとんどないんじゃないかな。

「そうだろうな。何せ秀知院の生徒会長さんだ。」

成績もトップなんだって、と聞きながら僕が開いたノートPCを覗き込む雲鷹さん。

「ああ、そうなると会長さんは時間を持って余すかもしれないな。かぐや、悪いが会長さんの相手をしてもらえないかな。」

ホストの立場である俺がもてなせないのは心苦しいが、俺達がただゲームをしているところを見ると言うのも二人とも詰まらんだろう？

「良ければ二人でお茶でも飲んでいてくれ。」

悪戯をしているかのような表情をお二人には見えないように背を向けて、顔はノート

に向け、軽く僕にウイंकをする雲鷹さん。

……ああ、なるほど。

「ゲームを見学するにしても、最初の内はダウンロードとかインストールで結構時間がかかりますし、暫くは特に見るものも無いですから、暇つぶししておいた方が良いでしょうよ?」

「ここは合わせた方が良いでしょうな。」

「え、ええ。私としては皆さんとここ一緒するのも吝かやぶぎせではないのですが、お兄さまと石上君がそう言うのでしたら。」

「え、あ、はい。お気遣いありがとうございます。折角ついてきたのに放っておく事になつてすまん石上。」

意外と素直に誘導に乗るお二人。やつぱり、間違いないそうだよな。ただ迂闊に触れちゃいけないって感じはするから、ここは流されておこう。

以前、四宮先輩に殺されそうになったのって……。

「かぐや様、あちらでお茶の準備ができております。」

流れるようなタイミングで女八雲さんが二人を誘導していく。部屋を出る前に右手でサムズアップしていた。

「……えっと、まだ作業続ける必要ありますか？これって僕が出汁に使われたって事ですよね。」

別に腹は立ちませんが。お二人を応援したいって気持ちはちゃんとありますし、二人がお似合いだっけ言うのは前から思っていたから。

それに会長には返しきれない位の恩義がある。……ついでに言うなら、四宮先輩には怖いから逆らわない様にしておいた方が無難だし。

「いやいや、出汁にしちまったのは悪いとは思いますが、あつちはついでだよ。かぐやや

会長君の気持ちも俺は確認した事がないからな。
気晴らしになってくれればと思っただけだ。」

素直にその言葉を信じる程単純な性格じゃないけど、お兄さんも良い人だしな。ここは捻くれずにそのまま受け取っておこう。

「ゲームに興味があるのは事実だから、頼まれてくれないかな？」

実際やる事が無くて暇だったのは本当なんだよ。今はネットワークで人とゲームしたりできるんだろう？

一緒に遊ぶ奴もいないから、君が友達になってくれるなら嬉しいんだけどな。」

最初からそのつもりだったけど、本当に良いのかな？ 四宮家の人でお仕事していて、従者の人達が沢山いるような人とやり取りするのは緊張するけど。ま、リアルであんまり接触しないなら問題も無いだろうし、後は怒らせないように気を付ければいいよな。うん。

四宮先輩よりは怖くないよな……多分。

「友達、ですか。もちろん良いですよ。最初から僕が所属しているディスコードの

サーバーを紹介するつもりでしたし。」

「ディスプレイコードと言うのはロインとはまた違うものなのか？」

何度もされた事のある質問に思わず苦笑を浮かべてしまったけど、初心者では仕方ない。凄い人が仲間が増えるな、と少しウキウキしながら僕はレクチャーを始めた。

早坂視点

「く。ぷ。ふ。ええー。」

思わず変な声が漏れて出る。さつきから何度もかぐや様に半裸で連れまわされたから、落ち着いてお風呂にも入れない。

折角、雲鷹様の計らいで夏休み中にも会長さんと会えたのに、結局この後の約束が出来なかつたみたい。

考えてみたら当り前よね。自分から誘う事が出来ないから書記ちゃんを出汁にしようとしていたのに、今更二人きりにされてもいつもの駆け引きが始まっちゃって、お互いにお誘いなんかできないでしょうに。

喉が渴いた時に中途半端に水を飲むと余計に喉が渴くようになって僅か数日で欠乏症のようになったわね、かぐや様。

結局会長さんの鍵垢も見れなかったし、どうしようもない方達よね。どちらかが素直になれば簡単に幸せになれるのに。

会長さんの態度を見れば、かぐや様に気が有るのは確かなんですし、なんであそこ迄バレバレなのにかぐや様が躊躇うのかが分からないわ。

私なら……。

「ふうふうー。」

また声が漏れる。

私なら、こんな簡単な場面で二の足を踏むだろうか。少しだけある人の事を考える。何度考えても、優しくはされても真面に相手にしてくれる姿が頭に浮かんでこない。

ふと、なんでそんな事を考えたのかという疑問が浮かんで、のぼせかけた頭を左右に

振る。そしてここ数日私を悩ませている問題に思考をさく。

「あれは一体何だったんでしょう。」

目の錯覚だったのでしょうか。最近、ちよくちよくお休みを頂けていたから、以前よりも疲れがたまっているという感覚は無いのですが、やっぱりどこかに疲れがたまっていたのかな。

暫くはシヨックで仕事に付きませんでしたけど、かぐや様が今日の様に色々トラブルを持ち込んでくれるので、何とか日常に戻ってこれた。

でも、あれが本当に目の錯覚では無かったとしたら、らしいと言うかなんというべきか。何となくあつさりと納得できてしまう気がする。

それなりにシヨックだったはずなのに何で今はこんなに落ち着いているのかも……。ああ……。そうだとっても不思議じゃないって思っていたから、かなあ。

「やっぱりハードル高いかなあ。」

そんな眩きが漏れたのとはほぼ同じタイミングで浴場のドアが勢いよく開かれる。

「早坂!! すぐ来て!!」

「いい加減にしてください!!」

結局半裸のまま私は連れ出され、何の因果かそれとも必然なのか、偶然通りかかった雲鷹様に半裸を見られてしまい、更なるトラブルが起きるのですが、それはまあ、不幸な事故だったという事で。

かぐや様、まじ反省してください。

……雲鷹様の顔は吃驚して、赤らんでいたから、私に対して何も感じていないって事は無い筈よね。少なくとも子ども扱いされて、全く相手にされていないって言う事はなさそう。

「ま、今はそれでいいです。」

「何か言った？早坂。」

「いいえ、何も。いいからかぐや様はマジで反省してください。」

シユンとするかぐや様。悪いとは思っているみたいね。

そんな雲鷹様がアメリカに向かう2日前の出来事だった。

好きになれそうな夏休み

お兄さまがアメリカに旅立ってから、急に家の中が寂しくなった。まるで火が消えたようにって例えがあるけど、本当のそのままね。

いらしたとしても、火に例えられるような騒がしさみたいなものはありませんでしたけど、暖かさは確かにあったのですから。

夏休み中にはお帰りになるという話ですから、もうそろそろお帰りになるとは思うのですけれど。

明後日はお兄さまも楽しみにされていた花火大会ですし。

旅立たれてたった数日で、何時もご一緒にしていた夕食が美味しく感じない。味気が無いように感じてしまう。また、いつもの一人の食事に戻ってしまっていました。

夏休みじゃなければ、学校で皆さんと昼食をご一緒出来るのですけれど。

早坂も何処か元気が無くなった様で、いつもと違う様に見えるし。

皆さんを招待してから数日の間、何か考え事をしているのか、話しかけても反応がな

い時があったけど、お兄さまが居なくなつてからは少しの間、ボーっとする事が多くなつて動きも少々緩慢に感じたわね。

お兄さまとSNSなんかで連絡を取り始めてからは、少し元気が出てきたみたいだし、お帰りの予定が近づくとつれ元氣になつてきていますけど。

狡いわね。私は会長と中々やり取りできないし、鍵垢もまだ見れないのに。

まあ？必要な情報は早坂が教えてくれるから、問題はないのですけれど。いえ、やっぱり自分でちゃんと会長の呟きを読みたいわね。

「まだ諦めていなかったんですか？会長からかぐや様の鍵垢への承認要求、結局来てくて鍵かけるのも止めちゃいましたよね。」

多分、あんまりTwitterを見ていないんだと思いますよ。」

「この件は、会長とは関係ありません。ただ、私もTwitterというものをやつてみようと考えただけですから。」

「だから、なんでその言い訳を一から十まで相談を受けていた私にするんですか。意味無いどころか、意味深な本心の露呈になっちゃっていますから。」

ぐうの根も出ないように封殺されてしまった。こういう話では早坂に勝てる気がしない、のはつい最近までの話。

多分、その気になれば……、お兄さま関係で弄っていけばせめて相打ちにまで持つていけそうな気がするのよね。勘、ですけど。

……止めておきましょう。本人が何処まで自覚しているのかわかりませんし、間違えば取り返しがつかない事もあるのだから。

もう少し、双方の状況がつかめないと動きようがありませんし。私自身、その件についてどう望んでいるのかも判りません。

お兄さまの婚約者の方は、私が産まれる前にお亡くなりになったので私は写真でしかお会いした事がありません。どういう方だったのかもお兄さまは御話になった事がありませんから、良く知りませんが。

その後どなたともお付き合いをしていないという話は聞いたことがあります。あく

まで噂で、ですけれど。お兄さまが仕事が忙しくて、出会いが無いんだと仰っていたとか。

言い訳、ですよね。

お兄さまの内心を私が理解するには、まだ色々足りるものがあります。私の為に心を鬼にして厳しく育てていただきましたけど、その実、お優しい人である事は厳しかった時期にも探ればチラホラと見えていました。

ただ、こういう恋愛関係の、それも悲恋の話になってしまおうとお兄さまの心が私には一切想像できなくなる。

こういう言い方は良くないのかもしれないけど、それでももう二十年近く昔の話。お兄さまには振り切っていただけで、一度周りを見渡す心のゆとりを持っていただきたい。

無論、自分の件すら碌にコントロールできていない私に、お兄さまにアードコーダ言う資格はないのかもしれないけど。

「かくや様、可愛くお悩みの所申し訳ありませんが、そろそろ皆さんのお出かけの準備を始めませんと。

今の内からコーディネートしておかなければ、当日の朝、慌てる事になってしまいませんか？」

あー、もう、誰の為に頭を悩ませていると思つているのよ。半分は貴方の為に悩んでいるつて言うのに。もちろん私の予想が当たっていれば、の話ですけれども？

でも、明日はいよいよ皆と初めてのお出かけ。会長の妹さん、圭さんと一緒にウインドウショッピング！藤原さん達も着てきますが、まあ、いきなり二人きりと言うのも少々ハードルが高いかもしれませんが、一歩一歩ステップを進んでいくのも悪くはありません！

そしてお出かけ当日の朝、いつもよりも早く起きて、昨日決めた筈のコーディネートをつか微修正しつつ早坂とウキウキした気持ちで衣装合わせをしていた時。

本家の使用人の怖い方と強い方が揃つて私の前に現れ、お父様に呼ばれたのでこれか

らすぐ京都に向かってほしいと言われてしまった。

……。

車で移動中に藤原さん達に、急用でいけなくなった旨と謝罪のメールをして早坂と共に京都を目指す。少ししたら、予定延期のメールが帰ってきた。

申し訳ないとも思ったけど、嬉しかった。藤原さんが今まで何度か「私を除け者にして」とか言っていましたけど、確かに。

皆が揃うのを待つて予定を変えてくれるというのは、申し訳ない気持ちもあるけど有難いという気持ち強いかもしれない。

私は、まだ大丈夫。

「ああ、居たのか。」

京都の本宅に着いて、通された部屋で待っているとお父様が部屋の外を通った際に、呼び掛けた私に返してくれた言葉。貴方が私を呼び出したのではないの？何故、顔も見てくれないの？

「(一)苦勞。」

振り返りもせず、顔を見るでもなくそのまま何もなかったかのように立ち去るお父様。

ならば何故呼んだの？愛してもいない子供なら放っておけばいい。何故、こんな風に弄ぶの？

「こんな場所に呼び出してそれだけですか。……くたばれクソ爺。」
早坂の眩きが、私に寄り添おうとしてくれるその気持ちが私の心を支えてくれる。

私は父に……愛情を与えられた記憶が殆どない。僅かな記憶もそれが愛情なのか私には分からない。

私がつっている家族の愛は、殆どがお兄さまに頂いたものだ。

ただ、父が、お父様が切なげな顔で私を抱き上げ、お母様を見ていたのは覚えている。それは私に対する愛ではなく、母に対しての愛だったのかもしれない。

でも、少なくともその父の愛かもしれない記憶が今の私の一部を支えていたのも事実だ。

大丈夫。今更父親の愛情を求めて苦しむような無様はしない。期待もしない。傷つきもしない。私はお兄さまに強くしてもらったから。

お父様だけではない。お兄様方お二人はまだましな方。時折顔を合わせる親戚やその周囲の者達は私を腫物扱いする様に接する。人によつては居ない者かのように。

別に問題は無いわ。私が欲しいものを貴方方は持つていないから。

それに明日は、ずっと楽しみにしていた花火大会がある。会長も藤原さんも石上君も。私に色々な物をくれた生徒会の皆が、久しぶりに集まって皆で花火を見に行く。

今までずっと嫌いだつた夏が、多分、明日一日の出来事で大好きになれるかもしれない。

初めて友達と、後輩と、そして会長と窓からの小さい花火ではない、大きな花火を見に行けるのだから。

だから……。

「なりません。」

本家の怖い方の使用人がこんな事を言っても……。

「最近のお嬢様の振る舞いは目に余ります。人ごみのある……。」

途中から聞く気も失せるわ。適当に残念な表情を浮かべてシヨツクを受けたふりをする。大人しく会長たちに参加できなくなった旨、メールをする。怖い方の目の前で。納得したのか、そのまま頭を下げて退出する本家の使用人。ふんっ。お兄さまがいる間は八雲ーズの端っここでお兄さまの金魚の糞をしているだけの癖に、お兄さまがお出かけになったとたんしやしやり出てくるなんて。

……いや、でも確かに怖いんですけど。

こんな程度では負けない。負けるつもりは無いわ。でも、心に全くダメー지가無い訳でも無い。心にどうしても浮かんでくる弱音を、ベッドに横になつて涙と一緒に吐き出す。

大丈夫、本気じゃない。既に早坂には目で指示を出している。Twitterにも助けて、のサインを出した。「みんなと花火がみたい」と一言。

もしかしたら会長が私を見つけてくれるかもしれない。

涙と抑えきれぬ嗚咽が部屋から洩れる。彼女たちは私の涙を見て、私が本気で諦めたと信じるでしょう。

嫌、何か駄目。

演技のつもりの涙が、私の心の壁を内側から揺らし始める。涙が止まらない。ネガティブな思考が頭を支配する。もう一生誰にも会えなくなっちゃうんじゃないか、なんてありえない考えがつい口に出たりもした。

結局、少しのつもりで流した涙は思いの外続いてしまつて、時間を圧迫してしまふ。

何とか呼吸を整えて涙を止める。自分でも気が付かないうちに色々溜まっていたみたいね。時々、こうやって泣く事で心をリセットできるつてお兄さまが教えてくれたこ

とがあつたつけ。

お兄さまもこうやって泣いたことがあるのかしら。

「かぐや様、時間がありません、そろそろ頃合いかと。」

「ありがとう早坂。ああ、ベッドで泣き崩れたままだと、あいつらが確認の為に側に寄ってくるかもしれないわね。」

「かぐや様が花火を楽しみにしていたのは、この屋敷の全ての使用人が心得ています。私がかぐや様の振りをして、窓から外を見て誤魔化しますよ。」

もし、かぐや様がお望みなら、本家の使用人の数人、今後行方不明になっていたく事も可能ですし、一声かければ喜んで実行する者がこの屋敷には集められていますよ？」

お兄さまが以前教えてくれた。この屋敷に集まっている使用人は、私を主として認めている者たちだけで構成されているって。本家の使用人は除くけど。

だからこそ、迂闊な事は言えない。

「そう言う怖い事を言うのは止めて。貴女にもそんな事をさせる訳にはいかないし、お兄さまにも軽蔑されたくはないもの。」

クスツと早坂が笑ったような気がした。

「さあ、早くこの部屋から脱出してください。表には車を用意してあります。急だったので手配できたのは民間のタクシーですけど。本当に時間がギリギリなんですから、急いでください。」

急かす早坂の声に背中を押され、急ごしらえのジツプライン、といって良いのかしら？の滑車を使って緊急脱出よ！

「早坂、ありがとう！」

待っていてね、会長、皆！

切り取られた都会を見つめて

四宮邸、かぐや様の部屋の窓。それに切り取られた小さなビル街の夜空。一人取り残された者の心情を描いた絵画の様なそれを、年に一度小さな火の花が彩る。

遠雷の様な、それでいてパラパラと散って行くような破裂音が光から大分遅れて耳に届く。

花火大会かあ……。

花火大会の会場で見たとしたら、どんな感じなんだろう。そうふと思ってみて、そう言えば私自身、花火大会なんか見に行ったことが無いなと思いつ出した。

かぐや様にお仕えする前は、まだ小さすぎたし、両親も忙しかつたのでどこかに連れて行ってもらった記憶は殆どない。もしかしたら私自身覚えていない位小さい頃に連れて行ってもらった可能性もあるにはあるけど、記憶の限りでは、こんな大きな花火を見に行ったことは無い。

かぐや様にお仕えしてからは、当然主を置いて花火見物をしに行く訳にもいかない。意地っ張りで寂しさをおくびにも出さないかぐや様の側に仕えていたから。

ここから会場まで車で10数分で付くでしょう。手配したタクシーは評判のいいドライバーを見繕ってもらいましたし。

今頃はかぐや様もこの花火を生徒会の皆さんと一緒に見ている頃だろうか。もっと大きな花火を、もっと大きな音で。

再度、切り取られたビル街の夜空を火の花が彩る。

小さく彩られた一瞬の景色に見とれる。ああ、私も誰かと花火を見に行きたい……自分の心の中にある欲求が頭をもたげる。

幾らかぐや様の姉ポジだったとしても、私だって年頃のJKだし、好きな人と一緒に花火を見に行って屋台でかき氷を食べたりしてみたい。タコ焼きだって食べてみたいし、綿菓子やりんご飴を食べて真っ赤になった舌をべーってやって見せ合ったり。

ふと見せ合うシーンを妄想して、何故か目の前に雲鷹様の幻想が浮かんで一瞬呼吸が止まる。

特別な意味がある訳じゃない、と思う。ただこの所、雲鷹様について考える事が多かったから。

……なんとか立て直しても、もう妄想に浸る心情にはなれなかった。

雲鷹様、か。

心に浮かぶのは雲鷹様がアメリカに発つ前のあの光景。珍しく、扉の外に護衛の八雲ーズはおらず、ドアも少し開いていた。

屋敷内とは言え物騒な。

雲鷹様の身に万が一があつたら、それだけで四宮の海外事業は大混乱を起こすし、それは容易に世界経済に深刻なダメージを与える事になる。雲鷹様の個人資産も既に四宮家で並ぶ物が無いほど莫大なものだけど、彼が四宮家の海外部門で持っている権限、利権はちよつと理解できない水準に達している。

もう一つの四宮家と言つても過言じゃないみたい。

彼が急にいなくなるだけで、少なくともアメリカとヨーロッパを中心に経済はしばらく大混乱から立ち直れなくなるだろう、と、八雲ーズが胸を張って話していた。そして彼には後継者も配偶者もない。

彼亡きあと第三者を納得させる事のできる後継者は、恐らくはこのまま行けばかぐや様になるかもしれないわね。

……亡き、なんて言っただけで亡くなるどころか老いる、というか成長途中で止まってしまっているように見えるから、そんな話は出てくることも稀みたいだけど。

かぐや様が後継になる話は兎も角、世界経済の混乱、その辺は本当にそうなのか、私には分からない。八雲ーズが私をからかっているだけかもしれない。

ただ、雲鷹様がMIPである事は間違いない。

だから屋敷の中とは言え、周囲の者は気を抜く事は許されないと、せめて戸締りくらいはちゃんとしなくては、と少し開いたドアを閉じる為に近づいた。

その日の光景は、未だに理解できない。あれは……何だったのだろうか。

ただはつきり言えるのは、その日も私は疲れていたという事。そして部屋の中に少なくとも二人、もしかしたら三人の誰かがいたように見えた。

顔は見えていない。ただ二人の後姿は雲鷹様にそっくりで、声も……。

あの日以来、時折その光景が頭に浮かんで私を悩ませる。

普通なら「私は疲れているんだな。」で終わってしまう話なんだけれども、相手はあの雲鷹様。私は違うと信じてはいるけど、経済界の界限では仙人ではないかと、いや彼は魔王だ、などと冗談半分。そして半分は真剣に噂される人物なのだから。

……いや、でもあの後気が付いたら自分の部屋の前に立っていましたし、やっぱり疲れて変な幻覚を見たのかもしれない。ショックで呆然としながら歩いていた記憶なら、おぼろげにあるのですが。

無論、雲鷹様に直接問いたです等出来る筈ありませんし。笑われて種明かしをされて正気を疑われて心配される、までのフルコンボを食らう所まで容易に想像がつきません。

それに方が一、私の見た者が本当の事だったとしたら、妙に納得してしまうのも怖いものでして。

……何に対して怖いんだろう。雲鷹様がもしかしたら普通の人間じゃないかもしれない事が怖いのか？ううん、雲鷹様は怖くないわね。

雲鷹様はどうして年を取らないのかしら。雲鷹様は私が年をとつてもお若いままなのかしら。

そんな想像は当然、単なる妄想に過ぎないわね。普通なら。だから真剣に悩んだり怖かったりすることは無い、はずなただけ。

……あはは、ダメダメ。そんなあり得ない妄想に時間を使うよりもつと建設的な事に時間を使わないと勿体ないわね。

あの日私は疲れていた。雲鷹様に正気を疑われるような事は話せないし、変に思われたくないもの。

まあ、種明かしをされる前に少し調べる程度の事はするけど、あくまで主の兄様の周

辺警備に役立つる為の情報収集だから、これは。

ん……種明かし？

あ、……もしかしたら。雲鷹様と言ったら仙人ネタと手品の人です。社交的には、ですが。

そしてもう一つのヒントは、普段なら部屋の外で警戒している筈の八雲一ズ的面々がドアの側にいなかった。

部屋の中には雲鷹様に似通った人影が少なくとも2人、もしかしたら3人いた。そして普段からドアの外で待機している人員は2人。私は二人の顔を確認していない

どうやって声を重ねる事が出来たのかは、多分単純な答え。普通に録音しておけば問題ない筈。

気づいてみれば単純な答え。今迄、私やかぐや様がどんなにおねだりしても手品の種だけは教えていただけませんでした。これはチャンスかもしれませんね。

あの雲鷹様が初めて見せた隙かもしれません。

雲鷹様がやる手品はほぼ全てがテーブルマジックと言われる、所謂小規模な手品ですが、先日、かぐや様に仙人ネタを封じられてから、残ったネタの新規開発に大掛かりな

手品を模索中、とかかも知れませんかね。

大規模なダムも蟻の一穴で崩壊する事もある、と聞きます。ここを起点に今まで謎でしかなかった手品の種も判明するかもしれません。

「ゲームセットです。」

その声が、いつの間にか窓からの火花から意識を離していた私の思考を断ち切る。

本家付きの怖い方、とかぐや様に呼ばれている使用人が後ろから声を掛けてきた。溜息を外には出さずに飲み込み、振り返らずに答える。

「バレましたか、かなり自信はあったのですが。」

「いえ、全く気が付きませんでしたよ。今、雲鷹様がかぐや様に付けている護衛の者たちから連絡があつて初めて気が付きました。」

貴女も雲鷹様とは別に何人か早坂家の手の者を付けていますよね。」

いくら主の希望を叶えるためとは言え、無防備に年頃の女の子を一人、街の中に放り

出すような事はしない。雲鷹様が出国する前に手を打っている事は気が付いてはいたけど、此方も打てる手は打っておくのは当たり前。

「追わないんですか？」

彼女達からすれば黄光様から叱責を受けてもおかしくない事態。いや、かぐや様はそこまでされるほど大事にされているとは思えない、けど名家の面子と言うモノもある。四宮の紅一点、一人娘が変な事件に巻き込まれる訳にはいかないという事情も分かる。籠の中の鳥にはそうなるだけの事情があるという事。

「私達も鬼ではないのです。心配なのは花火大会の渋滞で警備の者の配置が上手くないかない事です……。」

既に雲鷹様が交通渋滞を想定した警備プランを用意していらつしやったらしいですから、私達はここでお役御免、漸く一息つけるといふ事です。」

かぐや様には決して見せない様な疲れた表情をして、隠しもせず溜息をもらす怖い方。いや、なんかかぐや様が名前を呼ばないから私まで怖い方、強い方で覚えてしまつ

たじやない。

いや、そんな事はどうでもよくて、その怖い方の言葉にハツとする。ああ、花見大会当日の渋滞の可能性を忘れていた。かぐや様にはタクシーを手配しておきましたけど、ほぼ確実に渋滞に巻き込まれるでしょう。

不味い、当日の交通状況を考慮に入れなかったなんて考えが浅かったわね。無意識にスマホでかぐや様のTwitterを確認する。

かぐや様の追加の呟きも会長さんの書き込みらしきものも確認できない。見ていないのか、見る余裕がないのか。かぐや様は確実に後者よね。

ただ、もう今からでは私に打てる手はない。まあ、それでも……。

花火大会に間に合うかどうかは、もう非常に微妙な状況になりはしたけど、なぜかそれほど心配する気にはなれなかった。会長さんはあれはあれで只者じゃないですし、かぐや様も渋滞の中タクシーで大人しく花火大会が終わるのを待つような方じゃない。

窓から飛び出していくときのかぐや様の笑顔を見ていたから、不思議と大丈夫だと思

える。

間に合っても、間に合わなくても。

きつと、彼らは彼等自身で色々乗り越えるでしょう。

……おそらく周囲に雲鷹様の手の者もいる訳ですし。

気が付くと、私の後ろにいた筈の怖い方の使用人は姿を消していた。名前は確か後藤とか何とか言っていたような気がしたけど、あれ？それは強い方でしたっけ？

不味い、本格的に怖い方と強い方で覚えてしまっていて名前が出てこない。

「ふむ、日本で花火を見るのも何十年ぶりか。こういう風に窓から覗く花火にも中々風情があつていいじゃないか。」

ふと、後ろから掛けられた二人目の声に、一瞬跳ねそうになる身体を押さえつけ、私は振り返りもせず言葉返す。

「お帰りなさいませ。」

視線は花火で彩られた絵画から外さずに。振り返りたくなる気持ちを必死に抑えながら。警備の方からかぐや様に関して報告を受けているかもしれないけど、まだ受けていないかもしれない。

意外と雲鷹様は面倒くさがりだから、大きな問題が起きていなければ報告は後回しにされることもある。

さて、雲鷹様は、私が早坂だと気が付くかしら？そんな悪戯心がほんの少しあったから。